

れに浸つてゐる作者の心境とが想ひ浮かばれる。

〔水の面は動くともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮かびかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ〕——雨の隅田川の水面に見入つてゐる作者の姿までも髣髴する。

〔みをの一筋は、さしひく潮にもまじらで、とはに縹の色に流れ往にて、沖に出づめり〕——隅田川の水脈を力強く、且明確に描き出してゐる所、まさに一篇の中核をなす観がある。以下の敘景、この隅田川を核心とした展開としてのみ生動の趣を具へて来る。筆致も以下軽々と運ぶ趣である。

〔すべてひと日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ来て、岸の木立も長き堤も、或はあらはれ、或はかくれて、限りなき青海原に向かひたらむやうに覺ゆる折もありけり〕——一日中に於ける風による景趣の變化を點綴して、敘上の觀察に一脈の生氣を通はしてゐる。

〔秋ふけての歌〕——敘上の情景から躍出して畫龍に點睛するといふ類の歌ではなく、温かに一篇の文を概観して結ぶといつたやうな歌である。

(二) 曇る夜の月

1 主題 曇つた夜の芳宜園の月のまゝ

2 構想

(1) 年ごとの芳宜園の月のまゝも今宵は曇つて心もとない。

(2) はれ間なき月を待つ心やりの歌。

3 敘述

〔降りくらしたる雨の名残、霽れゆかむ空もおぼえず〕——一種才氣の走つた筆である。平安朝の言語を巧みに活用して、文脈に生氣を興へてゐる。

〔伊豫簾むなしくかゝげて、空のみうちまもらるゝもいとわりなしや〕——これもきびくした筆である。「うちまもらるゝも」と受身的な言ひ方がこゝでは「わりなしや」の心持に通じて、澁滞のない筆路である。

〔はれ間なきの歌〕——こゝにも平安朝の文學のほひがある。「いひひて」はやゝ俗調があるやうだが、この歌としては据わつてゐると思はれる。「そらながめにや」あたりの情趣的なのが作者には得意であつたのかも知れない。

〔かきくらすの歌〕——「かきくらす雲間の影」に應じて「月まつ蟲」を點出した。「蟲よせて語らへ」といつてもそこに急迫した乃至緊張した主觀のつよさは見られないで、餘裕ある心持に終始してゐる調子である。

(三) 砧を聞く

1 主題 雁の聲に交る砧の音。

2 構想

(1) 近く遠く聞える砧の音と雁の聲。

(2) それを聞く心のさびしさ。

3 敘述

〔近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる〕——同意語を對句的に重出させて、その聯結にきはめてみじかい動詞乃至は助詞を以てした。内容は簡單であつても讀者はこの文の形式より來る調べの爲、或情趣的な氛圍氣にさそはれる。これはこの短篇全體にわたる技巧である。

「皆あらず、聞く人の心のさびしきなり」——「さそふにやあらむ」「通ふにやあらむ」「あなあやし、あなあやし」「悲しきか」「さびしきか」「うきゆゑか」と疑問の形を重ね來つたものを、「皆あらず」といひ切つて、「人の心のさびしきなり」と斷じてゐる。「さびしきなり」が單に文の形態上の結論になつてゐるのでなくて、おのづから作者衷心の披瀝として、一種の哀調を帯びてゐる。

#### (四) 夜學

##### 1 主題 深更讀書の興會。

##### 2 構想

- (1) 心がすんでよく解き得られる。
- (2) 遠き世の人と語り合ふ心地がせられる。

##### 3 敘述

「皆人もいねたるにいと嬉しう、燈火あかくしなして文机にうち向かひたる、いみじう心すみて、云々」——「いと嬉しう」も「心すみて」も實感・實情であるところに、文脈の暢達があり、牽引力がある。

「遠き世の人もたゞさし向かひ語り合ふ心地す」——深更に於ける讀書の興會の深さは、時と場所とを超えて、作者と面相接する思あらしめるに至るものであることは誇張ではない。

「雞の聲は、夜深きにやと思ふに、いととく明けはなれたる、しばしとてうちねぶる夢のうちも、あだしごとならむやは」——讀書の想の夢のうちまで通ふことをいつた。事實さうであつたらうと思はれるが、結末の一句はすべてをいつてしまつたやうで、少しく文章の柄を小さくしてゐるやうにも思はれる。

#### 三 批評

雅文は擬古文とも稱せられて、江戸時代に起つた復古運動の一所産と考へられてゐる。即ち眞淵及びその門流の人々に於てなされたる文學的業績の一であつて、主として平安朝の文法の研究を基として、平安朝の用語をとり、これによつて當時の新しい素材に表現を與へようとした一文體である。随つて卑俗を避け、委うるはしく、溫順なる調子を持つてゐる。が、その反面には微溫的で、巧智的で、現實味に乏しくて、迫力を缺くといふ弱點を暴露してゐる。

この文體は明治年代に入つても國文學者にしきりに用ゐられたのであるが、言語的表現の本領の自覺が深まると共に衰へていつた。我が隨筆文學の一系統としては、豊富な量を有するが、何れも作者の生活の或一部分を間接的に表すに過ぎなかつた爲に、一般文學にまでその發展の歩をすゝめることは出来なかつた。

但し、こゝに抄した四篇の如きは、各篇優雅な趣があり、好感を以て味はひ得らるゝものである。千蔭の文はおだやかで技巧がゆきとゞき、春海の文は才氣があつて調子がたかく、濱臣の文は對句の活用によつて一風格をなし、廣足の文はおのづからなる平明さがある。そして作者が文を好くすると同時に、歌をもよくした人々であることが、用語の洗練、格調の溫雅といふ結果を生ぜしめたやうに思はれる。

#### 三 備考

##### 一 指導の問題

本課學習の直接的な問題は、平安朝に發達した正雅な語彙・語法を用ひて溫雅な文致を成してゐる點であらう。そしてそれはやがて平安朝文學理解の準備になるであらうが、又所謂和文なるものの特質を理解する第一歩になるであらう。

かくいへば一種方便的な教材としてのみ取扱ふやうにみえるのであるが、雅文の内包力がそのやうなものであるから仕方がない。又さういふ取扱が雅文そのものを正しく理解することであり、さういふ文の有する優雅な匂もやがて味得せられるであらう。これらも隨筆と見られるのであらうが、こゝに抄した四篇は、一種固定した文學意識の下に筆をとつた歌人の文で、枕草子・徒然草の如き純乎たる隨筆味には乏しい。併しその二者あたりから脈をひいてゐる溫雅さ、別種な味となつてゐる。一二「隨筆の説」にいふ江戸時代の隨筆——所謂、街學隨筆・低級隨筆の外に、かういふ一文體の存在したことを知らしめたい。第十三課以下の各時代の隨筆の風格に比しても特長のあるものであることを知らしめたい。

又如何なる點が言語的表現の原理に背くものであるかを知らしめると共に、更にこの種の文に接して、正雅な語彙・語法を練習することも、忘れてならない學習の一面であることを併せて知らしめて置くべきであらう。

## 二 參考資料

(一) 雅文の概念とその發達に關する橋本進吉博士の所説(日本文學大辭典)を左に引用する。

和文は、漢文の如き外國語系統の文語に對して純粹の日本語による文語に屬する。これと同系統のものとしては、古く漢字專用時代から、「古事記」「祝詞」「萬葉集」の如き、傳誦の言語や歌謠の類を漢字に寫したものがあり、その書き方も様々であつたが、そのうち一字一音節の萬葉假名で書いたものから、平安朝の初期に平假名の文が發生し、主として婦人の間に行はれて歌や消息を書くために用ひられ、それから純粹の日本語による假名文の文學が發達して平安朝中期には隆盛を極むるにいたつた。この假名文は、その用語は大體平安朝の上流社會の口語に基づくものであるが、しかし平安朝に於ては雅語と俗語との區別が意識せられて、和歌の詞は、歌集の詞書や日記物語草子など散文の語との間に多少の差異があつて幾分古い形が用ひられ、また修辭的の表現が多かつたやうであり、歌集の序文の如きは、對句を用ひるなど漢文の影響を受けたと見られる所もあるが、しかしこれ等は、大體に於ては同種のものといふべきであつた。この種の文語が後世までも襲用せられて、その特徴を保ち、他の種の文語に對して自ら一系統をなすにいたつたのである。こ

れが即ち後に和文といはるゝものである。かやうに、この種の文語は平安朝の口語に基づくもので、その後、時代が下るに隨つて口語が變化したにも拘はらず、和歌や連歌や物語や隨筆の如き平安朝以來の傳統を追ふ文學の語として用ひられたが、しかし時代の下ると共に、當時の口語や漢文その他の文語の影響を受けて、古に違ふところが生ずる事を免れなかつた。然るに江戸時代に至つて國學が盛んになるに及んで、歌文に於ても、後世の風を排して、直ちに古代の歌文を模範とする事となり、殊に宣長以後、古代語の研究が頓に進歩し、その文法や語義が闡明せられ、古代の和歌と散文との用語上の差異までも攻究せられて、これを基準として歌文用語の誤謬を指摘しその匡正を目的とする書も多くあらはれ、正式の歌文のみならず、消息や戲文の類までも、古代の語彙と平安朝の語法によるものが國學者によつて作られるやうになつた。當時これを雅文と云ひ、後には擬古文とも稱へた。その作者としては、賀茂眞淵・本居宣長・橋千藤・村田春海・清水濱臣・藤井高尙・石川雅望・黒澤翁滿などが名高い。この種の文は明治以後にも行はれ、殊に明治二十年代に入つて古代の國文學が講究せらるゝに及んで又盛んになり、教科書にも採用せられ、その文法も學校で講ぜられ、明治の普通文の成立にも影響を與へたのであるが、純粹な形ではその後次第に用ひられる事が少くなつた。但し歌語としては、現今にいたるまで、多くは、この系統のものが用ひられてゐる。

(二) 近世の雅文についての佐々政一氏の所説(近世國文學史)を左に引用する。

眞淵が擬古の歌文は、實に稀世の作であつて、千年以前の言語を運用して毫も滯滯の痕がない。しかし、それは古語を以つて新思想を詠じようと企てたのではなくて、其思想をも古に歸すことが、主張の隨一であつた爲に、かく自在なることを得たのであらう。それにしても、萬葉以降全く絶えてゐた長歌を復興し、從來隨筆や物語の外には全く用ゐられなかつた文體で、新に支那人の小品文などに比すべき文藝上の創作たる雅文を創めたとともに、我が文學界に幾多の優美な或は蒼古な言語を復活せしめて、一般文藝の詞藻を豊富にし高尙にした偉績は、これを認めねばならぬ。萬葉調の和歌や、源氏流の雅文は、確かに、その一派の文學で、一般社會の時代思潮に切實ではなかつた。併し、又その復古的思潮も、當時の時代思潮中に一流域を占めてゐたもので、その影響も亦、甚だ妙とはいはれない。

眞淵の門下中、文藝上に盛名のあつたのは村田春海（文化八歿、六十六）加藤千蔭（文政五歿、七十四）を随一とすべきで、春海は漢文に長じ、その豊麗なる格調に倣つて開闢起伏の自在を極めてゐて、春海の雅文は、眞淵の長歌とともにこの派の代表的作品といはれてゐるのである。琴後集が、その歌文集である。千蔭の盛名は春海に遜らない、彼は手柄岡持や蜀山人なども親しかつて、橋八衛といふ名で狂歌をも作り、黄表紙などにも趣味を持つてゐて、一面當代の洒落な思潮にも觸れてゐたから、文章も輕妙な趣を具へてゐるが、動もすると莊重を缺いてゐる。家集には「うけらが花」がある。此の二人の文章和歌は、已に、眞淵の如く、強ひて高古ならんとはせず、和歌には古今以後の調が頗る多い。

## 一七 俚諺論

大西 祝

### 一 解題

#### 一 本文

大西博士全集の第七卷「論文及歌集」に收められてゐる「俚諺論」の大部分を採つた。「俚諺論」はもと雑誌「太陽」に掲載せられたものである。（大西博士全集 全七卷、警醒社發行）

#### 二 作者

大西祝<sup>（おほい）</sup>。哲學者。操山と號した。元治元年岡山城下に生まれ、明治十年京都同志社に入り、十七年神學科を卒業、十八年一月東京大學豫備門の第一・第二兩學年の試験を通過して第三學年に入り、九月大學に進んで哲學を修め、卒業後は大學院に於て倫理學を研究した。二十四年九月から東京專門學校（早稻田大學の前身）に講師として哲學・倫理學・論理學を講じ、同大學文科の學風に深い影響を與へた。三十年十一月から高等師範學校の倫理科講師を囑託され、三十一年二月ドイツに留學、病を得て歸り、爾來東京・鎌倉・京都に病を養ひ、三十三年七月文學博士の學位を得たが、この年十一月郷里に歿した。享年三十六。學殖の豊富、人格の高潔を以て推され、若くして當時の學界に又論壇に重きをなした。著作は收めて大西博士全集にある。

#### 三 採擇の趣旨

俚諺は我々の祖先が遺してくれた生活哲學ともいふべきもので、國民の長い生活體驗から歸納せられた深い智慧の結晶である。本文はさういふ俚諺の形態と性質とを明らかにしつゝ、そこに反映せられてゐる國民性を指摘したもので、興味深い國民的教材である。

## 二 教材としての研究

### 一 註解

【俚諺論】 リゲンロン 俚諺に對する理論的考察。

〔俚諺〕 俗間の諺。ことわざ。多く民衆の間に發生し、日常一般に用ゐられる比較的短い警句・格言・秀句・諷刺句等をいふ。

【羅馬の一詩人が、云々】

小諷詩なる語は、或無名作家の古代羅典語の二行詩に摸した左の詩から一般的になつたものであるといふ。

“The qualities rare in a bee that we meet  
In an epigram never should fall;  
The body should always be little and sweet,  
And a sting should be left in its tail!”

【エピグラム】 epigram (英) 警句を以て成る短言の詩。

小諷詩。警句。寸鐵語。

もと宗教上の供物に記した簡単な言葉であつたが、轉じて寺院の門、一般公共建築物、及び神社・英雄像などの銘を意味し、ついで詩や散文の題言を呼ぶに至り、その形式が立法者の命令、哲學者の教訓等に利用せられ、稍時代を降つてはギリシヤに至つて清楚・優雅で單純な小詩に冠する名となつた。更にローマ詩人によつて近代的意味に於けるエピグラム、即ち優美且巧慧な機智を藏する警句・小諷詩として發達した。

【整あり、蜜あり、軀は小さし】 蜜蜂に整があるやうに人

を刺す鋭さがある、蜜蜂に蜜があるやうに人をひきつける妙味がある、蜜蜂の小さな體のやうに、形式が短い。

〔整〕 ハリ

〔蜜〕 ミツ (一) 蜂蜜。(二) 糖蜜(黒くどろ／＼の未精製の砂糖)。

〔軀〕 カラダ み。身體。體軀。

【巧妙】 カウメウ すぐれてたくみなこと。

【恰當】 カフタクウ 丁度よいこと。よくあてはまること。

〔恰〕 あたかも。丁度。適當。まるで。宛然。

【上乘】 ジャウジョウ 佛語。(一) 上等な乗物の意から、最上の教法をいふ。(二) 最もすぐれてゐること。最上。

〔上乘禪〕 こゝは(二)。

【寸鐵人を刺す】 小さい刀針などもなほよく人を殺すの意。短い警拔な語句がよく人の急所を衝くことをいふ。

〔寸鐵〕 スンテツ (一) 針ほどの鐵。甚だ小さい刃物。(二) 轉じて、短くて警拔な語句。警句。

【人口に膾炙し】 廣く世人の話題にのぼること。

〔膾炙〕 クワイシヤ (一) 膾なます(細く切つ)と炙あぶり(焼く)と。(二者は共に人々の嗜むもの。)(二) 轉じて、廣く人々の口の端はにのぼつて、褒められること。

【律語】 リツゴ 音律的に綴つた語。リズムの布置せられた言語。律文。韻文。

我が國の短歌・長歌・旋頭歌・神樂歌・催馬樂・今様・俳句・川柳・新體詩等五七調又は七五調の韻律を有するものを始め、一般に詩歌と稱せられるものは概ね律語に屬する。從來専ら韻文と呼ばれてゐたものであるが、支那及び泰西の詩が押韻を必要とするに比し、我が國の詩歌に於ける言語・文字の排列は國語の性質上、音韻・音性によらず主として音數による爲、律語又は律文の名を用ゐるのが適當である。

〔律〕 リツ (一) 調子。音調。(二) 支那音樂で、樂音の高さを規定した名稱。樂律。最も普通には八度音程内に十二箇の音を配して十二律といふ。(三) 支那音樂で、陰に屬する音(呂)に對して、陽に屬する音をい

ふ。(十二律の中、陽に屬する六音を六律といひ、陰に屬する六音を六呂といふ。) こゝは(一)。

【五七又は七五】 五七調又は七五調。

我が國の詩歌は本來五音・七音を音數律の單位とし、その反復によつて全體が構成される。この際五音の句が上に、七音の句が下に來る時これを五七調といひ、その逆の場合を七五調といふ。五七調は上軽く下重く、そこから莊重・重厚の感を伴ひ、七五調は上重く下軽く、そこから流暢・輕妙の感を伴ふ。上代の歌は五七調が基調となり、平安朝時代以後は七五調が優勢となり、明治の新體詩に於ては五七・七五共に用ゐられた。

【律呂】 リツリヨ (一)六律六呂。律の音調と呂の音調と。

(二)音律。音調。調子。こゝは(一)。

【雉子も鳴かずばうたれまい】 雉子は鳴くからこそ獵師に打たれる、人も多言によつて禍を招く、の意。

【心の鬼が身を責める】 良心に背いて惡事をすれば、良心

が鬼のやうな恐しいものとなつて自分自身を苛責する、の意。

謡曲「歌占」に「身より出せる科なれば、心の鬼の身をせめて、かやうに苦をばうくるなり」とある。

【人と屏風はすぐには立たぬ】 人は眞直一方では世に處しがたい。屏風は曲折あるが故によく立つやうに、人も己を撓屈して他に順ひ、他と調和して始めて世に立つことが出来る、の意。

古今著聞集に「爲輔中納言口傳にかゝれて侍るなるは、人は屏風のやうなるべきなり、屏風はうるはしう引きのべつれば倒るゝなり、鬘をとり立つれば、倒ることなし、人のあまりにうるはしくなりぬればえたもたず、屏風のやうに鬘あるやうなれば、實うるはしきがたもつなりと侍るとかや」、又、世説に「宋世爲之語曰、王光祿如屏風、屈曲從俗、能蔽風露」とある。

【おもふ念力岩をも通す】 眞に求める心から一心を集注し

てすればとうてい出來さうもないやうに見える困難なことも遂には成就する、の意。

朱子語類に「陽氣發處、金石亦透、精神一到何事不成」とある。

【念力】 ネンリキ 佛語。五力の一で、專念・集注の力をいふ。

【身を捨ててこそ浮かむ瀬もあれ】 人は一身をすてきれば、そこに却つて活路を見出すことが出来る、の意。

【浮かむ瀬】 物事の障りなく順當に行はれる機會。順境に向かふ機會。

【浮かむ】 「浮かぶ」に同じ。

【語呂】 ゴロ 「語路」とも書く。(一)言語又は文句の調子。(二)地口の一體。ごろあはせ。こゝは(一)。

【十で神童、十五で才子、二十過ぎては只の人】 幼少の頃は神童とまでいはれてゐたものが、長ずるに隨つてそれほどでなくなり、遂に壯年に至つては尋常の人に過ぎなくなる、の意。幼時に於ける優秀さはそれだけでは必ず

しも一生の優秀さになるものではないことをいつたもの。これは單なる社會に於ける事相の觀察に過ぎないのであるが、併し一面には、先天的素質の優秀さは鍛錬し工夫することによつてのみ發展し完成するものであることを示してゐるとも見る事が出来る。

柴田花守の今様に「十で神童ともてはやし、二十頃には才子なり、やがてみそちと過ぎぬれば、唯人なみの禿頭」とある。

【神童】 シンドウ 才智の極めて優れた童兒。麒麟兒。

【才子】 サイシ 才智のすぐれた人。才能ある者。才物。才人。

【多勢に無勢】 タゼイにブゼイ 如何に剛勇であつても小人數では大勢に敵しがたいことをいふ。

吾吟我集に「一本の花うち散らす雨風は多勢に無勢何に防がん」、又、周書に「寡不敵衆」とある。

【無勢】 (一)軍勢の少いこと。(二)人數の少いこと。

【短氣は損氣】 タンキはソソキ 氣短は往々にして非常な損害を招くの意。「短慮功を成さず」ともいふ。

【短氣】 (一)呼吸のはげしく回数が多いこと。(二)氣みじか。氣ばや。せつかち。短慮。

【損氣】 損。損害。上に短氣といつたから、損氣と「氣」を添へて語調をよくしたのである。

【弱り目に祟り目】 ヨワリメにタタリメ 不運の時に、更に重ねて災厄に逢ふことをいふ。「泣面に蜂」の類。

【祟り目】 弱つた場合。弱つたまはりあはせ。「祟り」 祟ること。罰のあたること。神佛又は怨靈などの禍をすること。

【所かはれば品かはる】 土地々々によつて言語・習俗等の異なることをいふ。

古歌に「物の名も所によつて變るなり難波の蘆は伊勢の濱荻」、又、晏子春秋に「百里而異習、千里而殊俗」とある。

【勝つて兜の緒をしめよ】 敵に勝つた時に一層用心して心

を引きしめよ、の意。得意の時に得て油断し易いのを戒めたもの。

荀子に「孔子曰、周公其盛乎、身貴而愈恭、家富而愈儉、勝敵而愈戒」とある。

【兜の緒をしむ】 油断しない。警戒する。用心する。【兜の緒】 カブトのヲ 兜に付けて頤で結ぶ紐。しのびのを。

【同韻】 ドウキン 同じ韻。同じひびき。

【韻】 (一)ひびき。(二)語末のひびき。漢字はその發音の響によつて平・上・去・入の四聲に分ち、更にこれを百六韻に分つ。(三)詩歌では、主として二語又は二語以上の言語の末音の類似又は一致をいふ。

【尾韻】 ビキン 「脚韻」ともいふ。(一)語末のひびき。(二)二語又は二語以上の末音の類似又は一致。

語末のひびきを合はせることを脚韻法といふ。西洋詩・漢詩等に多く用られるが、我が國に於ては國語の性質上、詩の律格として發達するには至つてゐな

い。但し俚諺・成句等には屢々用られる。

【頭韻】 トウキン (一)語頭のひびき。(二)二語又は二語以上の頭音の類似又は一致。

頭韻を合はせることを頭韻法といふ。

【具象的に言ひ做して】 實際の事柄に即して言表して。

【具象的】 グシャウテキ 「具體的」に同じ。形象を具有するさま。個體に特殊の形體・性質を具有するさま。(抽象的の對。)

【誇張】 コチャウ (一)事實よりも大きく言ひなすこと。

誇大に述べること。(二)修辭上の用語。事物を實際より過度に大きく或は過度に小さくいふことをいふ。「白髮三千丈」「猫の額のやうな庭」こゝは(一)。

【度量】 ドリヤウ (一)度と量と、即ち、物の長さや容積と。(二)度を測る尺と量を測る秤。(三)人の寛容の品性。又、事業を經營し得る器量。こゝは(一)。

【七度搜して人を疑へ】 紛失物は念入りに幾度もさがして然る後に人を疑へ、の意。人間の考は非常に主觀に囚は

れ易いものであるから、吟味をつくした後でなければ人を疑つてはならないことをいふ。

【人の噂も七十五日】 どんなに世上に喧しい噂でも、時の經過と共に自然に消滅してゆくものである、の意。

【預り物は半分の主】 預つたものは事實上半ば預り主のものである、の意。現在持つてゐるといふ事實の強みをいつたもの。「預り主は半分」ともいふ。

【三度目が定の目】 ト笠は數回繰返してから始めて確定的な判断とすべきである、の意。「三度目の目」「三度目は定のもの」ともいふ。「三度目の神は正直」の類。

【定】 チャウ (一)それと定まつたこと。きまり。(二)その通りであること。(三)佛語。「禪定」の略。心を一境に定めて散亂せしめないこと。

【目】 こゝでは、雙六などの采の面に記した點。

【三年たてば三つになる】 赤兒も三年たてば三歳の童子になるやうに、三年も經過すれば總べての物は舊時の觀を改める、の意。

【懺悔話をすれば三年の罪がほろびる】懺悔話をすれば過去三年間もの罪悪が消滅する、の意。懺悔の功德の大きなことをいつたもの。「懺悔には三年の罪も滅ぶ」ともいふ。「懺悔に罪滅す」「懺悔には十罪を滅す」「懺悔は罪の半を滅す」の類。

【懺悔】ザンゲ（「さんげ」の訛）佛語。過去の罪業を悔いて、佛・菩薩・師長・衆人等に對してあらはに陳述すること。

この語は梵語「懺摩」(Ksama)の略なる「懺」に、譯語として「悔」を添へたもので、梵漢兼舉の語。但し Ksama は他に忍容を請ふ義で、本來は追悔の意はなし。

【三人よれば文殊の智慧】一人ではどんなに考へてもその人だけの智慧しか出ないが、三人寄り集つて協力すれば、そのうちの誰ももつてゐない、智者文殊にも劣らない勝れた考が生まれ出るものである、の意。

論語、述而第七に「三人行 必有我師焉」、又、五燈會

元に「三人同行 必有<sup>スレバ</sup>一智」とある。

【文殊】モンジニ（二二九頁を見よ）

【智慧】チエ（二）物事の理をさとり、是非・善悪を辨別する心の作用。物事を思慮し、計畫し、處理すること。（二）佛教では、智は梵語 Jñāna の譯語、慧は梵語 Prajñā の譯語で、普通には互に他を包括して用ゐられるが、嚴密にいへば、決斷するのを智といひ、簡擇するのを慧といふ。又有爲の事相に達するを智といひ、無爲の空理に達するを慧といふ。

【三人よれば人中】人が三人集ればもう一つの世間で、そこには當事者以外の第三者を生じ、秘密も保たれ難くなるし面倒も生じてくる、の意。「三人よれば公界」ともいふ。

【二度あることは三度ある】物事は起り始めれば、用じやうな事が重り起つて、或程度まで行かなければ止まぬものである、の意。多く不幸・災難などについていふ。「不仕合はこれ限りと思ふな」の類。

【朝起は三文のとく】朝起には必ず何か具體的な利益があるものである、の意。「朝起千兩」「朝起三兩、始末五兩」ともいふ。

通俗編、宋樓鑰詩に「早起三朝當<sup>一工</sup>」とある。

【石の上にも三年居ればあたままる】つらくとも忍耐しておれば冷たい石も暖かになるやうに、困難も困難でなくなる、の意。「石の上にも三年」ともいふ。

【用心は臆病にせよ】臆病は排すべきであるが、用心だけは臆病にせよ、の意。「用心に繩を張る」「用心に飽きはない」の類。

困學紀聞に「乘<sup>レ</sup>車常以<sup>ニ</sup>顛墜<sup>ニ</sup>處<sup>レ</sup>之、乘<sup>レ</sup>舟常以<sup>ニ</sup>覆溺<sup>ニ</sup>處<sup>レ</sup>之、仕<sup>レ</sup>官常以<sup>ニ</sup>不遇<sup>ニ</sup>處<sup>レ</sup>之無<sup>レ</sup>事」とある。

【黒犬に喰はれて灰の和滓におそれる】一度或物事におびやかされると、後には似寄つた他の物事にもおちけがつく、の意。途に捨ててある灰の和滓が黒犬に似てゐるからいふ。「黒犬に咬れて釜の尻に怯る」「黒犬に喰はれて赤犬に恐る」「蛇に噛まれて朽繩におづ」の類。

楚辭、九章に「懲<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>美<sup>レ</sup>者而吹<sup>レ</sup>壺<sup>レ</sup>兮」とある。

【和滓】タレカス 垂れ滓の意。灰汁をとつた残滓。

【まことしやか】まことらしいさま。

【パラドックス】Paradox (英) 一見奇矯で常識に反するやうに見え、しかも實際には根據のある説。逆説。警句。

【急がばまはれ】急ぐ時には慌てずに却つて遠廻りして安全な方法によれ、の意。急ぐ時には無理や危険を無視して近道をとる易い心理を戒めたもの。

【言はぬは言ふにまさる】沈黙の方が言説よりも時として深い意義と力とを有するものであることをいつたもの。

【逢ふは別れのはじめ】逢つたものは必ず別れる運命を有するから、逢ふといふことは却つて別れの始である、の意。

涅槃經に「夫盛<sup>ニ</sup>必<sup>シテ</sup>有<sup>リ</sup>衰、合會<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>別離」、又、白氏文集に「合者離<sup>ニ</sup>之始、樂兮憂<sup>ニ</sup>所伏」とある。

【論語よみの論語しらす】論語を讀む人が却つてそれを實行することを知らない、の意。知識として、理論として



知つてゐるだけで、實行の伴はない者を罵つていふ。論語序説に「程子曰、讀論語、有讀了全然無事者」とある。

〔論語〕 ロンゴ (二六一頁を見よ)

【人を使ふは使はれる】 人を使役して事をするのは一見樂なやうに見えるが、實際は骨の折れるもので、却つて自分人が人に使はれてゐるやうなものである、の意。

【深邃】 シンスキ 奥深いこと。深邃。

〔遠〕 深く遠い。おくぶかい。(學問・道理などが)精しくて深い。

【方便】 ハウベン (一)佛語。佛が最も深い眞理に導く爲に、衆生の根機に應じて使用する種々の方法。(二)轉じて、目的を達する爲の手段・方法。策略。(三)都合。勝手。こゝは(一)。

【對照】 タイセウ (一)彼と此と照らし合はせて參考すること。くらべ見ること。(二)contrast(英)の譯語。反對の比較。釣合つた反對。こゝは(一)。

【骨折損の草臥まうけ】 折角骨を折りながら何の效もなく、結果として得た所はたゞ疲勞のみである、の意。

〔草臥〕 クタビレ 勞働又は歩行が過ぎて疲れること。疲勞。

【聞いて極樂見て地獄】 人傳に聞くとすると實際に見るところとは相違が甚だしいことをいふ。「聞いて千金見て一毛」の類。

〔極樂〕 ゴクラク こゝでは、この上ない結構な所、の意。(七八頁「極樂淨土」の項参照)

〔地獄〕 チゴク こゝでは、この上ないいやな所、の意。(二七九頁参照)

【問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥】 知らないことを人に問ふのはその時ぎりの恥であるが、その一時の小恥の爲に問ふことを敢てしなければ、一生無識の恥となる、の意。

【長者の萬燈より貧者の一燈】 貧しい者の誠意のこもつた僅かの捧げ物は、世間體を飾る長者の多くの捧げ物より

も功德は大である、の意。

阿闍世王決疑經によれば、嘗て釋尊が阿闍世王に請ぜられて説法し、飯已つて祇園精舎に歸らうとし給ふや、王は百石の麻油膏を以て宮門と精舎との間に點燈した。一貧窮の老母がこれを見て深く感激し、われも一燈を供養しようものと、乞ひ得た兩錢を以て膏五合を得、佛前に至つてこれを點じ、この膏は半夜分に足りないとはいへ、若しわれ來世に道を得て佛の如くなるべきであるならば、この光明が通夜消えないであらうと心に誓ひ、禮を作して退いた。夜半に至り、王の捧げた燈は或は滅し、或は盡きたが、老母の獻じた一燈は袈裟を以て扇げば光彌、明らかに上、梵天を照らし、傍、三千世界を照らした。佛は目蓮に告げて、この母は三十劫の後に成佛して須彌燈光如來と成るであらうと授記せられた。

尙、賢愚經貧女難陀品には、これと略同じ話が貧女の名を難陀として出てゐる。

〔長者〕 チャウジャ こゝでは、富者、の意。

【比照】 ヒセウ 「比較對照」の義。各箇の性質・意義を比べ見ること。

【比喻】 ヒユ 「譬喩」とも書く。(一)くらべ喩へること。たとへ。(二)修辭上の用語。或物事の説明に、これと相類似し、若しくは相對比するものを假り用ゐて、趣味を添へ又は了解を切ならしめるもの。たとへ。

【旅は道づれ、世はなさけ】 旅には道づれ、世渡りにはなさけが何よりである、の意。人情相倚るべきをいふ。

〔道づれ〕 道を行くに連れ立つて行くこと。又、その人。同行者。

【津々】 シンシン あふれこぼれるさま。又、物の涌き出て、ゆたかなさま。

【花は櫻木人は武士】 花の中では櫻、人の中では武士が最もすぐれてゐる、の意。

【佛法と薬屋の雨は出でて聞け】 佛法は寺で、薬屋の雨は外で、共に家を出て聞け、の意。「薬屋の雨と御法義は

出て聞かねば知れぬ」ともいふ。

【佛法】 ブツボフ 佛の説いた教法。佛道。

【出でて】 屋外に出ることと俗事を離れる意とをかけた。いつたものであらう。

【藁屋の雨】 ワラヤのアメ 藁葺の屋根に降る雨。音のしないのに譬へていふ。

【詩心】 シシン 風流な心。詩的精神。うたごころ。

【道心】 ダウシン (一) 道德意識から發する精神。道德的精神。(二) 本然の心。私慾に汚れぬ心。(三) 佛語。佛道を行する心。佛果を求めぬ心。菩提心。こゝは(三)。

【宗教心】 シュウケウシン 或絶對を認めてこれを畏敬しこれに信賴する精神。宗教を信する心。信仰。

【高雅】 カウガ けだかくみやびやかなこと。高尚優雅。

【幽玄】 イウゲン おく深くて容易に探り知ることが出来ないこと。趣が深くて味はひが盡きないこと。

【妙趣】 メウシュ 甚だすぐれた趣。言ふに言はれぬ面白味。妙味。妙致。

【暗喩】 アンユ 修辭上の用語。この語は普通には、隱喩と同じ意味に用ゐられるが、こゝでは諷喩の意味で用ゐられてゐる。

「諷諭」は、表面上本義を全く隠してたと諭義のみを掲げ、諭義を通じて本義を察しさせる詞態で、形式上からいへば直喩・隱喩を順次緊縮したもので、これを巧みに用ゐればその效力は直喩・隱喩の比ではない。

「燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや」の類。

【蟹は甲に似せて穴をほる】 人の爲すことや考へることは皆その分際に対応してゐる、の意。

【目くそ鼻くそを嗤ふ】 自分に同じやうな缺點・短所があるのを省みないで、他人の缺點・短所を嗤ふことをいふ。

【嗤ふ】 ワラふ さげすみ笑ふ。あざわらふ。嘲笑する。冷笑する。

【隱喩】 インユ 修辭上の用語。直喩法(「鬼の如き辨慶」の類)があらはに二つの事物を比較するに反し、表面上

譬喩の形式を没して譬へるものと譬へられるものとを一體にして斷言的に譬喩するもの。直喩に比して力強く、譬喩としての作用が勝つてゐる。「鬼の辨慶」の類。

【商賣は牛のよだれ】 商賣は牛のよだれのやうに氣長に構へて、利益を急いではない、の意。

【得手に帆をあげる】 追風<sup>おひかぜ</sup>に帆を揚げて船を順調に進めるやうに、自分の得手に乗つて大いに事をなすをいふ。

【得手】 エテ 最も巧みなこと。最も得意なこと。

【寓言】 グウゲン 他の物事に託して意見や教訓をほめかした言葉。たとへばなし。

【寓】 寄せる。やどる。ことよせる。かりすまひ。やど。

【敘事】 ジョジ 事物の變化や動作をありのままに記すこと。又、その文・詩。

【體裁】 テイサイ (一) ありさま。すがた。たいさい。(二) みえ。外見。外觀。こゝは(一)。

【常恆】 ジャウコウ 常にきまつてゐること。いつも變ら

ないこと。

【想】 サウ (一) おもひ。かんがへ。思想。(二) 文學・藝術等の内容。(三) 佛語。心の作用の一。事物の相を心上に浮かべ、以て言語を起す因となるもの。こゝは(二)。

【氣質】 キシツ (一) 「氣性」に同じ。その人に生まれついた心だて。きだて。かたぎ。はだ。(二) 心理學上で、遺傳や身體の特質によつて起る心的状態をいふ。多血質・神經質・膽汁質・粘液質の四種とする。こゝは(一)。

【人情】 ニンジャウ (一) 人類の自然の愛情。いつくしみ。なさけ。(二) 人心の自然の情狀。世間普通の人の心。こゝは(二)。

【學術】 ガクジュツ 學問と藝術と。學藝。

【社會制度】 シヤクワイセイド 一般的には社會生活上の様式で永久的且公認されたものをさすが、最廣義には諸社會形式を始めとして道德・法律等の諸文化内容及びこれに關係する人々乃至事物をも含む。最狹義では公認された社會諸形式を意味する。

れた社會諸形式を意味する。

【社會】(一)共同生活をなす人類の團體又は組織。人間がその生活を續けてゆく上に於て、必然的に形成する集團的結合。(二)同じ趣の人々。同流の仲間。なま。(三)世の中。世間。

【即座】ソクザ すぐ。その場。その座。即席。

【武士は食はねど高楊子】 武士はいかに貧窮しても武士たる體面を失ふやうなことはしない、の意。

【高楊子】 タカヤウジ 食事した後に小楊子を使ふこと。満腹のさまにいふ語。

【武士は相見互】 武士はたとひ敵身方になるやうな場合でも、相互に扶助すべきである、の意。

【相見互】 アヒミタガヒ 「相身互」とも書く。互に助けあふこと。おたがひづくであること。

【階級】 カイキフ (一)「階段」に同じ。だん。きだ。(二)位。しな。(三)世襲的の身分又は財産・所得・職業等によつて區別した社會的地位。こゝは(三)。

【愛重】 アイチョウ 愛し重んずること。かはいがり大切に

にすること。

【氣風】 キフウ 心のけしき。こゝろばへ。こゝろだて。きだて。かたぎ。氣性。氣質。

【泣く子と地頭には勝たれぬ】 ききわけのない幼児と、絶大な権力のある地頭とは、どんな無理をも我慢して負けてゐる外はない、の意。道理の前に服従しないものは敵し難いことをいふ。

【地頭】 チトウ (一)莊園の領主が、土地管理者として設けた私官。(二)鎌倉時代に莊園を管掌した職名。

租税を徵集してこれを本所・領家・國衙に納め、非違の檢察、盜賊の逮捕、京都及び鎌倉の警衛を掌り、守護の命により軍役を勤めた。源頼朝が文治元年勅裁を経て全國に設置して公官となつた。(三)戰國時代には、大名領地の中で知行地を有する者。(四)徳川時代には、知行地ある旗本・御家人。

【歴史的敘述】 レキシテキジョジュツ 歴史として順序を逐つて述べること。

「婦人有三從之義、無專用之道、故未嫁從父、既嫁從夫、夫死從子」とある。

【家族制度】 カゾクセイド 個人を以て社會の基礎とする個人制度に對して、家族團體を以て社會の基礎とする制度。

【さはらぬ神に崇なし】 關係しない物事からは禍は來ない、の意。よけいなことにかゝはることを戒めたもの。

【棄てる神あれば助ける神あり】 一方で棄てられれば、他方では助けられるの意。人間の生き得る天地の廣大なのをいつたもの。

「神」といつたのは、人間の運・不運は一に神の意志によるといふ宗教思想から來てゐることは勿論である。

【神は正直のかうべにやとる】 正直でさへあれば自然に神の意志に通ずる、の意。正直の徳がいかに宗教的に大きな價值をもつてゐるかをいつたもの。

菅原道眞の作と傳へられる歌に「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や護らむ」とある。

【女に家なし】 親の許にあつては父に従ひ、嫁しては夫に

従ひ、夫死しては子に従ふといふやうに、服従を以て道と定められてゐる女には、眞に自分の家といふものがない、の意。「女に定まる家なし」「女は三界に家なし」ともいふ。

【貞女兩夫にまみえず】 みさをの固い婦人は決して再婚しない、の意。

史記に「王蠋曰、忠臣不事二君、貞女不更二夫」とある。

【嫁が姑になる】 月日がいつの間にか経過し、位置が知らぬ間に顛倒して、姑の下に無力そのもののやうに事へてゐた嫁も、いつの間にか自分が姑となり、嫁に事へられる位置に立つてゐる、の意。

【老いては子に従へ】 年老いて後は、何事も子に任せてこれに従へ、の意。

大智度論に「一切女身無所繫屬、則受惡名、女人之體、幼則從父母、少則從夫、老則從子、又、儀禮に

【窮した時の神のみ】平生無信心な者も、一旦悲運に陥つて爲すべき術のない時は、俄に神佛に祈誓する、の意。轉じて、平素は疎遠な人の許へも窮した時には助力を乞ふことをいふ。

〔窮する〕こゝでは、苦しむ、困りきる、の意。

〔神だのみ〕神に祈つて其護を願ふこと。神に依頼すること。

【宗教思想】 シェウケウシサウ 宗教に對するかんがへ。

【袖振り合ふも他生の縁】 人と袖の觸れあふほどの些細な關係も、皆深い因縁あつての事である、の意。

〔他生の縁〕 タンシャウのエン (二〇〇頁を見よ)

【佛教によりて養はれたる因果思想】

佛教では自然・人事の一切は皆因果の理によつて生成變化するものと考へた。所謂善因善果・惡因惡果等は佛教因果論の一部を成すものである。

【念頭】 ネットウ こゝろの上。こゝろ。おもひ。心頭。

【親の心子知らず】 親の立場に立たないと、親の心は理解

出来ないものだ、の意。親の心の廣く深いことをいつたもの。

【子を知るもの親にしくはなし】 子の性情を知ることにはその親に及ぶ者はない、の意。

史記に「吾聞之、明君知臣、明父知子」、又、管子に「鮑叔曰、先人有言、知子莫若父、知臣莫若君」とある。

【子ゆゑの闇にまよふ】 子を思ふ愛情の爲に、親の心が道理に聞くなり、思慮・分別がつかなくなることをいふ。

後撰集卷十五の藤原兼輔の歌に「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるか」とある。

【孝行したい時に親はない】 年長けて親に孝を盡くさうと思ひ立つ時にはすでに親は世に生存しない、の意。親の存命中に十分孝養を盡くさないと後悔する時があることをいふ。

孔子家語、致思第八に「樹欲静、而風不停、子欲養、而親不待」とある。

【かはいゝ子には旅をさせよ】 最愛の子は旅に出して世の辛酸を嘗めさせよ、の意。

犬子集に「いとほしき子も旅させよ秋の鳥」とある。

【子は三界の首枷】 子に對する愛情故に親は妄執の奴隷となり、永遠に苦惱を脱することが出来ぬ、子は實に三世に互る親の首枷である、の意。子に對する愛情の限りなく深いのをいつたもの。

〔三界〕 サンガイ 佛語。(一)一切衆生の生死・輪廻する世界の總稱で、欲界・色界・無色界をいふ。(二)三千世界の異稱。(三)過去・現在・未來の三世の稱。(四)或語に添へて遠く隔たつた所をさしていふ語。くんだり。

【首枷】 クビカセ (一)「くびかし」の轉。古へ、罪人の頸にかけたかせ。(二)ほだし。てあしまとひ。係累。

【枷】 (一)刑罰の具で、木又は鐵で作り、人の體に加へて自由を奪ふもの。頸にはめるのを頸枷といひ、手のを手枷、足を足枷といふ。(二)離れ難いもの。足

手まとひ。係累。

【子か思ふよりは親は百倍に思ふ】 子が親を思ふ心は深いものではあるが、親が子を思ふ心はそれに比して遙に深い、の意。

吉田松陰の歌に「親思ふこゝろにまさる親ごゝろけふの音づれ何ときくらん」とある。

【慈】 ジ 情深いこと。いつくしむこと。あはれみいとほしむこと。慈惠。慈悲。慈愛。

【至れり盡くせり】 とどかない所がない。この上がない。よく行届いてゐる。

【子よりも孫はかはいゝ】 子のかはいさは限りなく深いものであるが、孫はまたそれよりもかはいゝものである、の意。

【云ふものから】 いふものの。いひながら又一方に於て【子棄つる藪あれども身棄つる藪なし】 人はいよ／＼となれば最愛の子をさへ棄てるが、自分の身を棄てるといふ

ことはないものだ、の意。子より我が身が大切であることをいふ。

【主我心】 シュガシン 他人の利害關係に關せず、何事も自己の利害から割り出して考へる心。自己本位の心。利己心。

【言ひ穿てる】 イヒウガてる

【穿つ】 (一)掘る。孔をあける。(二)掘り抜く。つきぬく。(三)はく。著ける。(四)飽くまで理を窮める。穿鑿する。きはめる。(五)あばく。深く機微を發く。こゝは(五)。

【自利の念】 ジリのネン 己を利する心。他人を措いて、自己の利益・幸福を求める心。利己心。

【下さるものは夏も御小袖】 小袖は夏は不用なものであるが、下さるとなればそれをも貰ふ、の意。「貰ふものは夏も小袖」「夏も小袖」ともいふ。

【小袖】 コソデ 衣・相等の大袖に對する語。(一)古への、袖口狭く袖下を丸く縫つて作つた男女の下著。

【長いものには巻かれよ】 權勢ある者には負けてゐるのが一番だ、の意。抗しがたいものに抗する愚を戒めた弱者の處世法。「太きにはのまれよ」ともいふ。

【曲らねば世に立たれず】 人は時には自分の主義・主張を曲げて世俗に従はなければ、世に處し難い、の意。

【聖人】 セイジン 智徳の圓滿な完成を得た理想的な人格者。ひじり。こゝでは、孔子をさす。

支那では聖人を古代の堯・舜・禹・湯・文王・武王・周公・孔子等の稱とする。それに亞々のを賢人といひ、これを伊尹・太公(呂尙)・顔子・曾子・孟子等の稱とする。

【知らざるを知らずとせよ】 自分の無知を知ることが最も深い知であることを訓へたもの。

論語、爲政第二の中の句。原文には「知<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>爲<sup>シ</sup>知<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>、不知<sup>ラ</sup>爲<sup>シ</sup>不知<sup>ラ</sup>、是知也」とある。

【知りて知らざれ】 知つてゐても知つた風をするな、それが世に處する要訣である、の意。

(二)後世は染色・織織に關せず、總べて絹布の綿入の稱。こゝは(一)。

【かたき家にも口をぬらせ】 たとひ敵の家でも馳走してくれらるものは辭退するな、の意。

【口をぬらす】 (一)口中をうるほす。(二)少し飲食する。

【ころんでも只是起きぬ】 たとひ地にころんでも、何かしら攫んで起き上る、の意。慾深い者は如何なる場合をも利益獲得の機會たらしめねばおかぬことをいふ。

【泣く子も目を見る】 幼児でさへも相手の顔色を見て泣いたり泣き止んだりする、の意。辨へのない者も周囲の形勢を見て動くものであることをいふ。「泣く子も目を見よ」「泣く子も目をあけ」ともいふ。

【油斷大敵】 ユダンクイテキ 油斷は事を成し遂げる上の最大の妨害者である、の意。

【小を棄てて大に就け】 物事の大小・輕重を比較して小なるものをすて大なるものをとれ、の意。

老子に「知<sup>ル</sup>不知<sup>ラ</sup>上<sup>ニ</sup>、不知<sup>ラ</sup>知<sup>ル</sup>病<sup>ト</sup>」とある。

【鷹は死すとも穂をつます】 肉食鳥たる鷹はたとひ飢餓に死ぬとも、自分の食物でない穀類の穂をついばむやうなことはしない、義を守る士は飢渴が迫つても當然受くべきでない財祿は受けない、の意。

【つむ】 向齒<sup>むかはば</sup>で噛む。かじる。食ふ。かぶる。

【氣概】 キガイ (一)意氣の優れて操持の高いこと。(二)いきはり。いきぢ。氣骨。こゝは(一)。

【概】 みさを。「節概」

【立つて居るものは親でも使へ】 非常の際には、働き得る人ならたとひ親でも使へ、の意。又、使へるものはたとひ親でも使つて自分の勞を省け、の意ともとれる。こゝは後の意で引用してゐるやうである。

【躊躇】 チウチュウ 決行に迷ふこと。いかにしようかと控へること。ためらふこと。

【世態】 セタイ 世の中の有様。世間の状態。

【實相】 ジツサウ (一)實際の有様。まことのすがた。眞

相。(二)佛語。萬有の生滅の相を離れた眞實の相。如實の相。こゝは(一)。

【好きこそ物の上手なれ】物事に上達するには、好きなのが最大の要件だ、の意。物事の上達には好きといふことが大切であるといふことを強調していつたもの。

古歌に「上根と器用と好きの三つの中、好きこそ物の上手なりけれ」、又、菅原傳授手習鑑に「好きこそ物の上手とは、藝能修行教への金言」とある。

【下手の横すき】上達の見込がなくて、徒らにそれを好むのを冷笑的にいつたもの。

【横すき】ヨコすき 本業でないものを好むこと。その道以外ながら好むこと。

【親に似ぬは鬼子】親に似ない子は人の子ではない、の意。どんなものになるか分らない恐いものである意にいふ。

枕草紙、第四一段に、母なる養蟲がその子のことを、「鬼の産みければ(父親が鬼であらうから)、親に似て、これもおそ

ろしき心地ぞあらむ」と恐れて、棄子にして逃げ去つたといふ當時の傳説らしいのが見えてゐる。恐らくかういふ所から出た諺であらう。

【形生めども心は生まず】身體は生んだが心は生まない、の意。子が親に及ばない場合にいふ。

【内秘】ナイヒ (一)内部の秘密。(二)佛語。内に菩薩の大行を秘して、外に小乘しょうもん聲聞の相を現すること。舍利弗せりふの如きがこれである。こゝは(一)。

【警戒】ケイカイ (一)注意してしましめること。ぬかりなく用意すること。(二)不慮の變に對する準備。こゝは(一)。

【諷刺】フウシ (一)遠廻しに他人の缺點をいふこと。それとなくそしめること。あてこすり。(二)詩・劇・文章等で、機智的・冷評的な方法によつて、社會又は人の過失・缺陷・罪惡等に對して揶揄・非難・警告等をなすこと。こゝは(一)。

【許きて】アバきて

【許く】他人の密事を探り出して發表すること。

【罵倒し了する】罵つてしまふ。

【罵倒】バタウ 思ひ切つてあしざまにいふこと。手

### 二 解釋

#### 1 主題 俚諺の表現様式と内質。

#### 2 構想

(1) 俚諺の詩的性質(初—一三七ノ六)。

イ 妙味が存在。

ロ 律語性・具象性。

ハ パラドックス・對照・比照・暗喩・隱喩に富んだ表現様式。

(2) 俚諺の現してゐる國民性・人間性(一三七ノ七—終)。

イ 國民の氣風と國民の生活。

ロ 親子關係の表裏と自利の念。

ハ 人間性の兩面。

#### 3 敘述

〔俚諺の上乗なるものは、多くは此の三者を具ふ〕——螿・蜜・小軀を俚諺の性質とした所は面白い。この三者の一者を缺いても妙味は失はれる。三者具備の故に無盡藏の妙趣が生ずる。

痛くのゝしること。ひどくけなすこと。

【了す】レウす こゝでは、をはる、つくす、の意で、主として語勢を添へる爲に用ゐられてゐる。

〔雉子も鳴かずばうたれまい〕——こゝでは七五律を成してゐる俚諺の一性質を示す爲に掲げてゐるが、これは同時に暗喩を用ゐてゐる例でもあり得る。「口は禍の門」といふよりも、教訓が露骨でない所に詩趣がある。どの俚諺も一應は表現様式から、また内實から検討すれば、一つの俚諺がいくつかの條件の實例になり得ることが發見せられる。

〔かく相反するが如き事柄の中に、却つて相通する所あるを發見するは、深遠なる智慧の一特徴なり〕——「深遠なる智慧」とこゝでいつてゐるのは、論理的判断の確といふやうなことではなく、人生の體驗を積んだ深さから歸納せられた智慧の確さや鋭さを意味するものであることはいふまでもない。

〔斯く比喩の用法は種々あれども、寓言に於けるそれとは同じからず。寓言は敘事の體裁を具へ、俚諺は然らず。同じく意を寓して比喩を用ゐるも、寓言はこれを出來事又は動作として語り、俚諺はこれを時間に結ばずして常恆の事實として語る〕——寓言の譬喩には時・處・位がある。假令不確定的でなり、それが示されてゐるのが一般である。然るに俚諺の譬喩にはそれが無い。いつでも普遍・常恆の事實として語られる。そこにそれ〴〵の特色がある。

〔俚諺は事の一面を見て、これを誇張して言ふの傾あるものから、其の他面を言ふに躊躇せざるが故に、一見其の判断の相反するが如く思はるゝものあれど、かく兩面より言ふところ、能く世態・人情の實相にかなひて、其の判断概ね公平なり〕——世態には、又人情には、矛盾が、撞著がある。その眞相・實狀に觸れた立言は自ら相反することはいふまでもない。俚諺の妙味はそこまで言ひきつてゐる所にあるのである。随つて、それは常に一面の眞理を道破してゐるといふ性質を離れない。

### 三 批評

蒐集せられたものが代表的なものであり、又その整理が妥當である所に、作者の理解力の的確さが認められると共に、

立論の筋が立つて、俚諺を系統的に概観させ得てゐる所に批判力の鋭さが現れてゐるといふべきであらう。更に俚諺研究の興味を喚起させる上にも意が用ゐられてゐる。

### 三 備考

#### 一 指導の問題

こゝに引例せられてゐる箇々の俚諺の理解が十分でない、この論の價値はわからない。箇々の俚諺の理解を十分ならしめるには、中々時間を要する。この課の指導は時間をかけないで、この目的を達成する所に工夫が要せられるであらう。もと〴〵、作者は箇々の俚諺については、それが人口に膾炙してゐるものであるだけに、讀者の理解を豫想してゐる。然るに生徒の年齢ではあまり俚諺に興味も持つてゐないし、その一々を理解する爲の人生についての體驗も乏しい。この事情からして、豫め箇々の俚諺の註解を主とした指導を試み、その上で全文の解釋に進ませることが却つて所要時間を短縮し、有効な指導の方法であるかも知れない。

全文解釋に於ては、何よりも構想を明らかにさせることを中心にして、主題をも決定し、敘述問題にも及ぶのが適當であらう。

尙、俚諺の性質上、他人から説明せられただけでは眞の理解には達し難い。人生に對する體驗の自覺として會得せられることによつて生きた理解となる。さういふ方向をとつた學習の指導が行はなくてはならぬ。

#### 二 參考資料

(一) 原文のうち、本文に續く結末の省略部分を左に引用する。

「御所内裏の事も陰ではいふ」と、然り、他に不敬罪を責むる者も陰では何事を言ふやらん。

同様な意味の俚諺を集むるも亦一異ならんか。「猿も木から落つる」、「弘法も筆のあやまり」、「智者も千慮に一失あり」、「龍馬のつまづき」、「上手の手から水がもる」などの類ひ多くあり。同一の俚諺を言ひかへたるの多き、「針の穴から天のぞく」と云ふに越えたるはなからん、「管の穴から天のぞく」、「竹の管から天のぞく」、「鑪の穴から天のぞく」、「よしのずるから天のぞく」など、其の何れか一が原始のものならんか。

我が國の俚諺は他國の之比して其の性質及び價值如何。此等の問題を考ふる前には先づ我が國の俚諺を採集せざるべからず。予輩は早く適當の準備を具へたる人が此の事に其の手を著けんことを切望せざるを得ず。トレンチの云へる所に従へばイスパニヤの俚諺には三萬の數あり、又彼れがヴェンデルの獨逸俚諺集によりて推算したる所にては其の國の俚諺十萬を下らず、而して此等が彼れの知れる諸國の俚諺の最も數多きものなりと。我が國の俚諺は其の數比較的は多しや少なしや。恐くは知れる人なかるべし。

(二) 俚諺を蒐録した主要な書物を左に列記する。

松江金頼 毛吹草(正保四年刊)

松浦 默 本朝世諺俗談(延寶七年刊)

貝原好古 諺草(元祿十四年刊)

貝原益軒 和漢古諺(寶永三年刊)

井澤長秀 本朝俚諺(正徳五年刊)

村田了阿 増補俚言集覽(明治三十三年刊)

藤井乙男 諺語大辭典(明治四十三年刊)

## 一八 ケーベル先生

夏目 漱石

### 一 解題

#### 一 本文

「ケーベル先生」の殆ど全文を採掲した。

「ケーベル先生」は明治四十四年七月十六・十七兩日の東京朝日新聞に掲載せられたものである。漱石全集第九卷、同普及版第十三卷所収。(漱石全集 全十四卷、同普及版 全二十卷、漱石全集刊行會發行)

#### 二 作者

夏目漱石。英文學者・小説家。本名は夏目金之助。慶應三年正月江戸馬場下(現牛込區喜久井町一番地)に、名主夏目小兵衛直克の末子として生まれた。三歳の時養子に遣られたが、數年後實家に歸つた。一ツ橋中學校(東京府立第一中學校の前身)を半途退學後二松學舎・成立學舎に學び、明治十七年東京大學豫備門豫科(第一高等學校の前身)に入り、途中一回原級に留つて、二十一年本科に入り、二十三年卒業、帝國大學文科大學に入学、英文學專攻。特待生となり、又學費補給の爲早稻田專門學校に教鞭をとつた。二十六年英文學科卒業、更に大學院に入学。高等師範學校(東京高等師範學校の前身)・松山中學校・第五高等學校に教へ、三十三年文部省の命により英語研究の爲英國へ留學。三十六年歸朝、第一高等學校教授に任じ、東京帝國大學講師となり、三十七年から明治大學にも講義したが、四十年一切の教職を辭し、朝



日新聞社員となり、出勤せずして文藝的述作を掲載することとなつた。四十二年滿洲遊行、翌年胃潰瘍の爲吐血して重態に陥つたが、この大患によつて人及び藝術上に一轉機を來した。四十四年博士號辭退。大正五年十一月胃潰瘍の爲大出血二回、十二月永眠した。享年五十。

明治二十四年頃から句作に専念して子規と交遊が厚く、俳壇にも一地位を占めてゐた。三十八年一月から「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を掲載して一躍文名を轟かした。三十六年頃からは繪筆を弄び、歿年なる大正五年頃も頻りに書畫をものしてゐる。又五年夏から秋にかけては漢詩を作ることが多かつた。著作には「吾輩は猫である」を始め「倫敦塔」「薙露行」「坊ちゃん」「草枕」「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」「彼岸過迄」「行人」「心」「硝子戸の中」「道草」等があり、絶筆「明暗」は未完のまま遺された。小説・俳句・書簡・紀行・小品・文學論・文學評論・隨筆等總べて漱石全集に收められてゐる。

### 三 採擇の趣旨

明治大正期に於ける隨筆形態の一例として掲出した。訪問記であり、人物評傳であるが、その本領は隨筆である。文藝的教材であるけれども、ケーベル博士その人が明治大正の文化に對して人格的影響の深かつた存在であり、又その思想・好尚が眞にヨーロッパ的であることによつて、却つて東洋精神と相通ふものがあつたことに於て、人間的教養に資すべき文化的教材でもあり得る。

## 二 教材としての研究

### 一 註解

【ケーベル】 Raphael von Koerber 哲學者・音樂家。西

曆一八四八年一月ロシアのニジニノヴゴロド（現マキシムゴリキー）に生まれた。父はドイツ系ロシア人。母系はスウェーデン人とロシア人との混血。一歳の時母を亡ひ、母方の祖母に養育せられ、學問的・音樂的教養を受けた。生地のギムナジウムを歴て、一八七二年モスコの音樂學校を卒業したが、志望を學術に轉じ、翌年ドイツのイェナ大學に入り、ヘッケル・オットー・フライデラーの下に學びオイケン（オイケン）の講義も聞いた。三年の後、ハイデルベルク大學に移り、クローノー・フィッシャー（クローノー・フィッシャー）に學び、一八八一年シローベン・ハウエル（シローベン・ハウエル）に關する論文で學位を得た。翌年、カルスルーエ音樂學校で音樂史・美學を講じ、翌年ミュンヘンに赴いて著作に従事した。一八九三年（明治二十六年）エドワルト・フン・ハルトマンの推薦により帝國大學の教師として來朝。二十一年間西洋哲學・ドイツ文學・古典語學等を講じ、その人格と學殖とによつて學生を薰陶し、傍ら東京音樂學校でピアノを教

一八 ケーベル先生

へたこともある。一九一四年退職、友人である横濱のロシア總領事アルツール・ウィルムの官邸に寄寓し、一九二三年（大正十二年）六月同所で歿した。生涯獨身であつた。その哲學的立場は自ら超絶的汎神論又は基督教的汎神論と稱した。著書には「シローベン・ハウエル解脫論」「ハルトマンの哲學體系」「シローベン・ハウエルの哲學」「哲學史要」「小品集」「續小品集」「續々小品集」等があり（小品集は何れも邦譯がある）、我が國の學界に大きい感化を残した。

【煙草】 タバコ 茄科、たばこ屬に屬する植物（たばこ、まるたばこ等）の葉を特定の方法で乾燥し、特殊の醱酵を生ぜしめて製したもので、刻煙草・紙卷煙草・葉卷煙草に大別せられる。喫煙の風習はもとアメリカ土人の間に行はれてゐたものが、十六世紀の中葉ヨーロッパに傳はり、次第に世界的に普及したのであるとせられてゐる。

「たばこ」は、南米の原産で、一・二—一・五米の一年生草本。全株に粘毛が密布し、葉は有柄で卵狀披針形（又は披針形）・鋭尖頭。夏日淡紅紫色の漏斗形五瓣

花を圓錐花序に頂生し、卵形の蒴果を結ぶ。現在種々の栽植變種が作られ、主なる外國品種には、スマトラ種・アメリカ種・キューベ種・トルコ種等がある。

「まるばたばこ」は、メキシコの原産で、大形・肥厚の卵形又は長橢圓形の葉を有し、暗黄又は淡緑の盆形花を總狀に開く別種であるが、遙に需要が少い。

【安倍君】 アベケン 安倍能成氏。哲學者。明治十六年十二月松山市小唐人町に生まれた。第一高等學校を歴て明治四十二年東京帝國大學文科大學哲學科を卒業。嘗て日蓮宗大學・慶應義塾大學・法政大學・第一高等學校等に教鞭を執り、現に京城帝國大學法文學部教授である。夏目漱石の門に出入し、評論・隨筆等の文章にも見るべきものが多い。著書には「西洋古世哲學史」「西洋近世哲學史」「カントの實踐哲學」の外「青丘雜記」「靜夜集」等の隨筆・紀行數種があり、譯書に「ケイ大思想家の人生觀」「カント改訂道德哲學原論（と共譯）」「カント宗教哲學」等がある。

【甲武線】 カウブセン 東京・八王子間の私設鐵道。甲武鐵道會社の經營にかゝり、明治二十二年新宿・八王子間開通、二十八年東京市内飯田町まで延長、三十七年飯田町・中野間電車運轉、同年末飯田町よりお茶の水まで延長、更に萬世橋まで延長工事中、三十九年鐵道國有法の規定により政府に買収せられ、東京・甲府間を結ぶ官設鐵道中央東線（本線）の一部となつた。

【軒竝】 ノキナミ（原文振假名は「かどなみ」） 軒から軒へと家々の竝びあふこと。又、その家々。こゝでは、副詞として用ゐてゐる。

【先生の住居】 センセイのスマヒ 當時ケーベル博士は東京市神田區駿河臺鈴木町十九番地（現同區駿河臺二丁目三番地）の男爵原田熊雄氏所有の邸宅（今、日佛會館の所在地）に住んで居た。この住居は最初來朝當時に住んだ家で、間もなく小石川區白山御殿町に移つたが、數年後再び此處に移り、後、横濱居住に至るまでの二十餘年間をこの家で過した。

【古ぼけたなりで】 古びてきたなくなつたまゝで。

【なり】 指定の助動詞「なり」から轉じて、そのまゝに打任せた意を表す助詞。

【煙ぶり返つた】 すつかり古ぼけくすんだ。いかにも地味に落ちつききつた。

【煙ぶる】 クスぶる 「ふすぶる」の轉。(一)燃えずに煙だけが立つ。ふすぼる。いぶる。(二)煙の煤が附く。(三)家に引籠つて、陰氣に暮す。(四)長く同一の場所にて、發展しない。

【返る】 カへる 動詞に添へて、そのことの甚だしい意を表す。「あきれ返る」「威張り返る」

【減多に】 メツタに 「減多」は當字。(一)むやみに。みだりに。(二)そのことを度々はしない意(下に打消の語を伴ふ)。(三)は(二)。

【取りも直さず】 たゞちに。そのまま。即ち。

【素裸】 スハダカ 全くのはだか。まるはだか。

【素】 (接頭) (一)装はず飾らず、又はつけ加へずに

そのままである意を表す。「素顔」「素肌」(二)何物をも所持しない意を表す。「素手」(三)平凡の意を表す。

【素町人】 こゝは(一)。

【熟視】 ジュクシ つくつくとみること。じつとみつめること。

【さまで】 さやうにまで。それほどまで。

【大學院にはいつた年】 明治二十六年、作者二十七歳の時。當時ケーベル博士は四十五歳であつた。

【大學院】 ダイガクケン 帝國大學の一部で、各學部の卒業生及びこれと同等以上の學力ありと認められた者が、更に精深な程度の學術・技藝を攻究する所。在學期間は二年であるが、研究の都合により五年まで延長することが出来る。

【オーバーン】 *auburn* (英) 赤褐色。赭色。褐色。

【血色】 ケツショク (一)血の色。(二)顔色。いろつや。

(三)赤い色。こゝは(二)。

【みづ／＼しく】 瑞々しく 如何にもつや／＼と若々し

く。勢よくつややかに。

【ぼけ切つた】(色が)すっかり褪せてぼんやりした。

【ぼける】(一)知覚が鈍くなる。愚かなさまになる。

ぼんやりする。ほうける。(二)染色が褪める。色がうすくなり分明でない。

【洋書】 ヤウシヨ 西洋から来た書籍。洋本。

【唐本】 タウホン 支那から舶來した書籍。漢書。漢籍。

【唐】 コムでは、廣く支那の意。

【和書】 ワシヨ 和文の書籍。和綴の本。

【裝飾的】 サウシヨクテキ 裝飾としての價值を持つてゐること。裝飾を目的としてゐること。

【背皮】 セガハ 「背革」とも書く。洋書の背に貼る革。

又、貼つた革。

【派手やかさ】 はなやかさ。はなやかなさま。華麗。

【派手】 ハデ 「ちみ」の對。「派手」は當字。(一)色

どり・装・聲等のはなやかなこと。(二)すべての物事のはなやかなこと。けばくしいこと。飾の多く大仰

なこと。

【褪めた】 サめた

【褪める】 色がうすれて變る。あせる。變色する。

【埃及煙草】 エジプトタバコ 現在では、主として小アジアのトレビゾン地方に産するトルコタバコこの葉(トレビゾン葉)を原料として製した紙巻煙草をいふ。

【金文字】 キンモジ 金泥で書いた文字。金粉・金箔で表した文字。書籍の表紙や背に金箔で表した題名などの文字。きんじ。

【背表紙】 セベウシ 洋綴の書籍の表紙の背に當る部分。

【眼を刺激しなかつた】 眼をひきつけなかつた。眼に觸れなかつた。特に注意を惹かなかつた。

【純潔】 ジュンケツ (一)けがれなくいさぎよいこと。少しのよごれもなく極めて清淨なこと。(二)邪念・慾念を懐くことなく、心の極めて潔白なこと。コムは(一)。

【白布】 ハクフ コムでは、正餐の際に用ゐる白地の食卓掛。

(一)。

【襟】 エリ コムでは、カラー(collar)をさす。

【襟飾】 エリカザリ コムでは、ネクタイ(necktie)をさす。

【千筋】 センスヂ 縦の織筋の細かなもの。細い縦縞。(更に細かいのを「萬筋」といふ。)

【背廣】 セビロ 背廣服。男子用の折襟の略服。活動に便利なのを主眼とし、胴も背も廣く作る。略服又は事務服として、和服の袴物位に相當する。

現代では常服として使用の範圍甚だ廣く、社交上特に儀禮を重んずる場合の外は、大抵背廣で差支のない傾向になつてゐる。

【無造作】 ムザウサ さうさないこと。手輕なこと。容易なこと。慎重でないこと。

【造作】 仕方。手段。工夫。

【儀式ばらぬ】 ギシキばらぬ

【儀式ばる】 ことごとくしく體裁を飾る。ていさいぶ

歐洲人は、白布を食卓に用ゐるのを、正餐に於ける禮儀とし、嗜としてゐる。白リンネル・白キアラコの無地物及び模様物が多く用ゐられるが、平常は食器の下にだけ小さな布を敷く。

【くすんだ】 はででない。ちみな。

【くすむ】 (一)はででない。ちみである。(二)まじめに見える。しぶく見える。(三)老人めく。大人めく。

【更紗形】 サラサガタ 人物・動物・花卉・線條等を幾何畫的に硬化して布の總面に現した模様。更紗に染め出した模様。更紗模様。

【更紗】 更紗模様を染め出した綿布。原生産地は印度及び暹羅等であるが、今は廣く我が國又は英・佛・露・米・印度・ジャワ等に産し、近來綿布・絹布・モスリン・麻布・人絹布などの片面又は両面に連続した幾何畫的模様をほどこしたものを總稱する。

【新調】 シンテウ (一)新しくととのへこしらへること。

新規に作ること。又、その物。(二)新しい調子。コムは

る。しかくばる。

【正装】 セイサウ 正服(表だつた時に着用する正式の衣服) を着用すること。正服のよそほひ。(略装の對。)

【服】 ナリ(原文振假名) みなり。服装。よそほひ。

【痛み入る】 イタミイ 心に深くいたみ思ふ。過分に仕向けられて、却つて心遣ひになる。恐入る。恐縮する。

【洗ひたて】 アラひたて 洗つたばかり。

【たて】 立て 動詞に添へて、その動作の終つて間のないさまを表す。

【演奏會と芝居と圖書館と畫館が云々】

「ケーベル博士小品集」に「貴君は恐らく私が自分の『幸福』のために、此上美しい自然や圖書館や美術館や劇場其他を要求しないのを怪むであらう。所が獨逸に於ては此等一切のものは如何なる場合にも隨處に備はつて居る、さうしてそれがちやうど私の滞在する土地に無くても屹度極めて近距離の地にあつて、其處へ行くのも容易である。云々」、「日本へ來て、音楽らしい

音楽といふものを聴くことが出来ないやうになつて以來、私は我が大音楽家の作品を讀むことにして居る。これに依つて私は此等の作品の拙劣スチンペーハフチ・アウクスユールンゲなる演奏から受けるよりも遙に大いなる樂を享けるのである。云々」等とある。

【演奏會】 エンソウクワイ 音楽を演奏して聴衆に鑑賞させる會。音樂會。

【芝居】 シバキ こゝでは、劇場、の意。演劇乃至これに類する技藝の上演を目的とする建築物。

【圖書館】 トシヨクワン 圖書目錄を蒐集保管して公の閱覽に供し、普く社會人の教養と學術の研究に資し、人類文化の向上に寄與する教育機關。

【畫館】 グラクワン 「美術館」に同じ。Kunststamm-  
lung (獨) に當る語。(一)美術博物館。古今の美術に關する事物を蒐集し、組織的に陳列して一般の公衆に觀覽せしめる爲の建物、及びその内部の設備をいふ。  
(二)畫廊。美術陳列所。

【あながち】 強ひて。おして。無理に。一概に。むやみに。  
【矛盾がち】 矛盾の多いこと。

【矛盾】 ムジユン 「矛盾」とも書く。(一)ほことたてと。(二)事の前後揃はぬこと。自家撞著すること。

【がち】 勝 (接尾) 或語に添へて「多い」又は「かたよる」の意を表す。

【空虚】 クウキョ 内部のむなししいこと。何もなしいこと。から。うつろ。

【過渡層】 クワトソウ 舊い状態から新しい状態に移らうとする中間の状態。

當時の世態が單一なものではなく、新時代と舊時代とを兩極端として、いくつかの中間的な世態が幾重にも重り合つてゐるといふ意味でいつたのであらう。

【過渡】 (一)わたること。わたる所。(二)舊態を脱して、未だ新態の成立しない途中。

【層】 隣接する物質と區別し得られる状態で、自然に若しくは人工的に、或厚さをもつて略水平に廣がつて

存在するもの、又はその積み重り(例へば地層の如きもの)をいふ。

轉じて、社會に於ける階級・身分・職業等による或特定の集團を、他の集團からきりはなして考へる場合などにも用ゐる。「下層階級」「學生層」「讀者層」

【目撃】 モクゲキ 直接、目に觸れること。實際に見ること。

【風馬牛】 フウバギウ (一)繋がれず逸走する馬と牛と。(二)轉じて、互に遠隔の地にあつて會へないこと。(三)更に轉じて、事の、自分と關係ない譬。こゝは(三)。

【現象】 ゲンシャウ (一)あらはれたさま。見えるかたち。(二)感官によつて受入れられた對象。五官を通じて吾人の經驗し得る總べての事物の象。(本質・本體の對。)

【煤煙の巷】 バイエンのチマタ 俗世間のこと。(本文の「煤煙」は「煤煙」の誤)

【巷】 「岐」「衢」とも書く。「道股」の義。(一)路の分岐する所。わかれみち。岐路。(二)街・里の中の路。

往來。往還。街路。(三)水の別れる所。(四)ところ。

場所。

【希臘の彫刻】ギリシャのテウコク エジプトの彫刻が威嚴と力と安定のそれであつたのに對して、ギリシャのそれは神を人間態に造形する要求から、更に人間の最も理想的な生態美の表出を追求し、青銅・大理石等を以て神韻と優雅とを具ふる寫實的完成に達した。ミロン・フィディアス等はその代表的な作家である。西曆前四世紀以後になると人間性の表出が濃厚となるとともに漸く頽廢的要素をも含むに至つたが、古代ギリシャの彫刻は最近世に至るまで、長く西洋彫刻の典型とせられた。

【雜聞】 ザッタウ こみ合つて騒がしいこと。

【鬧】 ダウ かまびすしい。さわがしい。

【敷石を囓む鉄の響】

現代人の實用的・功利的でがさつなまをいつたのであらう。

【鉄】 ビヤウ (一)頭の大きい釘。打つて物を固め、又かざりとするもの。銅・鐵・眞鍮・金・銀等でつく

る。(二)畫鋏。押ピン。

【紀元前の半島の人】 古代ギリシヤ人をさす。

【サンダル】 sandal (英) 履物の一種。我が國の草鞋に似たもので、底と紐とから成り、これを足の甲に結びつけてはく。古代に、ギリシヤ・ローマ人に最も多く用ゐられ、最初は棕櫚の葉・草等を材料とし、靴の濫觴をなした。後には皮革・木・コルク・編細工等を材料として種々の意匠を凝らし、中には銀製・金製のものもあつた。博士は、自宅では實際サンダルを穿いてゐたさうである。

【大學の圖書館】 こゝでは、東京帝國大學附屬圖書館をさす。

【書架】 ショカ 書物を置く棚。書棚。

【架】 棚。物品を載せ、又は掛けて置く臺。

【ポー】 Edgar Allan Poe アメリカの詩人・小説家。

西曆一八〇九年一月ボストンに生まれた。三歳の時両親を失ひ、裕福な煙草輸出商人の養子となり、六歳の時イ

ギリスに伴なはれてロンドン近郊の小學校で教育を受けた。五年の後歸米しヴァージニア大學に入學したが、在校一年、詩作と賭博に耽つて放校された。張場小僧・軍人・雜誌記者と、生活は常に動搖し、東西に流浪した。晩年貧苦と阿片の爲に健康を害し、一八四九年十月ボルティモアの病院で歿した。その作品は個人の心理の奥に悶え蠢いてゐる魂の姿を憂苦と恐怖の病的・神祕的空気に包んで描き出したものが多く、世界文學中の一異彩といはれ、歐洲大陸の文壇に著しい影響を與へた。著作には「ウィリアム・ウィルソン」「赤死病の假面」「渦潮」「黄金蟲」「アッシュ家の崩壊」「リディア」「大鴉」「アナベル・リイ」「レノア」等がある。

【ホフマン】 Ernst Theodor Amadeus Hoffmann ドイツの小説家・作曲家・漫畫家。西曆一七七六年一月ケルニヒスベルクに生まれた。その生活は放縱で、素行上非難される點があつたが、小説家としては浪漫派の尖端に立つて奇異・辛辣の中に豊かな空想を盛り、詩の方でも

亦、空想の豊かな、心情に富んだ天才的詩人であつた。一八二二年六月ベルリンで歿した。著作には「黄金寶壺」「惡魔の靈液」「セラピオン同人」「從兄の隅窓」「スキューデリー嬢」「桶屋の親方マルティン」「ドージュ及びドガレッセ」等がある。

ケーベル博士はホフマンを「唯一無二の、世界に於ける何人とも比較し得ざる詩人」として愛好した。博士のホフマン評は長逝の直前迄雑誌「思想」(大正十二年三月・五月・六月號)に「文學に於ける驚異すべきものに就て」といふ題で出てゐる。

【蝙蝠】 カウモリ 「かはほり」の轉。翼手目に屬する哺乳類の總稱。頭は鼠に似て體は小。前肢は長大で五指も異常に發達し、指間及び第五指と後肢との間は皮膜によつて連ねられて一種の翼をなし、鳥の如く飛翔し得る。大蝙蝠類(大翼手類)と小蝙蝠類(小翼手類)とに大別される。前者は大形で果實を食し、主として東半球の熱帯及び亞熱帯に限られ、後者は小形で昆蟲を食し(偏に果

【謎の様な答】 意味のはつきりつかめないやうな答。暗示的な答。  
【謎】 ナゾ 「何」の義。(一)「なぜ」の略。隱言。はんじもの。(二)とほまはしに言つて、それとさとらせること。又、その言葉。(三)意義不明で解釋のむづかしいこと。又、その言葉。

【惡魔】 アクマ こゝでは、*satán, demon, devil* (英) 等の譯語で、基督教及び廣く泰西の民間傳説に現れる人格化された惡靈をいふ。一般に神又は天使と對立し、人間を不信仰に導いて罪を行はせ、且疾病その他諸種の災厄の原因をなすものと考へられ、繪畫・彫刻などでは、獅子・龍・鱉・蛇の姿、又は蝙蝠の翼、山羊の蹄、蛇の鱗をもつた怪物の姿などに表現される。

【卓を圍んだ四人】 ケーベル博士・作者・安倍氏の外の一人は、當時博士邸に寄寓してゐた現東北帝國大學助教久保勉氏である。

【懷疑論者】 *sceptic, skeptic* (英) 原義としては、「スケプチック」  
【懷疑論者】 (殊に、古代ギリシヤの哲學家の派の派を導く人)・不信仰者 (殊に、基督教に對する不信仰者)、又は、世論・權威・傳説その他あらゆる事物に對して疑念を懐く人、等の意であるが、稀に形容詞として用ゐられ、我が國では一般に後者として慣用する。

【伊太利】 *Italia, Italy* 南部ヨーロッパにある王國。地中海に突出する長靴狀のイタリア半島とシシリヤ・サルディニア等の島嶼から成る。面積三一〇、一三七方軒、人口約四、一六〇萬 (昭和七年現在)。北部は冬寒く春暖に雨量大で農産物を饒産し、南部は典型的地中海性氣候を呈し、夏乾・冬濕、世界的避寒地として知られ、殊にその南國的な青く澄んだ空と古羅馬の昔を物語る大理石の諸建築との對照の美を以て名高い。

【聯想】 *レンサウ* 心理學上で、一の觀念に伴なつてこれと關係ある他の觀念を想起する心的作用。觀念聯合。但し時には聯合に通じて用ゐられ、意識の所動的狀態に於て行はれる總べての精神内容の結合 (ヴントはこれを聯合的結合と呼んで、統覺的結合に對めし)をいふ。

【蜥蜴】 トカゲ 石龍子とも書く。有鱗目、蜥蜴科の陸棲小爬蟲類。體は細長く鱗に被はれ、四肢は短小で、尾は長く切斷し易いが直ちに再生する。趾端には鋭い爪があり、上下兩顎に細齒を具へ、舌は扁平で短く殆ど口外に

出ない。我が國で最も普通に見られるのは、とかげ屬に屬する狹義のとかげで、本州・四國・九州・北海道に分布し、體背面は暗綠色の地に鮮綠色の稍太い三縱線が走り、側面は淡綠色で、腹面は淡黃褐色を呈する。尙、同じく本州・四國・九州等で普通に見るものに、背面が暗褐又は綠褐、腹面が白色又は淡黃で、舌が長く二又に分れてゐるものがあり、一般にはこれも蜥蜴といつてゐるが、これは金蛇科に屬するかなへびであつて、動物學的には全然別である。

【誤つて點ぜられた】 アヤマつてテンぜられた 間違つて置かれた。周囲の家と不調和な建物がぼつとりと一軒だけその間に挟まつてゐるのをいつた。  
【點ずる】 こゝでは、點を打つやうに、物の一小部分に他の物を加へる意。

【菊】 キク 菊科、きく屬の多年生草本。廣く觀賞用として栽培せられ、種々の園藝品種が作られてゐる。莖の下部はやゝ木質で、高さ〇・八一二米。葉は卵形で缺刻及

び鋸齒を有し、基底は心臟形で有柄、互生する。秋日莖頭に分枝して頭状花を開く。花は心花が管状花、邊花が舌状花であるのを原則とするが、その形状・大小・色彩等は種々雑多であつて一定しない。食用菊と觀賞用菊とがあり、後者は大菊・中菊・小菊に大別される。大菊の變種のみで

菊は支那の原産で、我が國には奈良朝末期に已に渡來したといはれてゐる。尙、古來我が國に自生して野菊と呼ばれてゐるのは、のちぎく・よめな・あぶらぎくその他の總稱である。

【椿】 ツバキ 山茶とも書く。山茶科、つばき屬の常綠亞喬木。幹の高さは數米に達し、葉は厚い革質で、長橢圓形・鋭尖頭をなし、縁邊に鋸齒を有する。春日、大形・無梗の赤色五瓣花を開き、花後圓形の蒴果を結ぶ。熟すれば蒴は裂開して暗黒色の無翼の種子二三を吐出する。我が國暖地の山中にも自生するが、多くは栽植種で、觀賞用として廣く栽培せられ、多數の變種が知られてゐる。

尙、蘭科に屬するかきらん(北海道・本州・四國等の山野に自生する、夏日莖上に淡黄色の蘭花を總狀に開く)も一名すずらんと呼ばれるが、普通には百合科のものをさす。

【果物】 クダモノ 果實の食べられるもの。なりくだもの。なりもの。水菓子。

【レモン】 Lemon (英) 檸檬・里木子等の漢字を當てる。芸香科、みかん屬の小喬木。幹は短形・剛硬の長刺を具へ、高さ數米。葉は長卵形で先端尖り、縁邊に鈍鋸齒がある。葉柄にはみかんの如き翼はない。初夏葉腋に上部白色・下部赤紫色の五瓣花を一箇又は數箇づつ生じ、花後一五―二四種の漿果を結ぶ。漿果は橢圓形で兩端やゝ尖り、表面滑澤で黃熟する。果皮はやゝ肥厚し、これよりレモン油を採つて種々の香料とする。又果肉は酸味強く、その搾液を調味料とする。種子は卵形であるが、缺如するものもある。熱帯アジアの原産であるが、現在は地中海沿岸地方に廣く栽培されてゐる。

【珈琲】 コーヒー coffee (英) 珈琲樹の果實中に存する

る。尙、種子よりは椿油を製し、材は算盤珠・櫛・版本その他の工藝品に用ゐられる。

我が國の自生種はやぶつばき(IIやまつばき)と稱して本州各地及び琉球に分布し、栽植種には、ゆりつばき・ちりつばき・きんぎよつばき・をとめつばき等が知られてゐる。又、同屬中の著名種には、さざんくわ・たうつばき等がある。

【鈴蘭】 スズラン きみかげさう(君影草)の異名。たにまのひめゆり(谷間姫百合)ともいふ。百合科、きみかげさう屬の多年生草本。根莖は横走し、それより二三枚の長柄・長橢圓形の葉を生ずる。葉は長さ一五厘内外で互に相抱き、全縁で平行脈を有する。六七月頃葉間に花莖を抜き、白色・短鐘形の小花を鈴を下げた如く偏側生總狀花序をなして下垂せしめる。花は可憐・清麗で芳香を有し、花後球形の漿果を赤熟せしめる。支那・歐洲・北米等に分布し、我が國では主として中部以北(殊に北海道)の山野に自生し、觀賞用として栽培せられる。

種子を乾燥し焙炒して粉末状にしたものを原料とした飲料。その興奮的成分はカフェイン、特有の苦味を與へるのはカフェー・タンニン酸である。

「珈琲樹」は、茜草科、コーヒのき屬の常綠灌木の總稱。コーヒの原料植物として最も普通に知られてゐるのはアラビカ種(狭義のコーヒ)であつて、幹の高さ七一八米。葉は橢圓形・鋭尖頭で短柄を有し、葉腋に二乃至九箇の芳香ある白色五瓣花を簇生、花後橢圓形の果實を結ぶ。果實は多肉質で紅熟し、黄色の果肉中に二箇の種子を含む。この種子が所謂コーヒ豆である。アラビア・印度・セイロン・ジャワ・スマトラ・マレー・メキシコ・西印度・中米・南米・濠洲等に栽培せられ、コーヒ生産高の大半を占めてゐる。外に西部アフリカに栽培されるリベリカ種(リベリア)等があるが、品質が劣り香氣にも乏しい。

尙、コーヒの品種は産地の名を以て呼ばれ、主なるものにブルー・マウンテン(西印度の高地産)・ハラリ(アフリカ産)・ハ

バシ(同)・モッカ(アラビ)・ジャワ(スマトラ)等がある。

【嗜好】 シカウ (一) 飲食物のすきこのみ。(二) 物事のすきこのみ。こゝは(一)。

【“no more, never more”といふポーの句】

ポーの詩「大鴉」中の句をさしたものであらう。但し、

「大鴉」は、十八節・百八行から成つて、初め七節の

## 二 解釋

1 主題 そつと煤煙の巷に棄てられた希臘の彫刻に血が通ひ出した様なケーベル先生の生活。

## 2 構想

- (1) 木の葉の間の高い窓の隅から見た先生の頭(初—一四三ノ二)。
- (2) 血色のいゝ先生の容貌(一四三ノ三—一四四ノ一〇)。
- (3) 地味な先生の書齋と食堂(一四四ノ一一—一四七ノ二)。
- (4) 先生の生活(一四七ノ三—一五一ノ四)。
- (5) 先生の印象(一五一ノ五—終)。

## 3 敘述

〔木の葉の間から高い窓が見えて、其の窓の隅からケーベル先生の頭が見えた〕——訪問記の著筆として、奇抜であり、印象的である。

〔其の中に先生の住居だけが、過去の記念の如く、たつた一軒古ぼけたなりで残つてゐる〕——駿河臺は當時から堂々たる邸宅の多かつた土地である。さういふ建物の間に、割竹の柵にかこまれた先生の住宅は實際「過去の記念」と呼ぶに相應はしい存在であつた。

〔先生は「少しも淋しくはない」と答へられた〕——故國を離れ、日本を特に知らうとするでもなく、しかも孤獨な毎日を送つてゐる先生がかくいはいはれてゐるのである。そこには敬虔な哲人らしいすべてが現れてゐる。たしかに永遠なもののみ思を致し、精神的な價值のみを追求した先生が答へてゐる答だ。

〔それ程西洋が好いとも思はない。しかし日本には演奏會と芝居と圖書館と畫館がないのが困る、それだけが不便だ〕——作者の間に對するケーベル先生の答である。先生が如何にヨーロッパ文化に對する深い愛に生きられたかはこの答の上にも感得せられる。

〔私もし日本を離れる事があるとすれば、永久に離れる。決して二度とは歸つて來ない〕——ケーベル先生の嚴肅な靈の眞實に觸れる思のする言葉である。どういふ意味で「永久に離れる」といはれ、「決して二度とは歸つて來ない」といはれるのか、それを窺ひ知することは出來ない。併しそこには蔽ふことも、誤魔化すことも出來ないやうな、嚴然たる眞實が存在することがはつきり感銘せられる。何よりも作者がこの言葉の嚴肅な響に打たれたことは、先生の下を辭去した直後の印象を書くのに、この時の言葉を引用してゐる事實の上にも看取せられる。

〔所謂新時代の世態が、周囲の過渡層の底から次第々々に浮き上つて、自分を其の中心に陥落せしめねば已まぬ勢を得つて進むのを、日毎眼前に目撃しながら、それを別世界に起る風馬牛の現象の如く餘所に見て、云々〕——ケーベル先生の世界は、現實の日本ではなかつた。隨つて現實の世態がどうあらうと、先生の世界は先生の世界として確立し、



嚴存してゐた。先生はその思想に於ても、又その風手に於ても、眞に時代を超越した高貴典雅な存在であつた。これにつゞく「煤煙の巷に棄てられた希臘の彫刻に血が通ひ出した様なもの」といふ譬喩は、實によく當つてゐる。

〔先生の履む靴の底には敷石を噛む鉄の響がない〕——物靜かな哲人らしい風手が浮かんで来る。そして神秘的ともいひたい何ものかが感じられて来る。

〔先生は紀元前の半島の人の如くに、しなやかな革で作つたサンダルを穿いて、おとなしく電車の傍を歩いてゐる〕——希臘彫刻の譬喩に脈をひいた一句である。併し「おとなしく電車の傍を歩いてゐる」姿にはギリシヤ人のもたなかつたであらう或ものが感じられる。いかにも先生らしい氣分が湧いて来る、象徴的な表現である。

〔先生は昔鳥を飼つてをられた。何處から来たか分らないのを餌を遣つて放し飼にしたのである〕——何でも無い思出の一つに違ひない。併し深く先生を知り、先生の生活に敬愛の情を持つ人であらう、見出せない思出である。それは何よりもこれが話題になつてどう展開したかを讀み通せば何人にも肯認せられる所であらう。

〔鳥の序に蝙蝠の話が出た。……余は「蝙蝠の翼が好きだ」といつた。先生は「あれは悪魔の翼だ」と云つた〕——この會話も面白い。作者らしき、ケーベル先生らしさがそれ／＼にくつきり出てゐる。更にいへば、東洋文化を背景に持つ作者と、ヨーロッパ文化を背景に持つケーベル先生とが躍如として描かれてゐる。

〔其の時、夕暮の窓際に近く蝸が来て朗かに鋭い聲を立てたので、卓を圍んだ四人はしばらくそれに耳を傾けた〕——讀んで来て何といふことなしに心を惹かれる沈黙の瞬間である。そして蝸の聲に耳を傾けて會話を中止した四人を奥床しく感じさせる描寫である。そしてこの沈黙の枠に収まつて、それにつゞく會話と思出とが、青く澄んだ空の深さと蜥蜴の美しさが、それ／＼に美しい畫面を構成する。

〔余等は、熱い都の中心に誤つて點ぜられたとも見える古い家の中で、靜かにこんな話をした〕——こゝにもケーベル先生の生活に對する作者の情熱が現れてゐる。そして、この節の最後を成してゐる「それから靜かな夜の中に安倍君と二人で出た」といふ章句と相俟つて、先生の家と生活とが都の中に置かれた別天地として感銘せられ、なつかしまれてゐることがよく示されてゐる。

〔安倍君と一緒に大きな暗い夜の中に出た時、余は先生は是から先もう何年位日本に居る積りだらうと考へた。さうして一度日本を離ればもう歸らないと云はれた時、先生の引用した“no more, never more”といふボアの句を思ひ出した〕——一種の内面的な興奮の境にゐた作者が、そこから離れた直後に考へさせられたことは、「是から先もう何年位日本に居る積りだらう」といふことであつた。そして思ひかへされたのは、「一度離ればもう歸らない」といはれた時に引用された“no more, never more”といふ句であつたといふ。そこに、人間同志のどうすることも出来ない或嚴肅なものを生かし、そこに作者の悲しんで傷れざる感傷を漂はしてゐる。

### 三 批評

恐らくケーベル先生を知り、ケーベル先生の著を手にした何人と雖も、一讀して忘れることの出来ない篇であらうと思はれる。

音樂家として教育せられ、哲學者として立たれた先生の人格の根柢には、藝術と哲學との深い微妙な調和が存立する。この一篇はさういふケーベル先生の肖像畫である。理知的な明快と、鋭いユーモアを特色とする作者の筆が、こゝでは著しく詠懐的な潤ひと、傾倒的な真情とを帯びてゐることも注意に價する。

三 備 考

一 指導の問題

(一) 訪問記であるが、讀めに往つたのでもなければ、貶しに往つたのでもない。様子を報告する爲に訪ねたのでもなければ、意見を紹介する爲に訪ねたのでもない。粗末な梯子段にも、質素なテールクロスにもケール先生その人を感じ、ふとした一語にも先生の深遠な思想そのものを暗示させてゐる。我々にはむしろケール先生の人物傳として讀まれる。

一體、一人の人格は、その人の生涯に於ける言行の總和でもなければ、生涯の最後に到達した思想・境涯でもない。寧ろ日々の一言一行にその全幅が示現するものであるといふべきであらう。併し、さういふ日常の一言一行によつて、その人の全人格を把握し表現することは、すぐれた人へのみ許された能力である。随つて、一言一行が單なる一言一行として描かれてゐるに過ぎないこともあれば、それが又全人格の示現として寫されてゐることもある。本篇の如き、一言一行・一事一物を極めて明確に描きつゝ、しかも自ら先生その人の全幅の具現たらしめてゐる。人物傳にして創作といつたやうな趣を有してゐる。

學習指導の方向もさういふ性質によつて定められなくてはならぬであらう。即ち、指導者の説明によつてケール先生その人を理解せしめようとせず、あくまでも本文に即し、本文の表現を通してケール先生その人を見出さしめなくてはならぬ。

(二) ケール先生が一種東洋的な好尚を有し、その思想には方丈記や徒然草の作者の思想と一脈相通ふものがあるこ

とも、鋭い生徒は氣付くであらう。そしてそれは、深く達し、眞に徹することは、やがて時代を超え、國境を絶した境地に出るものであることを示すものであるとしてもよいであらう。この點については、參考資料に引用する「ケール博士小品集」の諸篇がこれを立證してゐる。

二 參考資料

(一) ケール先生がこの後二年、大正三年八月十二日に日本を去らうとした際、作者が東京朝日新聞に書いた「ケール先生の告別」と、或故障の爲に出發が出来なくなつた爲に、その翌日の同紙に掲げられた「戦争から來た行違ひ」を左に引用する。

(一) 「ケール先生の告別」

ケール先生は今日(八月十二日)日本を去る筈になつてゐる。然し先生はもう二三日前から東京にはゐないだらう。先生は虚儀虚禮を嫌ふ念の強い人である。二十年前大學の招聘に應じて獨逸を立つときにも、先生の氣性を知つてゐる友人は一人も停車場へ送りに來なかつたといふ話である。先生は影の如く靜かに日本へ來て、又影の如くこつそり日本を去る氣らしい。

靜な先生は東京で三度居を移した。先生の知つてゐる所は恐らく此の三軒の家と、其處から學校へ通ふ道路位なものだらう。かつて先生に散歩をするかと聞いたら、先生は散歩をする處がないから、爲ないと答へた。先生の意見によると、町は散歩すべきものでないのである。

斯ういふ先生が日本といふ國について何も知らう筈がない。また知らうとする好奇心を有つてゐる道理もない。私が早稻田にゐると云つてさへ、先生には早稻田の方角が分らない位である。深田君に大隈伯の宅へ呼ばれた昔を注意されても、先生は既に忘れてゐる。先生には大隈伯の名さへ初めてであつたかも知れない。

私が先月十五日の夜晚餐の招待を受けた時、先生に國へ歸つても朋友がおりますかと尋ねたら、先生は南極と北極とは別だが、外の

處なら何處へ行つても朋友はゐると答へた。是は固より笑談であるが、先生の頭の奥に、區々たる場所を超越した世界的の觀念が潜んでゐればこそ斯んな挨拶も出来るのだらう。又斯んな挨拶が出来ればこそ、大した興味もない日本に二十年も永くゐて、不平らしい顔を見せる必要もなかつたのだらう。

場所ばかりではない、時間の上でも先生の態度は全く普通の人と違つてゐる。郵船會社の汽船は半分荷物船だから船足が遅いのは何故それを選んだのかと私が聞いたら、先生はいくら永く海の中に浮いてゐても苦にはならない、それよりも日本から伯林迄十五日で行けるとか十四日で着けるとか云つて、旅行が一日でも早く出来るのを、非常の便利らしく考へてゐる人の心持が解らないと云つた。

先生の金銭上の考へも、全く西洋人とは思はれない位無頓著である。先生の宅に厄介になつてゐたものなどは、随分經濟の點にかけて、普通の家には見るべからざる自由を與へられてゐるらしく思はれた。此前會つた時、ある蓄財家の話が出たら、一體あんなに金を溜めて何うする料簡だらうと云つて苦笑してゐた。先生はこれから先、日本政府から貰ふ恩給と、今迄の月給の餘りとで、暮らして行くのだが、其月給の餘りといふのは、天然自然に出来た本當の餘りで、用意の結果でも何でもないのである。

總て斯んな風が出来上つてゐる先生に一番大事なものは、人と人を結びつける愛と情だけである。ことに先生は自分の教へて來た日本の學生が一番好きらしく見える。私が十五日の晩に、先生の家を辭して歸らうとした時、自分は今日日本を去るに臨んで、たゞ簡単に自分の朋友、ことに自分の指導を受けた學生に、「左様なら御機嫌よう」といふ一句を残して行きたいから、それを朝日新聞に書いてくれないかと頼まれた。先生は其外の事を云ふのは厭だといふのである。又いふ必要がないと云ふのである。同時に廣告欄に其文句を出すのも好まないといふのである。私は已を得ないから、こゝに先生の許諾を得て、「さよなら御機嫌よう」の外に、私自身の言葉を蛇足ながら付け加へて、先生の告別の辭が、先生の希望通り、先生の薰陶を受けた多くの人々の眼に留まるやうに取り計らふのである。さうして其多くの人々に代つて、先生に恙なき航海と、穩かな餘生とを、心から祈るのである。

(二)「戦争から來た行違ひ」

十一日の夜床に著いてから間もなく電話口へ呼び出されて、ケーベル先生が出發を見合すやうになつたといふ報知を受けた。然し其

時はもう「告別の辭」を社へ送つてしまつた後なので私は何うする譯にも行かなかつた。先生がまだ横濱の露西亞の總領事の許に泊つてゐて、日本を去る事の出来ないのは、全く今度の戦争のためと思はれる。従つて私に此正誤を書かせるのも其戦争である。つまり戦争が正直な二人を嘘吐にしたのだと云はなければならぬ。

然し先生の告別の辭は十二日に立つと立たないで變る譯もなし、私のそれに付け加へた蛇足な文句も、先生の去留によつて其價値に狂ひが出て來る筈もないのだから、我々は書いた事云つた事について取消しをだす必要は固より認めてゐないのである。たゞ「自分の指導を受けた學生によろしく」とあるべきのを、「自分の指導を受けた先生によろしく」と校正が誤つてゐるの文は是非取り消して置きたい。斯んな間違の起るのも亦校正掛を忙殺する今度の戦争の罪かも知れない。

(二) 作者の本文が、ケーベル先生の思想と人物をよくその神髓で捕へてゐることは、後年ケーベル先生の書かれた小品集と比較することによつて明らかにせられる。今、それらに關して参照すべきケーベル先生の言葉を深田康算・久保勉兩氏共譯の「ケーベル博士小品集」(原著の序文には「一九一九年十月」とある)のうち「問と答」から左に抄記する。

私の最も住みたいと思ふのはどの國であるか。

何時までもとならば——獨逸より外にない。若し私にこれが許されなければ——獨逸系瑞西(瑞西中國邊境民族の住める部分)に住まう。私は和蘭の國情に通じないが、察する所こも亦私の住み得る土地であるらしい。——恐らくは丁抹も亦。——一體私は羅甸民族の精神とは可成り縁が遠い、しかし假りに何れか羅甸民族の國に住まなければならぬとすれば、私の行くのは唯だ伊太利ばかりであらう。獨逸と伊太利とは、あらゆる相違にも拘らず、その精神に於てやつぱり密接不離の關係にある。——現時の露西亞は私にとつては存在しないも同然である。

私の胸に描ける理想的生活とは如何なるものであるか。

貴君の意味する理想的な生活とは多分夢想郷の意味でなく、可能な内で最も幸福なる生活のことであらう。この間に對しては已に直ぐ前に一部分は答へておいた。私は繰返していふ。私の全然幸福であり得るは、自ら熟知し又愛好する國に於てのみである。貴君も已に承知の如く、これは獨逸である。更に獨逸といふ中にも、私の最も好むのは獨り南方の諸邦とチューリンゲンとである。大都市の中では私にとつてミュンヘンほど好ましいものは一つもない。ここが若しくはバイエルンとかシュワールペンとか又はチューリンゲンとかの小都會に於ける、一般世間及び所謂『上流』社會から離れた生活、極めて尋常な確實な收入、精神的勞作に従事し且つ如何にかして他人のために用を足すだけの可成りの健康、善良で、單純で、平靜で其上教養ある人達より成れる知友の極めて小さな仲間、自宅に於ては同時に私の友達でもある如き忠實なる伴侶と助手、極めて多數の家畜、特に犬と猫と鶏と——『朝の喇叭』ともいふべき雄鶏の居ない家には私は生きて行けない——、私の周圍には一點の贅澤もあつてはならない、が唯だ私の藏書だけは總て一所に並べて置きたいものである、又ピアノ——假令最も質素な方形ピアノであつても——も一つ持つてゐたい。私の地上的欲望はこれ以上には上らないのである。——

私の最も好きなのは如何なる種類の人であるか。

既に述べた通り、それは單純で、善良で、物靜かで、落着きある、教養ある——それからその生活振に於ても又考方に於ても少しく『古風』な人である。落着きなき、氣の變り易い、操人形の様な、神經衰弱性の『デカダン者流』に對しては、私は殆ど一種の肉體的嫌惡を感じる。私にとつて、これと同じ程度に不快の感を催さしめる者は、一言半句にも拘泥してその眞偽を決定せんとし、又何から何まで總て自分に關係さして考へる所の、かの諧謔を解せざる頭の狭苦しい人々である。次には外交社會の高慢な、いやにきちんとした、鰻の如くぬらくらした、己惚に満ちた紳士と、所謂美的なる、政治を口にする所の、『才情豊富』にして『近代的』だと謂はれる婦人と、それから所謂貴婦人とか社交界の淑女とか呼ばれる所の化粧した猿とである。之に反して善良にして教養あり且つ分別ある婦人は——特に性的生活を既に通過した年の行つた婦人に至つては——儘に世に最善なるものの一である、さうして私はか

くの如き婦人をば常に私の友人の中に數へ得んことを願ふ者である。

私は書籍の蟲でもなく、また尙更文獻上や印刷上の珍品をあさり廻る所謂書籍狂ではないが、然も尙ほ書籍の親友たるを失はない。文學に於ける私の愛好書の數は、貴君も承知の如く、少くはない。従つて、それから離れるとか、もしくは私が例へば無人島に配流の身となつた場合に携帯すべき僅少のものだけを選び出すといふことでさへも、私には可成り困難であらう。——この選擇は勿論どれだけ長く無人境に住むかといふことに依つて變つて来る。今假りに一年間として見よう。然らば私は先づ第一に、聖書とトーマス・ア・ケムピス〔イミタテイオ・ク〕とを旅行鞆の中に入れてあらう。それに次いでゲートのファウスト、ホメリア、リュックケルトの『婆羅門の智慧』(Weisheit des Brahmanen)、ドン・キヒョーテ、ニーチェのもの二三冊とハイドン及びベートーヴェンの絃樂四部合奏曲の『小判の總譜』本を。これだけあれば、私は一年間を——尙それ以上も——過ごすに充分なるのみならず、又『世間』が戀しくなる様なことは少しもなからうと思ふ。否、私は自ら進んでかうした流竄の身となりたい程である。——これは勿論私の行くべき島がサラス・イ・ゴメツ〔Galapagos〕の如き島でないといふ前提の下に於ての話である。——私自ら、自分は『無用の人間』に屬する者であるが、然しそれと同時に亦『囚はれ』ざる者の一人であるといふ事をも知つて居る。私は私の『小さな貧弱』を以て自ら満足して居る者で又『靜かなる海の匂の漂へる』さうして『國家といふものゝ存しない』、『唯だ一人で居ることや唯だ二人で居ることを好む如き人に適するやうな、今尙ほ人煙空しき地』〔此等の句は何れもニーチェの『ツアラトウストラ』に出づ〕に對する憧憬の何たるやは私の能く知れる所である。惜い哉、ニーチェは地球の何處にかゝる境地ありや又如何にして其處に達し得るやを言はなかつた!

## 一九 萬物の聲と詩人

北村 透谷

### 一 解題

#### 一 本文

「北村透谷集」第五篇中から採録した。明治二十六年十月神奈川縣足柄下郡前羽村前川長泉寺で稿せられた詩に關する試論である。明治三十五年編纂の全集では巻頭に置かれてゐる。(岩波北村透谷集 一冊、昭和二年七月、岩波書店發行)

#### 二 作者

北村透谷。詩人・評論家。本名は門太郎。明治元年十一月神奈川縣足柄下郡小田原町萬年町に生まれた。家は代々小田原藩士で、父は醫を業とした。幼少の頃兩親が上京したので、祖父母の許に成長した。十三歳の時上京、京橋區數寄屋町の泰明小學校に入り、翌年卒業。透谷といふ號はこの數寄屋から來たものである。私塾を歴て十五歳の時、政治家を志して東京専門學校(早稻田大學の前身)の政治科に入り政治及び哲學を學んだが、翌年腦を病んで退學、一時商業に志した。間もなく基督教に入つて傳道に従事し、東洋の救世主、大哲學者を以て任じてゐたが、遂に本來の性情は文學に就かしまるに至り、ゲーテの「ファウスト」、バイロンの「マンフレッド」等の影響を受けて二十二年處女作「楚囚の詩」を發表し、二十四年劇詩「蓬萊曲」を發表した。二十五年「女學雜誌」に關係して「宿魂鏡」「徳川時代平民思想」「厭世詩家と女性」等の作を發表し、二十六年星野天知・戸川秋骨・島崎藤村・平田忞木・馬場孤蝶等基督教的精神の教養を受けた同

志と共に「文學界」を創刊し、浪漫主義・主情主義運動の烽火を明治文壇に上げた。二十六年「富嶽の詩神を思ふ」「山庵雜記」に加へるに幾多の熱烈な批評や詩作を發表したが、健康を害し、長泉寺に轉地靜養し、傍ら明治女學校に教へ、宗教雜誌「平和」の編輯に當つた。二十七年京橋區彌左衛門町の母の家に歸り、更に芝公園内紅葉館裏の舊居に移り、力をこめた評傳「エマルソン」も未完のうちに、二十七年五月その庭の樹下に縊死した。享年二十七。幼少の頃から不遇な境遇に育ち、過度に敏感な神經を以て時代の苦悶を感じ、浪漫的な理想と現實的な社會生活との矛盾に苦しみ懷疑と絶望とに闘ひ疲れた彼の死は、浪漫主義的思潮の先驅者としてのいたましい犠牲であるといへよう。著作は「透谷全集」「改編透谷全集」等に收められ、その他「エマルソン」「透谷選集」「北村透谷集」等がある。

#### 三 採擇の趣旨

次課に於て、往年新體詩の稱を以て呼ばれた詩形態を學習させるに當つて、まづ當時詩の本義を論じた代表的な試論を讀ませて、詩についての理解を深めさせておかうとしたものに外ならぬ。

隨つて文化的教材であると共に、特色ある試論として、文藝的教材でもある。

### 二 教材としての研究

#### 一 註解

【萬物】パンブツ 天地間のすべてのこと。宇宙に存在する一切のもの。森羅萬象。ばんもつ。

【詩人】シジン 狹義には、詩を作る人、廣義には、詩人

又は詩人的性格の人、即ち想像力に富み、感受性の豊かな人。こゝでは、造化の妙機に參じてこれに藝術的表現を與へる人といふ程の意。

【樂調】 ガクテウ 音樂の調子。音樂的な調子。

西洋の詩人・哲學者が往々宇宙を一大音樂にたとへる如き意味に於ていつてゐるのであらう。

【蚯蚓】 ミミズ 環形動物、貧毛綱、新貧毛目に屬する動物。

夜間、雨の日又は曇り日などにジーツと切れ目のない鳴き聲が地中から聞えて來るのを、古來蚯蚓が鳴くといひ傳へられてをり、蚯蚓の異名を歌女かぢよともいふけれども、これは蝻けら（直題目に屬する昆蟲）の鳴き聲を誤り傳へたのである。

【拙】 セツ (一)つたない。へた。くだらない。(巧の對。)

(二)自己の謙稱。わたくし。拙者。(三)自分の物事に冠して謙遜の意を表す語。こゝは(一)。

【夜深】 ヤシン 夜更。深夜。深更。

【深窓】 シンサウ 奥深い窓の内。奥まつた室。深閨。

【造化】 ザウクワ (一)萬物を創造・化育する意。天地運行之、四時變遷し、萬物始終して窮まらざるをいふ。

(二)天地。宇宙。(三)萬物を創造し、化育した神。造物主。造物者。こゝは(三)。

【生物】 セイブツ 生きもの。生物學上では、原形質を有して、生活現象を営みつゝある、或は営み得る可能性を有するものをいふ。

【理する】 リする 治める。整へる。正す。處置する。

【妙機】 メウキ (一)氣運の微妙な變化。(二)微妙な感應を受くべき機根。こゝでは、微妙不可思議なはたらきの意。

【常變】 ジャウヘン 常に變轉して息まないこと。

【須臾】 シュユ しばらく。しばし。すこしのま。暫時。

【停滞】 テイタイ (一)物事の一所にとどまつて通過又は進捗しないこと。とどこほること。(二)食物の胃の中にとどこほつて消化しないこと。こゝは(一)。

【常動】 ジャウドウ 常に動いて停止しないこと。

【寧靜】 ネイセイ やすらかに靜止すること。やすらかにおちついてゐること。寧息。寧靖。寧謐。

【常爲】 ジャウキ 常に事を爲してゐること。

【無爲】 ムキ (一)することのないこと。何事もしないこと。働かぬこと。(二)自然に任せて作爲するところのないこと。(有爲の對。)(三)變事のないこと。無異。無事。こゝは(一)。

【定法】 チャウハフ (一)きまつた法則。(二)きまつた型。こゝは(一)。

〔法〕 (一)おきて。法律。制度。(二)きまり。さだめ。規律。(三)しかた。方法。(四)てほん。模範。(五)禮儀。禮法。(六)刑罰。制裁。(七)みち。道德。

【根本の法】 コンボンのハフ 根本法則。

【動靜】 ドウセイ (一)活動と靜止と。(二)事あると事なきと。(三)やうす。もやう。起居。消息。こゝは(一)で、動を主にしていつてゐる。

【偏頗】 ヘンバ かたよつて正しくないこと。不公平。えこひいき。

【私】 ワタクシ (一)不公平。かたておち。(二)よこし

ま。(三)ひそか。(四)みうち。うちわ。(五)私慾。こゝは(一)。

【人間の空】 ニンゲンのクウ 實體も自性もないものと觀じた人間の姿。即ち、小我を脱した大我の境。

〔空〕 自我又は萬有が因縁の所生で、畢竟自性も實體もないこと。

【造化の靈】 ザウクワのレイ 造化の造化たる所以。宇宙の本源。

老子のいふ「無」の如きものをさすのであらう。

【至妙】 シメウ 至つて不思議なこと。至極微妙なこと。

【調和】 テウワ (一)音樂の調子がよくととのひあふこと。(二)味がよくととのふこと。(三)物事がよくととのひ治まること。(四)ととのひやはらぐこと。程よく和合すること。(五)うつりのよいこと。こゝは(四)。

【奇しき】 クしき 靈妙な。

〔奇し〕 (一)あやしい。不思議である。(二)靈妙である。(三)珍し。

【無絃の大琴】 ムゲンのタイキン 宇宙の大調和を譬喩的にいつたもの。萬物の聲の本源であるから「大琴」といひ、それが無形なものであるから「無絃」といつたのである。

【宇宙】 ウチウ cosmos (英) の譯語。世界。天地。

原語 kosmos (希) はもと秩序・裝飾の義。哲學的には「渾沌」(Chaos) に對し、法則的統一ある組織體として考へられた存在の總體、即ち世界の意。物理學的及び天文學的には、實在的として思考し得られる全空間及びこれに包含せられる天體並びに全物質を含めていふ。

【軌】 キ (一) 車の左右兩輪の間。(二) 轍。(三) 軌道。

(四) 道。のり。法。則。こゝは (三)。

【音色】 オンショク 音の高さ及び強さを全く等しくしても、なほ發音體の相違を識別することの出来る音の固有性をいふ。ねいろ。音の味はひ。ねざし。

音の高低・強弱と共に音の三性質とせられるものであ

つて、發音體の種類によつて原音に伴なふ倍音の種類を異にし、爲に音波の形に相違を生ずる所から起る。

【私情】 シジャウ (一) 自分一己の情愛。私の情義。私人としてのなざけ。(二) 私利を計る心。私慾を遂げようとする心。こゝは (一)。

【大法】 タイハフ こゝでは「根本の法」に同じ。

【縦なる】 ホシイママなる 氣まゝな。勝手な。

【運行】 ウンカウ (一) めぐり行くこと。運轉しながら進行すること。(二) 天文学上では、天體がその軌道に従つて週期的に運動すること。公轉。こゝは (一)。

【相渉る】 アヒワタル 互に關係する。互に觸れる。

【相】 (接頭) (一) 互に、とも／＼に、等の意を表す。「相知る」「相戦ふ」「(二) 動詞に冠してその意を強める。「相變らず」

【渉る】 (一) 水をかちわたりする。(二) 歩きまはる。

(三) 博く覽る。博く通ずる。(四) へる。經過する。

(五) かゝはる。關係する。

【根なき萍】 こゝでは、根が切れて海上に浮き漂ふ浮草の類をさすのであらう。

【萍】 ウキクサ (一) 浮萍科に屬する小形の水生植物の總稱。明瞭なる莖葉を生ずることなく、扁平な葉狀體をなして水面を浮漂する。隔に水中に沈生する。多くは根を存するが稀に缺く。根はあつてもこれを水面に下すことな(二) 「浮草」の義。一般に、水上を浮かび漂ふ草をいふ。「浮萍」「流萍」「漂萍」

【四節の更迭】 シセツのカウテツ 四季のうつりかはり。

【四節】 四季の古稱。

【更迭】 あらたまりかはること。入りかはり。

【少老・盛衰の理】 セウラウ・セイスキのり 若いものは若い、盛なもののは衰へるといふ道理。

【凋落】 テウラク (一) しほみ落ちること。凋零。萎落。(二) おちぶれること。零落。落魄。(三) やせおとろへること。凋悴。(四) 衰へ死ぬこと。衰死。こゝは (一)。

【引力の法】 インリョクノハフ 萬有引力の法則。自然界

を支配する大法の一つ。

總べての物體間にはその状態如何に拘らず單にその質量及び位置關係に基づく一定の法則の下に、普遍的に引力が存在するもので、その法則を萬有引力の法則といふ。

【引力】 空間的に相隔たる物體が相互に引き合ふ力。

【生命の法】 セイメイノハフ 生物界に行はれてゐる、生命現象を支配する法則。

【然り】 シカリ 「しかあり」の約。さやうである。そのやうである。その通りである。

【観じて】 クワンジテ

【観ず】 (一) 佛語。定に住して妄惑を觀察し、眞理を觀達すること。即ち雜念を止め、心を集中して眞理・眞相を見徹すること。(二) 深く心に見ること。こゝは (一)。

【美術】 ビジュツ (一) 美的表現一般。藝術。(二) 造形美術。こゝは (一)。

明治十九年頃には「今で謂ふ文藝の意味」に「美術」といふ語を用いたことは坪内逍遙の文章のうちにも見えてゐる。

【音楽】 オンガク (三〇頁を見よ)

【戀著】 レンチャク (一)深くこひ慕つて忘れられないこと。こひあこがれること。(二)氣に入ること。こゝは(一)で、執著することの意。

【悟入】 ゴニフ 佛語。實相の理を悟り、實相の理に入ること。こゝでは、眞理を悟り、これと一體になること。

【所以】 ユエン 「故」の音便。いはれ。わけ。子細。

【感化力】 カンクワリョク 感化を與へる力。

【感化】 感じて善道に移らしめること。今は、惡に化するにもいふ。

【ラスキン】 John Ruskin イギリスの美術批評家・社會評論家。西曆一八一九年二月ロンドンに生まれ、一八四二年オックスフォード大學卒業。翌年「近代畫家論」第一卷を著し、ついで「建築の七燈」「ヴェニス石」「胡

麻と百合」「藝術經濟論」「この後の者にも」等幾多の著書を刊行、倫理的・藝術的生活と社會的・經濟的生活とを一致を論じ、勞資協調の温情主義を説き、原始的農業共産制を夢想した。晩年、オックスフォード大學に美術史を講じた。一九〇〇年一月歿。その美的社會意識は、

ウォルター・ペーターの藝術的觀照主義、オスカー・ワイルドの唯美主義、ウィリアム・モリスの藝術的社會主義等に少なからぬ感化を與へ、我が國の思想界にも幾多の影響を與へた。

【道義】 ダウギ 人の踐み行ふべき正しい道。道德上の條理。

【圓滿】 エンマン (一)十分に満ちること。少しも缺けたことのないこと。まんぞく。具足。(二)ふくつくしいこと。(三)主角がなくておだやかなこと。感情のはげしくないこと。

【天啓】 テンケイ 神が人間に對して自己を啓示し、又は、神の眞理を人間に開顯すること。「啓示」「默示」と

めさす。

【使命】 シメイ (一)使者として命ぜられた用向。つかひのやくめ。(二)君から遣はされた使。(三)轉じて、己の持前とする任務。賦與せられた務。天職。こゝは(三)。

【人間性】 ニンゲンセイ 人間としての根本的な性質。人間たる所以の資質。

【自覺】 ジカク (一)みづから己の分際を知ること。内省して自身の事を知ること。(二)心理學上で、自分を知覚する作用。自意識。(三)倫理學上で、與へられた自己の素質・能力、及びその限界等を正しく意識評價すること。(四)佛教で、自ら悟つて安心を得ること。(覺他の對)こゝは(三)。

【職分】 ショクブン (一)職務上の本分。やくめ。(二)自己のなすべき本分。つとめ。こゝは(一)。

【微妙】 ビメウ 奥深くて精妙なこと。たへなること。みめう。玄妙。

【階級】 カイキフ こゝでは、しな、等級、階次、差別、

の意。

【責罰】 セキバツ 罪過を咎めて罰すること。

【要素】 エウソ 或事物の成立又は效力等に必要缺くべからざる條件の最も根源的なもの。

【燥く】 カワく 水氣がなくなる。乾燥する。

【簇る】 ムラがる 叢り聚る。密聚する。

【實】 ジツ 實在。

【法の眼に於て】 ハフのメにオイテ 法の立場から見て。根本法則の上から見れば。

【到底】 タウテイ (一)とどのつまり。つまるところ。つまり。畢竟。(二)とても。いかにしても。どうしても。こゝは(一)。

【倫理】 リンリ (一)人倫のみち。實際道德の規範となる原理。道德。(二)倫理學。こゝは(一)。

【表象】 ヘウシャウ こゝでは「象徴」の意。(二五七頁「象徴的」の項参照)

【淫逸】 インイツ 「淫佚」とも書く。みだらなこと。



【史乘】 シジョウ 歴代の事實の記録。歴史の書。歴史。史傳。

〔乘〕 こゝでは、記録、歴史、等の意。

【具體】 グタイ 個體に特殊の形體・性質を具有すること。具象。形而下。(抽象の對。)

【至當】 シタウ 最も道理にかなふこと。至極適當なこと。至極當然なこと。もつとも。

【民族】 ミンゾク (一)自然的概念としての民族は、極めて古い歴史を有し、血縁的關係を中心とし、これと結びついて言語・風俗・慣習その他の文物を共有する社會團體の謂で、人種的の意味が多分に含まれてゐる。(二)歴史的觀念としての民族は、近世に於ける民族國家成立によつて生まれたもので、近世初期に市民階級が地方割據主義的封建制を打倒して自己の經濟的活動を自由ならしめんが爲に煩雜な限界を破壊して新しい社會團としてこれを立てたもの。人類社會發展の必然的産物である。こゝは(一)。

【變狀】 ヘンジャウ 普通と變つた状態。以前に異なるすがた。こゝでは、さまざま異なるつた状態の意。

【發露】 ハツロ 現れること。本來は惡事・密事に限られ、發覺・露顯の意。轉じて、善事・美事、その他一般の場合に用ゐられる。

【虚飾】 キョシヨク 外見ばかりを飾ること。うはべの飾。みせかけ。みえ。

【明々地】 メイメイチ あからさま。あきらか。「地」は助字。

【神祕】 シンビ・ジンビ (一)神として秘めおくこと。(二)人智で測り知ることが出来ない靈妙な秘密。(三)内面的直觀によつてのみ把握せられる最高實在。こゝは(一)。

【小天地】 セウテンチ 小さい天地。小さい世界。

【神聖】 シンセイ 清淨でけがれないこと。たいそうたふといこと。尊嚴でをかし難いこと。靈妙で威嚴あること。

【啓示】 ケイジ (一)ひらき示すこと。をしへしらせること。(二)「天啓」に同じ。こゝは(一)。

【牢獄を辭せず】 ラウゴクをジセズ

詩人が詩人たる資質を有する故に、牢獄を牢獄とのみ感ぜず、随つて牢獄に在ることを苦痛としないこと。

二 解釋

1 主題 宇宙の大平等・大無差別を達觀して萬物の聲を啓示する詩人。

2 構想

- (1) 萬物の聲(初—一五二ノ四)。
- (2) 宇宙の根本を成す大調和から發する萬物の聲(一五二ノ五—一五六ノ五)。
- (3) さういふ萬物の聲の具現としての藝術(一五六ノ六—一五八ノ一二)。
- (4) この宇宙の妙機を啓示する詩人(一五九ノ一—終)。

3 敘述

〔その變、その動、その爲、各、一箇の定法の上に立ち、更に又根本の法ありて之を支配するを見る〕——變・動・爲には變・動・爲の定法が行はれてゐる。が、更に深く究めると、その底に不變・不動・無爲なる根本法が存立する。この根本法に立脚することによつて、萬物の奥に至妙の調和が見出され、萬物の聲が樂調として感じられるのである。〔人間の最奥之を人間の空といひ、造化の最奥之を造化の靈といふ。人間の空、造化の靈、そこに大平等の理あるなり。〕

そこに至妙の調和あるなり」——變・動・爲の奥にある空・靈である。そこに見出されるのが根本の法であり、大平等の理であるのである。

〔而してこの理、この調和より、萬物皆一種の聲を放ちつゝあるにあらずや〕——作者のいふ萬物の聲は、單なる現象としての聲ではなく、宇宙の根本を成す「大平等の理」の、即ち「至妙の調和」の表現としての聲であることが明らかにせられてゐる。

〔造化は奇しき力を以て、萬物に自らなる聲を發せしむ。之を以てその情を語らしめ、之を以てその意を言はしむ。しかも無絃の大琴懸けて宇宙の中心にあり。萬物の情、萬物の心、この大琴に觸れざるはなく、この大琴の音ならざるはなし〕——畢竟萬物の聲は萬物の情、萬物の心の表現である。萬物の情、萬物の心は宇宙の中心に懸つてゐる無絃の大琴の音に外ならぬ。「無絃の大琴」は「大平等の理」「至妙の調和」の譬喩であることはいふまでもない。

〔悲しき時は獨り悲しむが如くなれども、然るにあらず、總べてのもの悲しむなり。喜ぶ時は獨り喜ぶが如くなれども、然るにあらず、總べてのもの喜ぶなり〕——私情の喜・悲を去つて、宇宙の中心にある無絃の大琴につながる時、その喜・悲は宇宙の喜・悲であり、その中心に懸る無絃の大琴の音を成すに至るをいふ。さういふ喜・悲こそ眞の詩といふことが出来るであらう。

〔花笑ふ時我も笑ひ、花落つる時我も落つ。實熟する時我も熟し、實墜する時我も墜つ〕——宗教でいへば大悟の境であらう。詩でいへば觀照の極致であらう。この境に到れば天地總べて詩ならざるはなしといひ得るに違ひない。

〔この一致を觀じて後に多くの不一致を觀ず、是れ詩人なり。この大平等・大無差別を觀じて而して後に多くの不平等と差別とを觀ず、是れ詩人なり〕——この一致觀・平等觀に立つこと、これが佛教の所謂往相である。この一致觀・平

等觀に立脚して、不一致・不平等を定位すること、これが佛教の所謂還相である。この往相・還相のふさふ所に眞の詩人は存立するのである。

〔最も劣等なる動物より最も高等なる動物を造るにあらず。最も高等なる動物をしてその高等なる所以を自覺せしめ、その高等なる職分を成就せしむるにあり〕——人間性の自覺と成就、語は簡だけでも、意味は深遠である。そして詩がこの事に深く與るものであることは古今東西に通じていはれてゐる所である。

〔宇宙の中心に無絃の大琴あり、總べての詩人はその傍に來りて、己が代表する民族の爲に、己が成育せられたる社會の爲に、百種千態の音を成すものなり。人間性の各種の變狀は之によりて發露せらる〕——譬喩的に詩人の任を道破した言葉。詩人の歌ふ所は無絃の大琴の音に外ならぬが、それは詩人の屬する民族の爲であり、社會の爲である。表現の様式に種々相の生起する所以である。

〔詩人は己の爲に生くるにあらず、己が圍まれたる神祕の爲に生くるなり〕——詩人は宇宙の神祕を表現せんが爲に生まれ、又その爲に生存する。そこに詩人の深い使命があり、詩の限り無き價值が存在するのである。人間をして宇宙の神祕に參ぜしめるものは詩人の力であるとするのが作者の言はんと欲した所である。

### 三 批評

作者が明治文學の黎明期に於ける一先驅者として、又その犠牲者として、二十七年の短い生涯を自ら斷つに至つた前年の作である。論に反復が多く、行文に整頓がないけれども、最も根源的なものを目ざして眞摯な追究を續けてゐる所、流石に一代の先驅者であつたことを思はしめるものがある。

三 備 考

一 指導の問題

文の形態からいへば試論であるが、こゝに掲げた趣旨は、更にそれが詩論たる所に存する。

この篇の詩論としての特色はそれが詩についての説明ではなく、詩に對する憧憬と情熱を披瀝したものであることであらう。随つて、この課によつて詩についての知識を與へようとするれば失敗する。詩の本義、詩人の本領に觸れさせようとするれば、何もかを感じさせ得るであらう。

作者の目がけてゐるものは詩の解剖でもなければ分析でもなく、又作詩の技術でもなく、いつも詩の核心であり、根本義である。随つて生徒の學習をこの方向に向かはしめなくてはならぬであらう。

特に作者はこの目的を果す爲に、彼の世界觀を大膽に披瀝し、その詩人的情熱を傾倒してゐる。この點で、何よりもまづ主體的把握を深くする爲に、熟讀させることが基礎的な指導であらう。随つて、さういふ文の性質上、解釋に於ける主題・構想の指導は、解釋に於ける敘述の吟味よりも後に著手しないと理解の混亂を招き易いことが警戒せられなくてはならないであらう。何れにしても、讀んで感じることを深くした上に、その感銘を手がかりに、部分的な理解に進む外は指導の端緒が得難いかも知れぬ。とにかくこの篇はこれを對象として論理的に追求する方向に出れば徒に難問題に逢著するのみで、この文の生命に觸れることは出来なくなるであらう。

二 參考資料

本文が書かれた當時のことを、作者の當時の友の一人であつた島崎藤村氏が「飯倉だより」の一篇「北村透谷二十七回

忌に」の中に書いてゐる一節を左に抄記する。

あの奥州の旅から歸る頃から、彼は自身にも異狀の起つたことを知つたと見えて、健康を回復したいとの願ひから東京の家を引拂ひ、國府津の海岸に近い前川村に移つた。前川村の古い寺は透谷が先祖の骨の埋めてある縁故の深いところで、その部屋を假りの住居としてあつた。あの海岸では、透谷の他の時代に見られないほど靜かな、半ば楽しく半ば傷いて居るやうな時が來たやうであつた。「國府津時代は楽しいござんした」とよく細君が透谷の亡くなつた後で、私達に話し聞かせたことを覚えて居る。私もよくあの寺を訪ねて、時には近所の娘達を集めて裁縫などを教へて居た細君を本堂の側の廣間に見かけたこともあつた。透谷が自作の「蝶の歌」などを私に讀んで聞かせたのもあの寺だ。激し易く迫り易かつた透谷も、あそこでは海岸の秋を楽しんで「萬物の聲と詩人」だの、「情熱」だの、「一夕觀」だのといふものを書いた。けれども惜しいことに、その頃の透谷の身體はもう餘程弱つて居た。あの國府津時代に出來たのは、いづれも深味のあるものばかりであつたが、しかし餘り長いものも書けなかつた。彼は戯曲にも多くの興味を持つて居た。「五縁」、「十夢」といふやうな大きな計畫を立て、その中の「悪夢」には僧の公曉を主人公にした史劇を試みかけたが、それも極僅かしか筆を著けなかつた。「エマルソン」評傳も不完全のまゝで筆を捨ててしまつた。

透谷に尊いところは何事も本質的に見て掛らうとしたことである。

「ある背われ應にあたりて横はる。ところは海の郷、秋高く天朗らかにして、よろづの象、よろづの物、瘦乎として我に迫る。恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も我が侷促たるを嘲るに似たり。恰も我が力なく能なく辨なく氣なきを罵るに似たり。渠は斯の如く我に徹透す、而して我は地上の一微物、渠に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。」

これは彼が國府津時代に書いた「一夕觀」の一節である。「萬づの象、萬づの物、瘦乎として我に迫る。」とはいかにも詩人としての彼の面目をよく語つてある。彼は何事にもこの透徹と悟達とを期した。彼は自身にも言つて居るやうに、物に感ずることが深く悲みに沈むことも尋常でなかつた。又、美しいものに意を傾けることも人に過ぎて多かつた。けれども彼が物に感じ、美しいものに意を傾

けるといふは、物を通じ形を撃ちてその心髓に徹しなければ休むことを知らないやうな熱意から来て居た。彼は俗韻俗調の詩人が徒らに自然の美を遊ぶことを憎んだが、その彼自身は、自然の美に動かされることの少いのを自ら怪しむほどの多感な詩人であつた。彼が生命の内部に突き入らう入らうとして審美上の詮索にのみ満足せず、道徳の創造性にまで考察を向けた熱心には驚かれる。「生命のなるところに信仰はない、信仰のないところに道徳はない。」と彼は言つて居る。この内観が主我的な瞑想に墮ちて行つたのは彼としては止むを得なかつたことだらう。

透谷は空想の多い青年時代の初期から、政治に行かうとしたり、宗教に行かうとしたり、哲學に行かうとしたりした。彼は今の早稻田大學が専門學校と言つた時代に、政治科に居て法律を修めたこともある。一時は基督教に籍を置いて、フレンド教會から出た「平和」といふ雑誌の編輯を手傳つたこともある。彼が巖本氏と知るやうに成つたのも、巖本氏が基督教派の文筆の人として後進の彼を認めたといふばかりではなく、彼の方でも當時の巖本氏が早いフェミニズムの運動に心を動かさるゝところがあつたからであらう。斯うした種々な閱歴は彼の性格の複雑を語り、一面には彼の時代の激しい動搖を語つて居る。

透谷の文學的生涯は彼の早い結婚と共に開けた。人として彼が歩いた路は近代の生活を考へるのに取つていろいろな暗示を與へる。彼には天才の誠實があつた。その誠實が彼を導いて短く傷ましくはあるがしかし意味の深い生涯を送らせたと思ふ。

## 二〇 斑鳩宮

### 三 木 露 風

#### 一 解 題

##### 一 本 文

「青き樹かげ」から採録した。この詩はもと「蘆間の幻影」のうちの「黙つて歌をうたふ世界」に、「いかるがの宮」と題して載せられ、後、「青き樹かげ」に再録せられたものである。

「青き樹かげ」は現代詩人叢書の第六篇で、「歌ふことのできる詩及抒情詩」六十八篇を収めてゐる。(青き樹かげ 一冊、大正十一年七月、新潮社發行)

##### 二 作 者

三木露風。詩人。本名は操。一時、羅風と改號したが、間もなく露風に復した。明治二十二年六月兵庫縣揖保郡龍野町に生まれた。姫路中學校・岡山閑谷塾等に學び、早稻田大學英文科・慶應義塾大學文科に聴講生となつたことがある。三十八年岡山市血汐會から處女詩集「夏姫」を刊行。上田敏主宰の雑誌「藝苑」に「五月野」外數篇を發表して認められ、後、相馬御風・野口雨情等と早稻田詩社を結んだ。當時御風と口語體の詩を唱へ、「暗い扉」を發表、四十二年詩集「廢園」を刊行、北原白秋とその詩名を併稱された。翌四十三年詩集「寂しき曙」、大正二年詩文集「白き手の獵人」、四年詩集「幻の田園」を刊行。五年北海道のトラピスト修道院を訪れ、その感銘をうたつた詩集「良心」を出版、やがて信仰生

活に入り同院に起居したが、十四年に歸京して再び文筆生活に入り、主として童謡の制作に従った。著書には前記の外、詩集に「生と戀」「蘆間の幻影」「青き樹かげ」「信仰の曙」等、童謡集に「小鳥の友」、隨筆集に「露風詩話」「修道院雜事」「修道院生活」等がある。日本に於ける象徴主義の理想的側面を示した詩人で、詩境の崇高・敬虔なことに於ては明治・大正詩壇の第一人者である。

三 採擇の趣旨

詩形態の作品の代表として掲げたものである。文藝的教材であるが、日本文化の開拓者であり、日本精神の自覺者・發揚者であらせられた聖德太子の追懷である點に於て、又國民的教材としての意義をも具備してゐることはいふまでもない。

二 教材としての研究

一 註解

【斑鳩宮】 イカルガノミヤ 「鳩宮」とも書く。推古天皇九年（一二六一）聖德太子が大和國平群郡斑鳩村（現奈良縣生駒郡法隆寺村）の地に營まれ、十三年以來住まはせられた宮殿。二十九年太子がこゝに薨ぜられて後は、その王子山背大兄王以下御一族が引續きこゝに在したが、皇極天皇二年（一三〇三）蘇我入鹿の暴逆によつて燒盡

された。その後約百年、聖武天皇の天平十一年行信僧都がその遺址に法隆寺の東院を創立した。

東院は夢殿を中心とする一郭をいひ、古くは上宮王院といつた。上宮王即ち聖德太子の舊宮の義である。創立後百餘年の星霜を経て堂舎頽廢に瀕したので、貞觀元年道詮律師朝廷に奏して全體に互つて大いに修理を

加へ、且平群郡の水田を施入した。爾來若干の修補を経て今日に至つてゐる。（七〇頁「法隆寺」の項参照）

【やまとの國】 (一)大和國。畿内五國の一。現奈良縣の地で、一市・十郡に分たれてゐる。(二)日本國の異稱。こゝは(一)。

【上宮王】 ジャウグウワウ 上宮太子とも申し上げる。聖德太子の御稱呼。御父用明天皇が太子を愛して宮南上殿に住ましめ給うたのでかく呼び奉つた。（七五頁「聖德太子」の項参照）

【いましし】 おいでになつた。  
【います】 在す (一)居たまふ。おいでなざる。おはします。まします。(二)行きたまふ。(三)來たまふ。こゝは(一)。

【あとどころ】 (一)足の踏んだあと。あしあと。そくせき。(二)物のあつた跡。遺蹟。舊蹟。こゝは(二)。  
【白き日】 照りかゞやく日。ひるなかの光。白日。  
【かげろひ照れる】 きらめき照つてゐる。

【かげろふ】 「かげる」の延。(一)陰になる。かげる。(二)光がほのめく。ひらめく。きらめく。(三)姿がうつつてちらつく。

【まぼろし青し】 懐古の幻そのものまでも、あたりを領する青葉の色に染められるやうに感じるのをいふ。

【まぼろし】 幻 現存しないものが實在するやうに見えて間もなく消え失せるもの。

【稚き若草の文明日本】 ワカキワカクサのブンメイニホン 文明といふ點から見れば、まだほんのをさない若草のやうな日本。

【の】 こゝでは、の如き、の意。  
【文明】 civilization (英)の譯語。人智が進歩して百般の事物が整備した状態。人類が自然を利用して招來した外部生活の發達した状態。近年は、「文化」に對し、特に物質的發達をさしていふ。

【吹きめぐる西域のかをり】 さながら吹きめぐる風に運ば

れる芳香のやうに、澎湃としておし寄せてくる、魅力ある西域の佛教的文化。

〔西域〕 セイキキ・サイキキ 西方地域の意で、支那人が西方諸外國を總稱する場合に用いた名稱。或場合には印度地方を含め、更に小アジア・シリア・パレスチナ・エジプト方面まで含めたこともあつて嚴密にはその範圍を限定し得ないが、中心地域は、支那の西方に隣接する中央アジア即ち所謂トルキスタン、更に狹義には東トルキスタン（ほゞ現中華民族新疆省）と見做すことが出来る。東トルキスタンは中央に沙漠を有する盆地で、多くの小邦が分立し、西域三十六國の稱があつた。紀元前二世紀頃（前漢時代）支那人によつて交通が開かれ、爾來八世紀頃（唐時代）までがその全盛時代で、所謂西域文化をなし、西方文化の東漸、佛教の東方傳播に貢獻する所が多かつた。こゝでは、漠然と、佛教文化の行はれる西方諸國の意に用いたのであらう。

【やはらかき詩の佛陀】 未だ嚴肅な靈の要求や自覺に基づく信仰の對象としての佛陀ではなく、異國憧憬的な、ロマンチックな情調の對象としての、隨つて詩又は藝術の對象とするにふさはしい佛陀の意であらう。

〔佛陀〕 ブツダ（一八六頁を見よ）

【金色にただよはせぬ】 尊いもの、美はしいものとして行きたらせたの意。

〔金色〕 コンジキ 佛の身相は金色であるといふ所から來た想像であらう。

【日出づる處の天子云々】

黑板勝美博士の著「訂正國史の研究」各説上に次のやうな一節がある。

今や冠位は制定せられ、憲法もまた製作せられた、太子はいよ／＼支那と對等の國交を開かんとし、十五年七月（隋煬帝大業三年）小野妹子を隋に遣したまひ、これまで我が天皇を倭王と稱してゐたのを改めて、日出處天子致書日沒處天子無恙と書き出せる國書を贈られた。これは寧ろ大膽に過

〔宣る〕 言ことにのべる。いふ。のべる。つける。

【國使】 コクシ 國命を奉じて外國に使用する者。こゝでは、小野妹子をさす。

小野妹子は、天帶彥國押人命六世の孫。米餅搗大使主命の後裔。近江國滋賀郡小野に住んで小野氏を稱した。推古天皇十五年隋に使し、翌年隋の正使裴世清及び副使遍光高を伴なつて歸朝。同年裴世清の歸國に際し再び選ばれて大使として行を共にし、留學生・學問僧を隨行。翌十七年歸國した。

【覺智】 カクガ 高麗の人。聖德太子の儒教の師。

推古紀、元年の條に「學外典於博士覺智」とある。

【慧慈】 エジ 惠慈とも書く。高麗の僧。推古天皇三年來朝、翌四年法興寺（後の元興寺）が成るや百濟から來朝した慧聰と共にこゝに住し、「三寶の棟梁」と稱せられた。聖德太子は深く彼を崇んで師とせられ、遂に彼について戒を受けさせられた。二十三年歸國したが、深く太子の御徳を慕ひ奉り、二十九年二月太子が薨去し給ふと

ぎた冒險であつたらう、恐らく太子もこの國書が支障なく直ちに隋の朝廷に受け入れられようとは豫期されなかつたであらう、たゞ妹子の手腕に信頼して派遣されたのであり、妹子は太子の知遇と我が國の名譽との爲め死を決して門出したに相違ない。果せるかな煬帝は蠻夷の書無禮なりと怒つて之を却けた、併し妹子はオメ／＼と退却する人でなかつた、遂に隋朝の諒解を得て、正使裴世清、副使遍光高（副使の名は元興寺緣起に出でゐる）と共に彼の國を出發して歸朝する事となつた。太子は大に裴世清等を歓迎せられ、やがて一行を引見したまひ、こゝに日隋の間に對等國交が結ばれた。

【かの太子】 かのタイシ 聖德太子をさし奉る。

〔太子〕 (一)支那古代の天子・諸侯の長男、漢以後は天子のよつぎのみ用ゐる。(二)儲嗣の皇子の稱。はるのみや。まうけのきみ。ひつぎのみこ。ひつぎのみや。皇太子。東宮。儲君。皇儲。皇嗣。(三)聖德太子の略。

〔太〕 尊稱。

【宣らす】 ノらす 「のる」の敬語。

聞くや、厚く供養し奉り、太子の一周忌に必ず死なうと心に誓ひ、遂にその日に所期の如く示寂した。時人が、太子も聖で在すが、慧慈も亦聖であると感歎したことが推古紀に見える。

【聖徒】 セイト  *saint*  (英) の譯語。神に選ばれて聖潔となつた者の義。(一)ローマ教で、有徳な信徒の稱。(二)基督教教會の會員たる信徒。こゝでは、高德の僧、ひじり、の意。

【藝術興り、文明すすみ】

聖徳太子の佛教の興隆、大陸文化の輸入は自ら美術・工藝の發達を促し、文明の進歩を招來した。寺院建築は從來の質樸・簡素な様式を脱して、日本建築の偉大なる發展の基礎をつくり、彫刻・繪畫は從來の考古學的意義から一躍して美術的價值を生み、染織・漆藝は急速な發達を遂げ、所謂飛鳥藝術の燦然たる華を開き、その他曆の使用、産業の進歩、道路・橋梁の開設、社會事業の施設等、物質的方面に於ても劃期的な

發展を遂げた。

【憲法制定せられて朝改革る】

氏族政治の弊害漸くその極に達した時に當り、聖徳太子は推古天皇攝政皇太子として親しく庶政改革の衝に當らせられ、天皇の十一年には冠位十二階を定め、從來の濫階を矯正し、貴賤・尊卑の次第を設け、人材登用の途を開いて氏族制度による沈滞して然も險惡な空氣を打開し、翌年には憲法十七條を制定して政治の根本を示し、道德の準繩を明らかにせられる等、閥族を前に控へての改革の御苦心はやがて大化改新の基礎となつた。

【憲法】 ケンパフ こゝでは憲法十七條をさす。推古天皇十二年四月に聖徳太子の定められたもので、我が國成文法の初である。今日の憲法とは趣を異にし、主として道德の標準を示したものである。當時氏族の勢が盛で、諸家權力を争ひ、その爲には敢て大逆や廢立をも行はうとする有様であり、加ふるに三韓の患交、

至り長い間の外交上の懸案であつた任那の回復さへならなかつたので、太子は道德の確立によつてこの窮境を打開しようとしてこれを制定せられた。その要旨は、人々互に和を重んじ、篤く三寶を敬ひ、詔命を謹み奉すべきことを教へられるにあり、又官吏の收斂を禁じ、公論を重んじ給ふなど實に太子國政改革事業の樞軸をなすものであつた。

【朝政】 テウセイ (一) 朝廷にて行ふ政治。廟堂の政治。あさまつりごと。(二) 臣下の奏上する政務。こゝは(一)。

【革る】 アラタまる 新しくなる。變る。なほる。  
【法隆寺】 ホフリユウジ (七〇頁を見よ)  
【建ちけらし】 建つたらしい。

【けらし】 過去の助動詞「けり」と推量の助動詞「らし」の複合「けるらし」の約。過去の推量を表す。

【嗚呼】 アア (一) 歎息の聲。(二) 歎き痛む聲。こゝは(一)。

【巨いなる日本のこころ】 偉大な日本の精神力。雄大なわが國民性。

【僧伽藍摩】 サンガランマ (一般にはソウギヤランマと發音) 梵語  *Saṅghāra*  の音譯。略して「僧伽藍」又は「伽藍」といふ。「僧園」「衆園」等と譯し、僧衆の集合する園林の義であるが、後には建築をも含めていふに至つた。寺院。

【僧伽】  *Saṅgha*  略して「僧」といふ。「衆」「和」等と譯し、四人(新譯)以上(三人)の比丘の和合してゐる團體をいふ。

【藍摩】  *Arima*  「園」「園林」等と譯す。

【東天】 トウテン (一) 東のそら。東方の天。(二) あげがたのそら。曉天。こゝは、東方の國土の意で、日本をさす。「日出づる處」であり、「菩薩太子」の生まれましし國である尊敬の意を含めると共に、又印度を西天といふのに對していつたものであらう。

【菩薩太子】 ボサツタイシ 菩薩に在す太子。菩薩の再來

であらせられる太子。

太子が常人に在さないのを稱へ奉つた言葉であるが、聖徳太子の本地が救世觀世音菩薩であるとせられる所からもかく申し上げたのであらう。

〔菩薩〕梵語「菩提薩埵」(Bodhisattva)の略。「大道心衆生」「大覺有情」等と譯し、又「高士」「大士」等と義譯する。菩提(覺)を求める有情(衆生)の意で、利他

二 解釋

1 主題 青葉の斑鳩の宮趾に立つて忍ぶ聖徳太子の御功績。

2 構想

- (1) 青葉の斑鳩の宮(第一節)。
- (2) 青葉に染まる懐古の幻(第二節)。
- (3) 懐古に浮かぶ太子の御事績(第三・四・五・六節)。
- (4) 太子の御功績の讚歎(第七節)。
- (5) 再び青葉の斑鳩の宮(第八節)。

3 敘述

〔青葉して、夏は今さかりなり〕——第一節がこの詩の基調である。様式の上からいつても、この節に發し、同じ節で終

主義をその特徴とし、佛に成ることを志求して努力しつゝ、常に衆生濟度に盡くす者をいひ、佛に次ぐ位である。

【君がせし功績のあとを】

初の「見つつ」にかゝる倒置法である。

〔功績〕イサヲ 善く事をなし遂げたこと。名譽ある成功。いさをし。てがら。功名。勳功。

つてゐるし、又その感動の上からいつても、最も直接で、最も具體的である。まづ、「やまとの國」と、その名をなつかしく呼びかけ、次いでそこを、「上宮王のいまし斑鳩の宮」と、歴史的意義から限定し、その上に、「青葉して、夏は今さかりなり」と、それに對する現實的な感慨を寄せるに至るまで、一言一句、ゆたかに實感が盛られてゐて、第二節以下の懐古を發展させるに足るだけの基礎が築かれてゐる。

〔白き日のかげろひ照れる中にまぼろし青し〕——白日の幻、それは「むかししのべば」とある懐古の幻である。それを「青し」といつた所に、「夏は今さかりなり」と歌はれた斑鳩の宮趾の、青葉の藜々たるさまを感じさせる。

〔やはらかき詩の佛陀を金色にただよはせぬ〕——稚き若草にも譬へるべき域にあつた日本の文明が、春風の如く西域の文明を願ひ求めた時、その中心であり根本である佛陀はいかになつかしいものに感じられ、いかに慕はしいものと思はれたか。「詩の」と規定し、「金色に」と修飾してゐる所に、その高められた感情が示されてゐる。

〔かの太子は宣らす、おごそかに、國使をして〕——外交上に國威を宣揚せられた御事績をこの一句に具現し得てゐる。〔衣を翻して來り〕——上宮王の徳が、海外の聖徒をして、嬉々として來朝せしめたさまを髣髴させる句である。

〔藝術興り、文明すすみ、憲法制定せられて朝政革る〕——刷新・改革・向上の有様が律動となり響となつて表れてゐる。〔美しき法隆寺は千三百餘年の昔に建ちけらし〕——單なる事實をいつてゐるに過ぎないやうなこの一句に、深い歎美の情が籠められてゐる。

〔嗚呼、巨いなる日本のところを示す僧伽藍摩〕——その法隆寺を、今、日本精神の偉大さの顯現として讚歎してゐるのである。

〔見つつ我が涙をながす、東天の菩薩太子、君がせし功績のあとを〕——以上數節に互つて數へ來つた太子の御事績を受



けて、又その具體的遺蹟としての法隆寺を讚歎した後に、「君がせし功績のあとを」といひ、「見つつ我が涙をながす」といふ、そこに自然の發展と、感情の昂揚とが感銘せられる。かくて「東天の菩薩太子」と稱へ奉つたのもしつくりと落著いてゐる。

〔やまとの國上宮王のいまし斑鳩の宮、青葉して、夏は今さかりなり〕——第一節の反復である。そしてそれはこの節が一篇の基調を成すものであることを語つてゐる。併し第一節では發展の根源であつたものが、この節では第二・三・四・五・六・七節を経ることによつて、自ら收結の歸趨になつてゐる趣が感じ分けられなくてはならぬことはいふまでもない。

### 三 批評

敬虔な詩情が遒勁な調を以て歌はれてゐる上に、題材が日本文化の開拓者聖徳太子である爲に、その開拓者らしい魄力が作者の措辭を信用ならしめ、その文律を緊く張らしめてゐる。しかも作者の欽仰の厚き、真情が詩句を貫ぬいて流れてゐるのを覺えしめる。

### 三 備考

#### 一 指導の問題

陶然として酔はされる詩ではなく、肅然として思ひ潜ませる詩である。讀みの調子にそれが出るまで讀み熟さしめることが最も根本的な學習の指導である。

解釋に於ては、詩の全形を有機的・發展的に跡づけさせることが指導の目標でなければならぬ。その手がかりは、何よ

りもまづ、第一節と第八節と同じであることに著眼させることである。次には、全詩はこの兩節が基底となつて發展した機構であることを見當づけさせることであつて、それはやがて、この現實的感動を基底とし、懐古の幻を描いて發展過程とした後に、太子の御事績の追懷を頂點として再び眼前の法隆寺を「功績のあと」として感歎することによつて歸入過程をとり、最後に再び基礎的な現實的感動に收結する全機構の理解に達せしめることでなくてはならぬ。

しかもそれは單なる外的構成としてではなく、一語一句の作用によつて内面的發展として跡づけられた具體的機構として自證せられなくてはならぬものであることはいふまでもない。

御事績の歴史的説明の如きは、最初の讀みに於ける註解として補説することが、忘れてはならない用意であらう。

#### 二 參考資料

作者がこの詩を制作した當時の、詩に對する立場を知り、またその詩人らしい憧憬を見る爲に、この詩が最初に載せられた「蘆間の幻影」の序詩を左に引用する。

#### 序詩 自畫像

われ願ふ、わが面影を

萬の上に觀んことを、

この故にわれは己れの像を  
言葉の裡に刻ざむ。

しほ鹹き人の苦みや、はげしきいきどほりの心や

また忍苦の大膽の勇氣や

また生命の歡喜やを

諸物の中に咒なふ。

われは造る、主にさせて

わが心よりしたたるものを

具體の歌を

わが死の墓に撒かんため  
われ描き、つくる。

われは贗造の詩人

主にさせてつくる。

われは覬覦者

神聖の垣根に據る。

われは諸物に『我』を混ざる被金師

黄銅の装ひせしめ

とれざる假面をつけしめ

不動の中にこれを置く。

われは言葉の鍊金士

黄金を、粗鐵をまぜてつくるてふ玄義に聞かん

そは言葉も煮沸すれば

心的物質なればなり。

われは古代の鍛冶工

神聖の火をたくはへて  
萬物を鑄改し

悲哀の紋章を極印す。

われは言葉の大工

幻想を建築す、

錯綜し、渾融し、厚き、重き

浮彫こそ我が詩の王。

われは技巧の中の技巧

髓の髓、

言葉の言葉、

あらゆる工夫を凝す者の祝禱者。

おお、我が詩よ

形式と心霊とは同一

そは闇黒に鏡を架けて

おのれが像を観るなり。

われは惱める心の旗手

われは苦痛の福音の宣傳者

われは主の運命の模倣者

われは我が運命をつくる者。

ああわが詩、わが碑

わが束ねたる花よ

われはその中に死の臥床を用意すべし

その花もて面を覆ひ、埋もれて。

## 二 月の兎

良 寛

### 一 解題

#### 一 本文

「月の兎」なる長歌が二つあるうちの一つを良寛全集(大島花東編著)から採録した。作者の萬葉集愛誦はその歌體の上にも影響を示し、短歌の外に八十首程の長歌、十数首の旋頭歌が遺されてゐる。(良寛全集 一冊、昭和四年二月、岩波書店發行)

#### 二 作者

良寛は寶曆八年(二四一八)越後國三島郡出雲崎町の名主俳人山本以南の長子として生まれた。幼名は榮藏、後文孝といひ、字を曲まがりといつた。安永四年(十八歳)俗事を厭うて家を弟由之に譲り、尼瀬町(出雲崎町の内)曹洞宗光照寺第十二世玄乘破了和尚に従つて剃髮し、自ら良寛と稱し、又大愚と號した。八年五月備中國玉島圓通寺の國仙和尚が北越に行化するや、従つて玉島に到り、居ること十七年、刻苦具に嘗め、全生命をうち込んで修道研鑽した。天明八年、國仙和尚が隱居してから玉島を根據として飄蓬の旅を重ね、遍く海内の碩學・大徳に參じてその心性を磨いた。師國仙和尚示寂の後、寛政七年玉島の地を去り、京都で父以南追善の法要に列なり、高野に詣で、近江路から北陸道を通つて歸國した。歸國後の良寛は、故郷出雲崎には歸らないで、或は郷本(今、寺泊町の内)の空庵、或は中山村(現三島郡西越村)の草庵、寺泊照明寺の側の密藏院、

野積村の西方寺、國上村の本覺院等と、輾轉不住、更に行脚をつゞけて居たが、文化元年(七歳)國上山の五合庵の修理が出来たので、暫くこゝに居を定めた。五合庵十数年の生活は「五合庵」と題する次の詩によつてうかがはれる。「素々五合庵。室如懸磬然。戶外杉千株。壁上偈數篇。釜中時有塵。竈裏更無煙。唯有東村叟。時叩月下門」文化十三年老軀病弱、薪水の煩の爲に山を下り、國上の鎮守、乙子祠畔の小庵に移り、こゝに十年間居住した。文政九年(六十歳)老弱愈々加り、島崎村能登屋木村元右衛門の勸によりその裏庭の小舎に入り、住すること六年、天保元年十一月半ばから痼病にかかり、翌二年(二四九一)正月六日の夕暮示寂した。享年七十四。

#### 三 採擇の趣旨

詩形態の作品の一例として掲げたものである。本來からいへば、和歌形態の一である長歌であるが、來るべき詩が、かういふ傳統的なものからも新しい發展の契機を見出さうとしてゐる關係から、又長歌に入る準備として、こゝにこれを採掲した。

文藝的教材であると共に、國民的・文化的教材の性質をも併せ有するものといふべきであらう。

### 二 教材としての研究

#### 一 註解

【月の兎】 ツキのヲサギ 月中の兎の古傳説を詠んだ長歌。同じ題の長歌がこの作者にはなほ一首ある。

月中に兎がゐるといふ傳説は、肉眼にうつる月面に斑

二 月の兎

點のあることから生じたものらしく、印度の本生話には、佛の前身たる兎王が道人の爲に身を火に投じて兜率天に生じた話(經律異相卷第四十七)、同じく佛の前身たる兎が自

四五五

ら身を焼いて大仙を供養した話(雜傳第二)等があり、大  
唐西域記には婆羅痾斯國(中印度にあつた國)にあつた話として、  
身を焼いて供養した鬼を天帝釋が月輪に寄せた話があ  
り、今昔物語集卷五にも西域記のそれと似た話が載せ  
てある。(參考資料参照)

因みに支那では、鬼が仙術を得て月世界に遊行すると  
いふ説と、白兔搗藥の説とから、歐陽永叔は「白兔搗  
藥婦娥宮」と、鬼の搗藥を遂に月の世界にもつて行  
き、日本では鬼が餅を搗く傳説がこれに代つてゐる。

「長歌」は和歌の一體で、「ながうた」ともいふ。長形  
式の歌は記紀の歌謡にも已に多く見られるが、形式が  
未だ確定せず、長短句の連続の偶数のものもあれば奇  
数のものもあり、各句の音數も一定せず、反歌も添は  
つてゐない。萬葉集時代になつては、音數は大體五音・  
七音に一定し、句數は奇數となり、また反歌が獨立し  
て所謂長歌形式をなしてゐる。が、萬葉後期には已に  
衰頹の兆を示し、短歌ひとり榮えるに至つた。

【いそのかみ】 石上 (一) 奈良縣山邊郡波市町の古名。  
(二) 石上に布留といふ所がある縁から、「ふる」(舊る・  
降る・振る)の枕詞。こゝは(二)。  
【古りにし】 フりにし 古くなつてしまつた。遠い昔とな  
つた。太古の。

【にし】 完了の助動詞「ぬ」の連用形に、過去の助動  
詞「き」の連體形のついたもの。こゝでは、強勢過去。  
【ありといふ】 こゝでは、あつたといふ、の意。

【猿】 マシ「ましら」に同じ。「ましこ」ともいふ。さる  
の異名。靈長目、猿科に屬する。

【兎】 ヲサギ「うさぎ」に同じ。嚙齒目、兎科に屬する。

【狐】 キツニ「きつね」に同じ。食肉目、犬科に屬する。

【友を結びて】 交を結んで。友達となつて。

【友を結ぶ】 「友垣を結ぶ」に同じ。即ち、交を結ぶの  
を垣を結ぶのに譬へていつたもの。

【野山】 ヌヤマ

【久方の】 ヒサカタの、(一)「天」の枕詞。(二)轉じて、

「天空に關係のある「雨」「月」「空」「雲」「夜」「星」等  
の枕詞。(三)又轉じて、「日の光」「月の都」等を略して  
「光」「都」の枕詞。又「光」から轉じて「鏡」にもかゝ  
る。意味については諸説あるが、要するに不明である。

【天帝】 アメのミカド こゝでは、「天帝」の訓讀。

【天帝】 (一) テンテイ 支那の思想で、天を主宰す  
る神をいふ。造化の帝。造物主。上帝。(二) テンタ  
イ 「天帝釋」「帝釋天」の略。佛教で忉利天(三十三天)

の主をいふ。梵名は「釋迦提桓因陀羅」(Śakra devī-  
nān Indra)。「釋迦」は「能」と譯し、天帝の姓。「提

桓」は「天」、「因陀羅」は「帝」と譯す。梵天と共に  
佛法守護の二大神。須彌山頂の喜見城に居り、他の三  
十二天を領して、佛法を護り、阿修羅を征服し、常に  
使臣を派して天下を察知せしめ、萬民の善法を喜び悪  
を制するといふ。こゝは(二)。

【ききまして】 お聞きになつて。

【ます】 (助動) 動詞に添へて、敬意を表す。

【それがまこと】 それらのものの心の眞實さ。

【翁】 オキナ (一)年寄つた男。(二)老人を親しみ敬つて  
呼ぶ語。翁。(三)老人の容貌に似せて作つた假面。おき  
なおもて。こゝは(一)。

【そがもと】 其が許 その居る處。即ち、猿や兎や狐の居  
る處。

【よろほひ行きて】 よろめきながら行つて。よほ〜と行  
つて。

【よろほふ】 (一)よろ〜と歩む。よろめく。(二)曲  
りくねる。ゆがむ。倒れかゝる。

【申すらく】 正しくは「申さく」。申すことには。  
動詞の終止形に「らく」がつくのは四段・ラ變以外の  
動詞で、四段・ラ變の動詞には、その未然形に「く」  
がつくべきであるが、それでは調子が調はない上に、  
漢文の訓讀や擬古文ではいづれにもその終止形に「ら  
く」をつけることがあるのでかくいつたのであらう。

【いまし】 汝「なんぢ」に同じ。こゝでは、汝等、の意。

【たぐひ】 比・類 (一)對立するもの。相ならぶもの。配

偶するもの。そふもの。ならび。つゐ。(二)同じ種類。

同一等級。くみ。類。なかま。やから。こゝは(二)。

【同じ心を遊ぶてふ】 同じ心を以て遊ぶといふ。心を同じくして遊ぶといふ。

【まこと】 (副) まことに。實に。げに。

【聞きしがごとならば】

【ごと】 如 助動詞「ごとし」の語幹。「ごとく」に

同じ。今は一般には韻文以外には用ゐない。

【ややありて】 すこし時経て。しばらくして。

【やや】 (二)次第に少しづつ進むにいふ語。(二)物事

の程度をいふ語。(多大・些少のいづれにも用ゐる。)

【あたりに】 こゝでは、「あたりく」の意。

【あたりく】 は、そここゝ、あちこち、所々。

【とびとべど】 頻りに跳び廻つたが。

同じ動詞を二つ重ねたのは動作を繰返す意を表す。

【何もものでせ】 これといつて何の働もしないで。こゝで

は、何も食物を持つて来ないで、の意。

【ものす】 或動作をおぼろげにいふ語。或動作をする。或物事を行ふ。

【で】 「すて」(「す」は打消の助動詞)の約。

【心異なり】 ココロコトなり 心が皆と同じでない。皆ほ

ど眞實でない、の意。

【はかなしや】 はかないことに。かはいさうに。

【はかりて】 計りて たばかりで。欺いて。だまして。

【柴】 シバ 山野に生ずる小さい雑木。その枝などを伐つて、薪とし、垣に結びなどするもの。そだ。しばき。

【焼きてたべ】 焼いて下さい。

【たべ】 「たぶ」の命令形。「たぶ」は、「たまふ」に同じ。

【見るよりも】 見るや否や。

【よりも】 一つの動作に引續いて他の動作をなす意を表す語。するや否や。

【心もしぬに】 心もしをれて。愁ひ萎えて。心もうち萎れ

るばかりに。萬葉集三「淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心

もしぬにいにしへ思ほゆ」

【しぬに】 しをればかりに。撓つて。しをれて。し

よんぼりと。勢なく。

【たふりて】 倒れて。

【たふる】 は下二段の自動詞であるが、他の下二段の動詞で古く四段に活用したものがあつたのに倣つて、擬古の體として四段に活用させたのであらう。

【胸うち叩き】

こゝでは、悲しみの餘り胸を叩いたのである。

【いまし云々】

「申すらく」の前に大唐西域記に見える「是時老夫復帝釋身」の意を補つて解すると、この調子が活きて来る。

【やさし】 (一)「はづかし」に同じ。(二)けなげである。

殊勝である。神妙である。しをらしい。ゆかしい。(三)

人情に富んでゐる。なまけ深い。(四)たやすい。容易で

ある。こゝは(二)。

【から】 殼 「空」の義。(二)内部の空虚となつた外皮。外殼。(二)もぬけたあと。ぬけがら。(三)魂魄の去つた身。なきがら。むくろ。死骸。こゝは(三)。

【月の宮】 ツキのミヤ 「月宮」に同じ。

【月宮】 は「月宮殿」の略。月の中にあるといふ宮。ぐわつきゆうでん。月の都。

【はふりける】 葬つた。

【はふる】 葬る 「放る」、即ち死者を住み馴れた家から野山へ放る義であるといふ。「はうむる」は「はふる」の延「はうぶる」の轉。(二)死者を埋める爲、野山へ送り遣る。(三)轉じて、死者を土中に埋める。(三)火葬にする。

【もと】 本・元・原 こゝでは、物事の起るところ、はじめ、おこり、起原。

【ありけると】 正しくは「ありけりと」。

【白たへの】 シロたへの 白栲の・白妙の 枕詞。白栲を

古へ衣服の材料とした爲、「衣」「袖」「袂」「紐」「襷」「領布」等にかけて、又白い意から「雲」「雪」にかける。

〔白たへ〕 シロたへ・シラたへ (一) 袴をその色の白

いのに就いていふ語。(袴は主として穀の木の皮の織

維で織つた布。(二) 轉じて、白い色。

【とほりて濡れぬ】(涙で)裏まで濡れ通つた。

萬葉集卷二、人麿の長歌に「丈夫と、思へる吾も、敷妙の、衣の袖は、通りて沾れぬ」とある。

## 二 解釋

1 主題 あはれな「月の兎」の古傳説。

## 2 構想

(1) 友垣を結んでゐた猿と兎とが飢ゑた翁を助けようとして、兎は遂に火中に身を投げた(初—一六五ノ四)。

(2) 翁はそれを見ていたくかなしみ、その骸を抱へて月の宮に葬つた(一六五ノ四—八)。

(3) あの「月の兎」のものはこの兎であるといふ(一六五ノ八—終)。

## 3 敘述

〔いそのかみ古りにし御代にありといふ〕——この作者の調子の眞率さと温雅さとがまづ讀む者の心を傾向づける。この「ありといふ」は「月の宮にぞはふりける」までを包攝する。

〔猿と兎と狐とが友を結びて、あしたには野山にあそび、ゆふべには林にかへり、かくしつづ年のへぬれば〕——通用語と違つた發音が、この超現實的な筋や氣分と相應じて効果を有つてゐる。極めて平淡な敘事であるが、原據になつたと考へられる今昔や西域記と異なつてゐる所や、それが萬葉集長歌の格調によつて詩化せられてゐる所に注意すべきであらう。

〔それがまことを知らむとて〕——こゝに天なるものの試煉があり、眞實發現の宗教的契機があるのである。

〔翁となりてそがもとに、よろほひ行きて申すらく〕——「よろほひ行きて」は作者が新しく與へてゐる解釋で、筋に親しみを覚えさせる。「申すらく」はこの長歌に三度使用されてゐて、それによつて物語が進展してゐる。

〔いまたぐひをことにして、同じ心を遊ぶてふ〕——今昔にはない。西域記の「異類同歡既安且樂」に當るであらう。併しすつかり和語・和文に生かした力量を見るべきである。

〔翁が飢をすくへと、杖を投げて息ひしに〕——この音數律は七・四・六・五或は十一・六・五である。これは他と異なつて、五七調は極めて少く、七五調に主を置いてゐる。話の筋を語るといふ意識が、自然さういふ軽い調子を要求したのであらうが、その七五にしても、この破調にしても、極めて自然且清純な響であることが注意せられなくてはならぬ。

〔兎はあたりにとびとべど、何もものせでありければ〕——猿は木の實を、狐は川魚を翁に與へたのに、兎は無力でそれが出来なかつた。平坦で、しかも要を得た言表である。こゝも今昔の「東西南北求め行るけども更に求め得たる物無し」よりも西域記の「惟兎空還遊躍左右」に近い。何れにしても作者の表現が最も生氣があり、簡淨である。

〔烟の中に身を投げて、知らぬ翁に與へけり〕——さきに「はかなしや」と詠歎したことの結末がこゝに至つたのである。「知らぬ翁」といふ一語に無量の思がこめられてゐる。祖父でもない、親でもない、親族・知人でもない、勿論天帝であることなど知らないといふ所に、身を與へた兎の眞實さが一入發揮せられてゐる。今昔や西域記では兎が身をさげける所以を告げて火中に入るのに、こゝではそれが無い。その點が一層感慨を深くさせる。

〔翁はこれを見るよりも、心もしぬに、久方の天をあふぎてうち泣きて、土にたふりてややありて〕——天の帝である翁

が、人間らしい翁として描かれてゐる所が限りなくなつたかきさを感じさせ、この詩に永久性を與へてゐる。

〔いまし三人の友だちは、いづれ劣るとなけれども、兎はことにやさしとて、からを抱へて、久方の月の宮にぞはふりける〕——天の帝らしい處置であるが、兎の心根をいふに「やさし」なる語を用ひ、月の宮に「はふりける」とした所はあくまで人間的であり、自然的であつて、しつくりとした感じで讀まれる。

〔月の兎といふことは、これがもとにてありけると、聞く我さへも、云々〕——この物語に對する心からの憧憬がその調子と相俟つてしつとりと結ばれてゐる。「聞く我さへも、白たへの衣の袖はとほりて濡れぬ」は人麿が亡妻を悼む長歌を原據にしたものである。併し、そこに作者らしい清らかな感動が漂うてゐることを感じさせられる。

### 三 批評

聞き古るし、讀み古るしてゐる話であるが、生きた興味として讀まれる歌である。これは何よりも、作者良寛の純真な心に、深くなつかしまれてゐた題材であり、隨つて十分に醗酵しきつてゐるものの表現だからであらう。

### 三 備考

#### 一 指導の問題

(一) 特殊な教材である。何よりもまづ、生徒は長歌といふ形式を不審するであらう。これは大體、長・短二句を單位として連続しゆく形式であることを示して讀み熟さしめてゆくことが必要と思はれる。又、その題材が古傳説であり、その發展のさせ方も、敘事と抒情との結合が如何にも素樸であるから、未だ古代歌謡に接しない生徒には、著しく特殊なものに感じられるに違ひない。その上その格調・用語が萬葉集風である爲にまだ耳馴れてゐない。七五調以外な破調も交つ

てゐる。かたゞ、かくの如き特殊性を征服して、この長歌を長歌として讀み得るに至るまでには相當學習の努力を盡くさなくてはならぬであらう。唯、その題材が親昵してゐる古傳説であり、その表現から直觀せられる作者の温かい純愛のまことが、生徒の心を惹きつけて、それだけの努力に堪へぬかせるであらうことは豫料せられる。

(二) いふまでもなく、この長歌は月の兎の傳説を歌つたものである。併しこの作の「知らぬ翁」に身を與へた兎は、遠い過去の兎でもなく、單なる傳説中の兎でもない。現に作者の心の中に、生き動いてゐる兎である。翁に對する兎の純な真心は、それが兎である爲に、一入いとほしまれてさへゐる。それは何よりも、古傳説に加へられた變更の上に示されてゐる。即ち天帝である翁が、兎を憐むことに於て、濃やかな人間的感情を示してゐる點に明らかに看取せられる。こゝに、一般にいはれてゐるやうな古傳説そのものの有する心理的眞實性の外に、作者その人の創造した藝術的眞實性が把握せられる。たゞそれが、作者の作品のいづれにも共通した、淡々とした自然さを以て表現せられてゐる爲にやゝもすれば見逃されやすい。隨つて、この作の有する詩的香氣は、古傳説の長歌的表現によつて成立するものではなく、作者個性の滲透によつて存立するものであることが感銘せられ、理解せられなくてはならぬ。本課の學習の到達點はこの點に見定められなくてはならぬであらう。

尙、作者良寛については、飄々として人間離れのした側面だけが一般に知られて、座右銘や書簡などに示されてゐる人間的な、和いだ心情の眞實さが看過せられてゐる。さういふ作者の人なつこさの側面をこの課の上に讀みとらせることも亦、卷一の一九「良寛さま」及び卷五の九「國上山」等と相俟つて、逸してならない點と思はれる。

#### 二 參考資料

(一) 作者の人間的關心の深さ、眞實さを示す戒語を左に抄出する。

二 一月の兎

戒語

- 一、ことばのおほき。
- 一、はやこと。
- 一、かしましく物いふ。
- 一、とはずがたり。
- 一、さしでぐち。
- 一、ことぐる。
- 一、へらずぐち。
- 一、ひやうりぐち。
- 一、人のものいひきらぬうちに物いふ。
- 一、時とろに合はぬ言。
- 一、酒ゑひにことわりいふ。
- 一、ゑうてことわりいふ。
- 一、はらだてる人にことわりいふ。
- 一、はらだちから人にことわりいふ。
- 一、いさゝかなることをいひたてる。
- 一、ことゝしくものいふ。
- 一、人のかくすことをあからさまにいふ。
- 一、かたおどけ。

- 一、人をうやまひすぐる。
- 一、人のことをよくも聞きわけずこたへする。
- 一、でいりのはなし。
- 一、けんくわのはなし。
- 一、こうきのうはき。
- 一、こどもをたらかす。
- 一、こどもにちゑをつくる。
- 一、すちなき長話。
- 一、から言ばを好みてつかふ。
- 一、ふしぎばなし。
- 一、いふてせんなきこと。
- 一、人のざんそ。
- 一、さして用なきことはいひすてすべし。
- 一、人のへんじを聞かうとするはむづかし。
- 一、むだごと。
- 一、あとからさきまで言ふはむづかし。
- 一、いりようのところばかりぬいてあらましいふ可し。
- 一、かへらぬことをくどくどく。
- 一、てがらばなし。

- 一、じまんなし。
- 一、そでもなき事と知りながら言ひ通す。
- 一、みゝにたつこと。
- 一、人のいやがること。
- 一、人のねてからの大ばなし。
- 一、もの知がほの話。
- 一、人のことを聞きとげずにいふ。
- 一、人をつかふにことばのおほき。又よくいひきかさぬ。
- 一、さはりになること。
- 一、人にへつらふ事。
- 一、たやすく約束する。
- 一、この事すまぬ中にかの事をいふ。
- 一、此の人にいふべきをあの人にいふ。
- 一、人のけしきを見ずして物いふ。
- 一、こととくる。
- 一、わが事をしひて人にいひきかさんとする。

- 一、神佛のことかろくしくきたすべからず。
- 一、そへごと。
- 一、人にさからふこと。
- 一、りよぐわいとがめ。
- 一、きはどくものいふ。
- 一、しんせつげにもいふうらみのもとなり。
- 一、たやすく約束する、たがふもとなり。
- 一、かげごとというてよくば其にむかひて。
- 一、たしかにも知らぬことを人にしふる。
- 一、知らぬ事も知つたげにもいふ。
- 一、すべて言葉をしみくいふべし。
- 一、いひ足らぬことは又つぎてもいふ可し。いうたことはふたゝびかへらず、ことばのすぐるはあいそなし。
- 一、その人にさうおうせぬことはいはぬがよし。

以上良寛筆

(二) 同じ傾向の現れてゐる作者の手紙を左に引用する。

今度貴様かんの事につき、あたりのものどもいろくわびいたし候へ共、なか／＼承知無之候。私もこまり候故かゝり候て、と  
もどもわびいたし候へば、かんどゆるす事に相なり候。早速御歸候而可然候。さて御歸被遊候て後は不都合のことなきよふに御たし



なみ可被成候。第一あき起親の心にそむかぬこと仕事も手に及ぶだけつとめて可被成候。其の外の事も心づけ可被遊候。かさねていかよふのこと出来候とも、わび事はかなはず候間きよふにおぼしめし可被下候。以上。

四月十四日

良 寛

周 藏 殿

是はあたりの人に候。夫は他國へ穴ほりに行きしが、如何致し候やら去冬は歸らず子供を多くもち候、子供まだ十より下なり。此春は村々を乞食して其日を送り候。何を與へて渡世の助にも致させんと思へども、貧窮の僧なれば致方もなし何なりと少々此ものに御與へ可被下候。

正月一日

良 寛

叔 問 老

(三) この歌の資料になつたかと思はれる記事を大唐西域記及び今昔物語集から左に引用する。

(婆羅痲斯國) 烈士池西有三獸窟塔波。是如來修菩薩行時燒身之處。劫初時於此林野有狐兔獐異類相悅。時天帝釋欲驗修菩薩行者。降靈應化爲一老夫。謂三獸曰。二三子善安隱乎。無驚懼耶。曰涉豐草游茂林。異類同歡既安且樂。老夫曰。聞二三子情厚意密。忘其老整。故此遠尋。今正飢乏何以饋食。曰幸少留此。我躬馳訪。於是同心虛己分路營求。狐沿水濱。銜一鮮鯉。獐於林樹。採異華果。俱來至止同進老夫。惟兔空還遊躍左右。老夫謂曰。以吾觀之。爾曹未和。狐兔同志各能役心。唯兔空返獨無相饋。以此言之誠可知也。兔聞譏議謂獐曰。多聚樵蘇方有所作。狐狡競馳銜草曳木。既已竊崇猛獲將熾。兔曰。仁者。我身卑劣所求難遂。敢以微躬充此一餐。辭畢入火即致死。是時老夫復釋身。除穢收骸傷歎良久。謂狐兔曰。一何至此。吾感其心不泯。其迹。寄之月輪傳於後世。故彼咸言。月中之兔自斯而有。後人乎。此建窠塔波。(大唐西域記第七)

今昔天然に兎狐猿三の獸有て共に誠の心を發して菩薩の道を行ひけり各思はく我等前世に罪障深重にして賤き獸と生たり此れ前世に生有る者を不哀す財物を惜て人に不與す如此くの罪み深くして地獄に墮て苦を久く受て殘の報にかく生れたる也然れば此の度び此の身を捨てむ年し我より老たるをば祖の如くに敬ひ年我より少し進たるをば兄の如くにし年我れより少し劣たるをば弟の如く哀び自らの事をば捨て、他の事を前とす天帝釋此れを見給て此等獸の身也と云へども難有き心也人の身を受たりと云へども或は生たる者を殺し或は人の財を奪ひ或は父母を殺し或は兄弟を讎敵の如く思ひ或は喉の内にも悪しき思ひ有り或は慈たる形にも嗔れる心深し何況や如此の獸は實の心深く難し然らば試むと思して忽に老たる翁の無力にして羸れ無術氣なる形に變じて此の三の獸の有る所に至給て宜はく我れ年老ひ羸れて爲む方無し汝達三の獸我れを養ひ給へ我れ子無く家貧くして食物無し開けば汝達三の獸哀びの心深く有りと三の獸此の事を聞て云く此れ我等が本の心也速に可養しと云て猿は木に登て栗柿梨子菜柑子橘榴柿標郁子山女等を取て持來り里に出ては菰茄子大豆小豆大角豆粟稗黍び等を取て持來て好みに隨て令食しむ狐は墓屋の邊に行て人の祭り置たる素炊交鮑鱈種々の魚類等を取て持來て思ひに隨て令食むるに翁既に飽滿しぬ如此くして日來を經るに翁の云く此の二の獸は實に深き心有りけり此れ既に菩薩也けりと云ふに兎は勵の心を發して燈を取り香を取て耳は高く癩せにして目は大きに前の足短かく尻の穴は大きに開て東西南北求め行るけども更に求め得たる物無し然れば猿狐と翁と且は恥しめ蔑づり咲ひて勵せども力不及ずして兎の思はく我れ翁を養はむが爲に野山に行くと云へども野山怖しく破無し人に被殺れ獸に可被噉徒に心に非ず身を失ふ事无量し只不如じ我れ今此の身を捨て、此の翁に被食て永く此の生を離むと思て翁の許に行て云く今我れ出でて甘美の物を求て奉らむとす木を拾ひて燒て待ち給へと然れば猿は木を拾ひて來ぬ狐は火を取て來て燒付けて若しやと待つ程に兎持つ物無くして來れり其の時に猿狐此れを見て云く汝ち何物をか持て來らむ此れ思つる事也虚言を以て人を謀て木を拾はせ火を燒せて汝ち火に温らむとて穴憎くと云へば兎我れ食物を求て持來るに無力し然れば只我が身を燒て可食給しと云て火の中に踊入て燒死ぬ其の時に天帝釋本の形に復して此の兎の火に入たる形を月の中に移して普く一切の衆生に令見が爲に月の中に籠め給ひつ然れば月の面に雲の様なる物の有るは此の兎の火に燒たる煙也亦月の中に兎の有ると云は此の兎の形也萬の日月を見む毎に此の兎の事可思出し(下文關)(今昔物語集卷五「三獸行菩薩道兎燒身語」第十三)

二 一 月 の 兎

四六七

## 二二 龍安寺の庭

荻原井泉水

### 一 解題

#### 一 本文

「京洛小品」中の一篇で、昭和二年十月十四日の日附がある。「京洛小品」は、大正十三年の春から昭和三年の秋まで京都に住んだ作者が、折々に尋ねて歩いた京都の風光を描き、古人を語つた文章三十九篇を収めたものである。(京洛小品 一冊、昭和四年十月、創元社發行)

#### 二 作者

荻原井泉水。俳人。本名は藤吉。明治十七年六月東京市芝區神明町に生まれた。幼名は幾太郎、父の歿後家名を嗣いで藤吉といふ。第一高等學校を歴て、四十一年東京帝國大學文科大學言語學科を卒業した。小學時代から俳句を作り、高等學校時代には一高俳句會を起し日本派の句風に傾倒した。大學時代頃から俳壇には新傾向の運動が勃興し、この機運に動かされて、卒業後、四十四年河東碧梧桐と共に俳誌「層雲」を創刊した。關東大震災に引續いて夫人・母堂を失ひ、感ずるところあつて佛門に歸さうとし、京都黒谷の門を敲いたが法制があつて許されず、遍路をしたり高野山に籠つたりし、後京都東福寺塔頭天得院に假寓すること一年餘、泉涌寺北溪圓通寺橋畔に庵居すること三年、この間に西國三十三箇所順禮等をなした。著書には「京洛小品」の外「井泉水俳句集」「井泉水俳話」「新俳句提唱」「新俳句研究」

「旅人芭蕉」「續旅人芭蕉」「芭蕉を語る」「芭蕉を訪ねて」等の俳句關係書、「山水巡禮」「觀音巡禮」「旅のまた旅」「旅の茶話」「山川行住」「春秋草紙」「花鳥小品」等の紀行・隨筆集等極めて多い。

#### 三 採擇の趣旨

本卷に於ては五「歌の響」以下、日本文學について和歌、物語・小説、隨筆・試論、詩等、主として形態的に排列を試み來た後に、再び廣く日本藝術一般に歸り、名園の鑑賞になる篇をこゝに掲出して一卷を結ばうとした。併し、この名園鑑賞も單なる名園鑑賞として採録したわけではなく、そこに日本藝術の特質が表現せられ、日本精神が具體的に指示せられてゐる爲である。文化的教材であると共に、國民的教材であることはいふまでもない。

### 二 教材としての研究

#### 一 註解

【龍安寺】 リュウアンジ 臨濟宗妙心寺派の寺。京都市右京區龍安寺御陵下町に在る。背後に衣笠山を控へ、寺境頗る幽邃である。この地はもと徳大寺家の山莊であつたのを、寶徳二年公有の時に細川勝元がこれを請ひ得て、大雲山龍安寺を創立し、義天玄詔を開山とした。但し義天師の日峰宗舜に譲り、寛正三年三月七十歳を以て歿した。その後應仁の兵火に炎上し、本寺を洛下に移したが、長享二年勝元の子政元舊地に再營し、

二二 龍安寺の庭

第四世特芳禪傑を中興の祖とした。特芳は又西源院をも創開したが、寛政九年再び殿堂廊廡悉く灰燼に歸したので、西源院の建築を移して本寺の方丈にあてた。現存建築物は方丈・唐門・大廊下・玄關・書院・寶藏・茶席(藏六庵)・庫裡・總門・中門(三門)・凌虛亭等である。方丈前庭は古來相阿彌の作と傳へられてゐるが、徳川初期の茶人金森宗和の作とする説もある(參考資料)。東西

四六九

十二間五尺・南北五間一尺の庭面全體に白砂を敷いて水面に擬し、砂上に十五箇の岩石を五・二・三・二・三と一組づつ五箇所に排列してゐるだけで、他に一樹一草なく、高さ約一間の築地塀がこれを圍んでゐる。

【方丈】 ハウチャウ (一) 禪林の正寢、住持の住所。(二) 轉じて、そこに住む人、即ち寺主の稱。住持。住職。こは(一)。

【扁額】 ヘンガク 紙・帛・板等に文字(神號・屋名、園・堂・樓等の名)・繪畫を記して堂・屋・門・檐・鴨居等に高く掲げるもの。額。牌。榜。

その起原は明らかでないが、支那漢時代頃に始り、我が國では聖武天皇宸筆と傳へられる東大寺の木造勅額に「金光明四天王護國之寺」の十字を刻し、周縁に梵天・帝釋・四天・二王の木像を装つたものがあり、續後紀に「弘仁九年有詔書、天下儀式、男女衣服皆依唐法、五位以上位記、改從漢樣、諸宮殿院堂門閣皆著新額云々」とある。初め支那では門戸の名札から廳・殿

の扁額に轉じ、その建築と共に我が國に渡來して神社の鳥居にも掲げられ、近世に至つて床の間の前面・長押・壁間等に掲げられるに至つた。

【扁】 戸と冊とを合はせた字。こゝでは、門戸に署する文字、の意。俗に匾に作るのは、扁の字の平たい意に用ゐる時は匾とも書くに因る。

【見切】 ミキリ (一) 見切ること。(二) 視野の限界。こゝは(一)。

【相阿彌】 サウアミ (五九頁を見よ)

【意匠】 イシヤウ (一) こゝろのたくみ。繪や詩の制作に際して、心に工夫をめぐらすこと。かんがへ。趣向。工夫。(二) 工藝品に應用すべき形状・模様・色彩、又はその結合について工夫・發明した新しい裝飾上の考案。こゝは(一)。

【虎兒渡】 トラノコワタシ 「虎の子涉し」とも書く。

從來は後漢書の劉琨(桓公)傳に見える「虎渡河」の故事に結びつける説などが行はれてゐたが、恐らくは

「虎溪」の庭の訛傳であらうといふ。(外山英策氏)

【眺めほれて】 ナガめほれて うつとりとして見て。我を忘れて見入つて。見とれて。

【さして】 (一) これぞと指していふ程に。さほど。別段に。格別に。(二) さしあたつて。さしむき。こゝは(一)。

【奇抜】 キバツ 思ひがけぬ程ぬきんでること。珍しくすぐれたこと。他人が思ひもよらぬこと。奇警。

【孤】 コ (一) みなしご。幼くして父のない者。(二) つれないこと。ひとり。單獨。(三) たすげがないこと。身方のないこと。こゝは(二)。

【單なる群】 タンなるグン たゞのよりあつまり。

【しつとり】 (一) 落著いたさま。しとやかなさま。(二) 濡れしめつたさま。こゝは(一)。

【額縁】 ガクブチ (一) 裝飾と便宜の爲、額の周圍にとりつける縁。普通は木や石膏で作られ、屢々彫形や浮彫が施され、金銀箔・漆・エナメル・ペイント等で化粧される。畫面を引立てる上に大きな役割を演ずるものである。

る。(二) 窓や出入口の周圍につける化粧木。こゝは(一)で、譬喩的に用ゐたもの。

【楓】 カヘデ 槭・鶏冠木とも書く。楓科、楓屬の落葉喬木。枝條は無毛・平滑。葉は膜質で長柄を有し、全形は圓狀・心脚で七乃至一箇の裂片に分れ、各裂片は鋭尖頭で縁邊に鋸齒を有する。四五月頃、暗紅色の小花を繖形花序或は圓錐花序に開き、花後雙翅果を生ずる。秋の紅葉を愛でて觀賞用とされ、材も亦種々に利用される。異名もみぢ・かへるでのき・いはとべに。

楓科には約百三十種あつて、我が國の山野に自生するもの約五十種、その外栽培變種も極めて多いが、廣義にはこれ等を總稱して楓又は紅葉といひ、その大部分は秋期の紅葉又は黄葉を以て著名である。

【蟬】 セミ (一〇八頁「山の蟬」の項を見よ)

【最中】 モナカ (一) まんなか。中央。(二) 最もたけなはな時。まさかり。さいちゆう。(三) 物事を中心。樞軸。こゝは(二)。

【閑寂】 カンジャク (一)ものしづかなこと。心しづかなこと。淋しいこと。閑靜。(二)日本文學に於ける一つの美の理念。さび。こゝは(一)。

【焦點】 セウテン focus (英)の譯語。(一)光線が反射或は屈折した後、一點に集るか、或は一點から出るかのやうに發散する時、この點を焦點といふ。球面鏡又はレンズ等に於ては、軸上無限遠の一點から出る光線、即ち、軸に平行に入射する光線が像を結ぶ點。(二)轉じて、物事の集注する所。目的。目標。こゝは(二)。

【視點】 シテン こゝでは、觀る眼の位置の意で用ゐたのであらう。

【繪畫的組合はせ】 クワイグワテキミアはせ 繪畫のやうな組合はせ。繪畫の構圖にみるやうな組合はせ。

【多趣】 タシニ 趣味の多いこと。おもむきの多いこと。面白味の多いこと。

【多様】 タヤウ 多くの様式があつて一定しないこと。種種のおもむき。いろ／＼さま／＼。

の一團地の地貌に風致的施設を施すこと。家庭造園・都市造園・天然造園に大別する。こゝは、家庭造園、即ち庭園を築造すること。「作庭」「築庭」「造庭」などともいふ。

庭園造築の材料は、草木・岩石等の自然物を主とし、添景物として燈籠・橋・四阿・手水鉢・門・垣・塀等の工作物を用ゐる。

【それ自體】 それジタイ それ自身。

【素材】 ソザイ (一)もととなる材料。原料。(二)もちまへ。素質。(三)藝術作品(文學・美術等の)の基礎的材料(自然・人事若しくは経験した事實等)。

【あしらつた】 配合した。

「あしらふ」「あへしらふ」に同じ。(一)挨拶する。應答する。(二)程よくとりあつかふ。響應する。(三)とりあはせる。配合する。

【摸寫】 モシヤ 手で寫しとること。まねて寫すこと。

【近代】 キンダイ (一)近い時代。この頃。近頃。近世。

【動く】 こゝでは、かはる、變ずる、變化する、の意。

【隙】 スキ (一)あはひ。物のすきま。間隙。(二)ひま。いとま。間暇。(三)ゆるんでゐる折。油断してゐる機會。こゝは(一)。

【動かない】 所 必然の位置を占めてゐる趣。本文に所謂「唯一無二」の配列。(一六九ノ二)

【一眸に收める】 イチボウにヲサめる 一目に見渡す。

【眸】 瞳孔。瞳子。眼。

【凝らして】 コらして

【凝らす】 (一)凝るやうにする。固める。(二)集注する。寄せあつめる。こゝは(二)。

【唯一無二】 ユキイツムニ たゞ一つで、二つとないこと。無類。

【生え抜いた】 ハえヌいた 最初から其處に生えてゐる。その地に生まれ、その地に育つた。

【造園】 ザウエン 人間の慰樂・鑑賞に供する爲に、戶外

(二)歴史上、我が國では明治以後、西洋では十九世紀以後をさす。こゝは(二)。

【表現派】 ヘウゲンハ 表現主義 (expressionism) を奉ずる一派。

「表現主義」は、自然主義的又は寫實主義的な印象主義に對する反動として、二十世紀初頭ドイツに於て發生した藝術上の傾向で、最初は美術上の運動として現れたが、世界大戦前後から西曆一九二二年頃に至る爛熟期には文學・建築・演劇等の分野にも及んだ。その特徴は、實證主義に對する理想主義であり、自然中心に對する人間中心であり、相對主義に對する絕對主義であつて、主觀的・動的・非合理的傾向著しく、體驗・直觀を重んじ、神祕的な一新世界の創造を期し、描寫・記録を排して、端的な直接表現を試みようとする。その初期に於ては自然主義的傾向に對する反抗的・進歩的役割を持つたが、漸次微溫的・小市民的な美しい夢物語と墮し、遂に分離解消するに至つた。代表作家に

は、エミール・ノルデ・シュミット・ロットルフ・マック  
ス・ベヒシュタイン等があつた。

【意圖】 イト (一)考。おもはく。(二)まさに行はうとす  
る計畫。こゝは(二)。

【しとく】 (一)しとやかに歩みなどするさま。しづし  
づ。(二)雨などのしめやかに降るさま。こゝは(二)。

【すつぶり】 湯・水などの中に全體つかるさま。全身雨な  
どに濡れそぼつたさま。

【潮が落ちて】 シホが落ちて 潮が引いて。

干潮を「おちしほ」「落潮」といふ。

【磯】 イソ 湖海のほとりの岩石のある所。湖海の波うち  
ぎは。濱邊。

【夕風】 ユフナギ (一)夕方、波・風などがなぐこと。(二)

夕方、海風と陸風とが交替する間、一時、海上が無風の

### 二 解釋

#### 1 主題 龍安寺石庭の美しさ。

#### 2 構想

状態となること。(朝風の對。)

海岸地方で、殊に夏期に於ては、陸地と海面の氣温の  
差から氣壓に高低を生ずる結果、晝間は海から陸へ空  
氣が流れ(海風)、夜間は陸から海へ流れる(陸風)。

この海・陸兩風の交替期に、一時無風状態を呈する現  
象の、朝起るのを朝風、夕方起るのを夕風といふ。

【風】 なぐこと。風が止んで波の穏かなこと。「風」  
は國字。

【景物】 ケインツ (一)四季折々の風景に興味を添へるも  
の。花鳥風月の類。風物。(二)座興を添へるに足る時節  
相應の珍しいたべもの(酒肴など)。(三)連歌・俳諧等  
で、點取の賞として與へる品物。(四)商品に添へて客に  
贈る品。景品。そへもの。こゝは(一)。

【四季の空氣】 シキのクウキ 春夏秋冬の情趣、けはひ。

(1) 相阿彌意匠の石庭(初—一六六ノ四)。

(2) 石庭の趣(一六六ノ五—一六七ノ一二)。

(3) 石庭の趣の視點による變化(一六八ノ一—一六九ノ四)。

(4) 想像せられる、相阿彌の苦心(一六九ノ五—一七〇ノ二)。

(5) 想像せられる、石庭の雨の日の趣(一七一ノ三—終)。

### 3 敘述

〔其の一つを一つとして見てゐても確に味がある。けれども、これをかう集めて見る所に、始めて其の石の一つ一つが本  
當に生きて感じられる。——此の石の一つ一つが孤ではないのだ。しかも單なる群でもない〕——その一つ一つには  
一つ一つとしての個性がある。が、これを他との關係に於て見る時、或は變化性を、或は統一性を發揮して、眞に一  
全體としての生動の趣を具へて來ることが言表されてゐる。

〔砂は白い。方丈の障子も白い。いや、障子は白といふよりも稍曇つた空の色だ。砂も亦其の空をうつす曇つた水の色  
なのだ〕——この、障子の白さ、砂の白さに「曇つた空の色」の反映を見出してゐる所に作者の炯眼が認められなく  
てはならない。しかもその故に又、その砂の色は、空の色をうつす曇つた水の色として感じられてゐる。天地の生動  
を土塀の額縁で劃して、さながら一幅の繪畫に仕立てた觀照力には驚歎せられる。

〔塀の外には楓の木が枝を重ねてゐるが、まだ赤くも染まらず、しかも蟬の聲はもう絶えて、今は秋の最中の閑寂の焦點  
をなしてゐる〕——一幅の繪畫の背景である層々の緑、一劃閑寂の天地の焦點の描出である。

〔石は、大きなの側に小さなのが一つづつ添ふやうに置いてある。或視點から見ると、其の一つが大きな石の後に

隠れる。其の隠れたのを見得るやうな視點に立つと、別の所にある一つが隠されるやうになる——視點による變化を成立させる根本的な一條件であると共に、大きさと充實した力とを示す條件であるに違ひない。

〔彼は先づ、好い石を得る爲に非常な苦心をしたことだらう。さて選ばれた石を如何に置くべきかに、彼は更に工夫を重ねたに相違ない〕——相阿彌の創作力は結局この二つの方法で發揮する外はなかつたであらう。選擇と配置のみによる創作、換言すれば如何なる藝術よりも制限の大きい創作に於て、どれだけ彼が自由さを發揮し得てゐるかが、彼の實力に外ならぬのである。

〔さうだ、確にこれ等の石は生きてゐる、一つ／＼が生きてゐるばかりでなく、全體として生きてゐる〕——前に「孤ではない」といひ、「群でもない」といつたのを、段々と描き、段々と説き來つて、こゝに正面から言表したのである。前には消極的にしかいへなかつたものが、こゝに始めて積極的にいへるに至つたのである。

〔それは石の美をはつきりと現さうといふ心持からでもあらう。しかし、それと共に彼の氣持をはつきりと現さうとしたからでもあるに相違ない〕——石の美の享受と表現は東洋的である。それに即して藝術家の氣持を表現しようとする意欲も亦東洋的である。その故に又、世界的な精神たらうとしてゐる東洋的な精神である。

〔春の雨ならば、先づ砂をしと／＼と濡すであらう。そして石は濡れたといふ程でなく、潤の色が出たといふ位にいきいきしてくるであらう。秋の雨ならば、先づ石がすつぷりと濡れるであらう、潮が落ちて磯の石が濡れたまゝ現れたといふ風に〕——この石庭が天地生動の趣を出すと共に、又それを濡らす雨によつて季節の變化をも表すであらうことを想像したのであつて、石庭の美しさを、相阿彌の意匠に即して美學的に考察しようとして來た方向を一轉して、再び想像せられる石庭美に歸つて文を結んだ所に、作者の用意が窺はれる。

### 三 批評

名園の鑑賞としても、極めて自然に、極めて豊に味ははれてゐる所がいふ。しかもこれに即して東洋的な性質を、日本的な特質を見出してゐる所が注意せられてよいであらう。

### 三 備 考

#### 一 指導の問題

日本藝術の特質で開卷し、繪畫・建築の鑑賞にそれを探つた後、和歌、物語・小説、隨筆・試論、詩等の文學形態を學習し、再び日本藝術の特質を示す庭園鑑賞で卷を結んでゐることも、本課の學習指導上、顧みられなくてはならぬ點であらう。

併しそれは學習の最後の段階に於て考へさせるべき問題であつて、何よりもこの文をこの文として鑑賞させ理解させることが先行しなくてはならぬことはいふまでもない。

この文は、語句としての所謂難語句は極めて少い。随つて註解的努力は多く要せぬ課に違ひない。が、決して學習の容易い課ではない。それはさういふ語句の示す意味が、淡々としてゐて中々深いからである。生徒をして安易な學習に流れしめず、まづ、文字・語句の表してゐるこの庭園を十分に想像に描かせ、作者が想像してゐる景致を残りにく想起させることが肝要な指導であらう。次には、これに即して作者が思索してゐるものを思索させ、そこに具體的に指摘せられてゐる東洋的・日本的な美の特質を會得させることが逸すべからざる指導であらう。

更に、全卷を復習的に取扱ひ、日本文化の、日本藝術の特性が如何なるものであり、又如何なる成立を有するものであ

るかを問題として概観させるならば、一層この課の意義は明らかに理解せられる所があるであらう。

二 参考資料

(一) 龍安寺の石庭に關する外山英策氏の研究を「室町時代庭園史」中の「石」から左に抄出する。

自然界の現象を皆法門と觀れば、谷川の水音も佛法を説く長廣舌であり、山色も亦精淨身である。同じ心もて支那龍門の石窟の佛像を嘲りし偽がある。

鑿破者崖已失眞。又添行客眼中塵。請君看取他山石。不費工夫總法身。

即ち工夫を費さざる石その物が佛の姿であるのに、何を苦しんで彫琢をして、却て眞を失ふのかといふ意である。これを庭園に就て云へば、即ち庭石は彫琢せざる佛の姿だと云ふことになる。庭石が佛の姿を表すとすれば、禪利にては如何なる庭園が造らるべきかや問題である。

禪宗では羅漢を護法神として殊に尊び、古來屢々繪に畫いた。五百羅漢は多きに過ぐるので、十六羅漢が屢々畫かれた。李龍眠は佛を信仰の對象としてよりも、寧ろ鑑賞の爲めに畫いたと稱せらるゝが、嘗て十六羅漢水を渉るの圖を畫きし事がある。羅漢が既に禪家に喜ばるゝものなる上に、更に先述の如く水を渉る事が喜ばるゝのであるから、禪利の庭園の趣向としては最もおもしろいわけである。これを先づ第一に工夫して造つたものが西芳寺の虎の子涉しの庭園である。家屋に最も接近せし黄金池と稱する池水の中央に、十四個の石を殆ど並行に三列に竝べ、一つは離して別の池畔に置いてある。一寸見た所では池水中に造り設けた放出の礎石の遺址のやうではあるが、礎石にしては小さく、又形も悪いので、不思議に思つて數を數へて、始めて俗に言ふ虎の子涉しの庭園であることを知つたのである。十六羅漢が水を渉る様を寫せしものと考へて、十五石を熟視すると極めておもしろい。將に水に入らんとする者あれば、將に涉り終りて陸に著かんとする者がある。池水中の者はそれ／＼放談高笑しつゝ水を渉るのである。池水の清澄なのは特に此の場合によい。

西芳寺のものに就ては未だ何人も知る者なく、唯龍安寺の石庭のみが虎の子涉し、又は虎溪の庭と稱して、獨り名高きものとなつて居る。虎溪の庭と稱する事の不當なるは、此處には説かない。龍安寺の庭は砂を敷きて水を表し、庭中木草なく、唯十五石をすましのみである。水中なれば木草なきが當然であるが、其れが珍らしく思はれる故に喧傳せられて、世に名高き庭園となつたのである。西芳寺のものに比して、砂を以て水面を表したところに、一段の工夫がある。又其の石組も西芳寺の三列に何の奇もなく並行に置きしものに比較して、格段の技巧を弄して居る。其れだけ後世の作である事が推定される。世に細川勝元が男山八幡を遙拜せんが爲めに、庭中に木草を植ゑさせなかつたと説く者があるが、これは全然誤りで、水中なれば木草なきが當然なのである。然して龍安寺の庭園に就て特筆せねばならぬことは、庭全體を水面とした雄大な意匠である。宋人の手に成る名畫に、畫面全部を水となし、中央に緊密なる筆を以て舟一艘を畫きて、茫洋極まりなき天地の廣大を示すものがあるが、これと軌を同じくし、共に禪宗藝術の極致を表すものである。又十五の石が何處よりするも十四しか見えぬ、即ち一つ見えない故に虎の子涉しと稱するといふ説もあるが、誠に兒戯に等しき考へで、無論間違ひである。本來十六すまべきものを、十五しかすまなかつたので、かく云つたのである。然らば虎の子涉しの意味如何んと云ふに、大雲山誌稿に曇庵座元筆記の一節、「龍安寺方丈の前虎の子涉しの石の事」と題せしものが載せてある。龍安寺第四十六世道眼曇菴が安井饒頭菴芳首座漢興の説を記したものである。

後漢書劉琨傳ニ、琨弘農ノ太守トナル。郡中大ニ布仁政。民大和。郡中虎皆渡海而避ク。又外ノ記ニ、琨弘農太守トナツテ布德。故虎皆負子夜中河ヲ渡ツテ避ルト。蓋シ此ノ事ナラン。相阿彌、劉琨ヲ以テ細川勝元ニ比シ、勝元ケ様ノ清淨伽藍ヲ建立セラル、ヲ美シトシテ、其德ヲ稱スル意ナラン。即チ方丈ノ前ヲ河ニ見立テ、且ツハ火防意モアルベシ。若シ實ニ其理ナラバ、相阿彌モ甚學者也。○下

大部分愚にもつかぬ笑止千萬な説であるが、虎の子涉しの意味を考ふる上に都合がよい。即ち虎が河を渉る時に、其の子が他の猛獸に食はるゝ事を恐れて、隠して渉るのであると云ふ。猛獸の虎でさへ子を愛する情愛に變りが無い意味を表して居る。然しこれでは庭園の意匠としては愚劣すぎる。此の事を明白にする爲めには、先づ細川勝元と現存の建造物及び庭園とは關係なき事を説明しなければならぬ。

二二 龍安寺の庭

らないが、後に記すこととする。又何人も信じて疑はないところの相阿彌の作ではなくて、茶人金森宗和の造つたものと考へなければ、この疑問を解決できない。即ち茶人は妙に偶数を嫌つて奇数を好む癖がある。其れを数奇など稱して喜んで居る。茶庭の飛石をふせる場合にも其れがよく分る。木も奇数を好んで植ゑる。そこで十六の数を嫌つて十五としたのである。物品の贈答に、三つ五つ乃至は九つ等の數にする習慣があるのと同じい。

石を佛の姿と見て、庭に居るとすれば、當然庭石に上下、左右、前後があるわけで、石の姿を見て向きを考へ、然して後に石組をするのである。これは容易ではないが、大變おもしろいものである。この理窟は植木屋は知らないが、經驗で無意識の内によつて居る。

(二) 龍安寺石庭の作者については同書の「武將と禪院」の中「細川氏と龍安寺」の章に精しい考證がある。それによれば、龍安寺の石庭は初め「雍州府志」「山州名跡志」「和漢三才圖繪」等によつて細川勝元の作とされてゐたが、「槐記」「都林泉名所圖繪」等に相阿彌作とされて以來、この説が廣く世に行はれて來た。然るに一草一木も無かるべきこの庭に於て相國寺の仁和集堯は「見龍安寺絲櫻」の偈を賦してをり(龍安寺)、天正十六年(二二四八)には豊太閤も亦氏郷・利家の諸雄等と共に此處に遊んで、「方丈庭前絲櫻未開之日。春雪片々」たる風趣を眺めて共に詩歌を詠じ、且「庭の石うへ木以下取べからざる事云々」の禁札を立てさせた(龍安寺)とあるから、今の石庭はこの年以後「雍州府志」成立(天和三年(二二四三)刊)までの間の作でなければならぬ。然らば何人の作なるかといふに「禪林象器箋」の作者、無著道忠(二四〇三)の「龍安誌」に「方丈前庭。有醜石大小數枚。茶人宗和所排置也。名虎子渡。世皆稱巧妙矣」とある如く徳川初期の茶人金森宗和(三三四四)の作で、恐らく龍安寺藏、傳相阿彌筆大雲山圖(この圖にも木庭園を記してゐない)の聯想や宗和と相阿との音韻相似たることから、いつしか相阿の作と誤られたものであらうといふ。

(寺島製本)

昭和十一年四月一日印  
昭和十一年四月五日第一刷發行

國語學習指導の研究卷七  
〔非賣品〕

有所權版

編輯者 岩波書店編輯部  
代表者 岩波茂雄  
發行者 岩波茂雄  
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
印刷者 白井赫太郎  
東京市神田區錦町三丁目十一番地  
精興社印刷

發行所

東京市神田區  
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話(三三) 一八七番 一八八番  
九段(三三) 〇三番(小電話専用)  
振替口座東京二六二四〇番

11.3.31







